

フェンスレス 第5号 目次

前へならえ — 新時代のオリエント	村田裕和	2
-------------------------	------	---

論文

古典解釈の弁証法 — 戦後日本における『紅樓夢』論争の受容と村松暎 —	藤原崇雅	5
--	------	---

資料紹介

武田泰淳「日本文学的命運」の紹介と翻訳 ——上海における日本人居留民の中国語評論——	藤原崇雅	21
---	------	----

特集「浦西和彦の仕事」

浦西和彦先生インタビュー.....	秦 重 雄	37
-------------------	-------	----

葉山嘉樹へ、葉山嘉樹から——浦西和彦先生のお仕事.....	竹内栄美子	49
-------------------------------	-------	----

超人・浦西和彦

——氏のプロレタリア文学研究に導かれて	大和田 茂	55
『浦西和彦 著述と書誌』全四巻について.....	伊 藤 純	61
書誌とリアリティの追究について.....	鳥木圭太	69
浦西和彦編『徳永直全集』の目次案.....	和 田 崇	75
故浦西和彦関西大学名誉教授の業績と研究活動.....	増田周子	89
浦西和彦氏の大阪関係事典・総覧について —— 秋田実に寄せて	佐藤貴之	95
書誌とジェンダー.....	泉 谷 瞬	101
文学の源泉.....	村田裕和	107
酒食への眼差し —— 浦西和彦氏の食文化・味覚雑誌研究	内藤由直	113

表紙 柳瀬正夢（『文学評論』1934年3月号）

前へならえ——新時代のオリエント

ある日の授業中、九〇年代生まれの大学院生たちに「前へならえ」という号令を知っているかと尋ねてみた。すると、全員が「知っている」「やったことがある」と答えたので驚いた。というのも、受講生は日本人一名のほか、中国人二名、エジプト人一名だったからである。

きれいな縦列を作るために、両手を地面と水平にまつすぐ前に突き出すポーズが、民族も宗教も言語も異なる国の学校教育において、まったく同じように実践されている。これが驚かずにいられようか。

この日の授業ではE・サイド『オリエンタリズム』の序説を読んでいた。そこには次の一節があった。

つまり言説としてのオリエンタリズムを検討しないかぎり、啓蒙主義時代以降のヨーロッパ文化が、政治的・社会的・軍事的・イデオロギー的・科学的に、また想像力によって、オリエントを管理したり、むしろオリエントを生産することさえした場合の、その巨大な組織的規律「訓練」というものを理解することは不可能なのである。（平凡社ライブラリー版上巻、二二二頁）

M・フーコーは、権力の内面化をもたらすような監視（「見られてはいても、こちらには見えない」関係（*1））や身体矯正のための身ぶりの反復を「規律^{ディシプリ}訓練」と呼んだ。サイドはこれをオリエンタリズムの分析に応用したのである。

「前へならえ」を挙げたのは、〈規律「訓練」を身近な例で示したかったからだ。しかし、はからずもこの号令は、オリエントに属する三つの国に共通するディシプリンであることがわかった。

日本の学校で現在も用いられている号令は、西洋式軍隊の育成のために蘭学者（兵学者）たちが紹介・翻訳したもので、幕末の農兵訓練に役立てられ、その後陸軍の歩兵教育に採り入れられた。「気ヲ着ケ」「休メ」「右向ケ、右」「廻レ、右」などは、すでに明治初期の「歩兵操典」（＊２）に記されていて、終戦時まで一貫して兵の基本動作として訓練されていた。また、これらはそのまま中学校体操科の兵式体操（＊３）に応用された。

こうした号令は、「国民」を管理したり、むしろ「国民」を生産することさえした「巨大な組織的規律＝訓練」のディスクールの一つであったといえよう。私たちは、幼い頃に繰り返し注意されながら校庭や体育館に並んで「気をつけ」や「前へならえ」を反復したおかげで、ずいぶん権力に対して従順ですなおな、統治しやすい身体になっているように思われる。西川長夫は、「国民化が文明化であり、またそれが文明化である限り植民地主義を内包している」と指摘していたが、号令による「国民化」は、「植民地主義の倒錯した内面化」（＊４）でもあったのである。

ただし、「前へならえ」の号令だけは、「歩兵操典」や兵式体操の教科書に見あたらない。その意味では、現代の「前へならえ」は、軍事教練型のディシプリン（「気ヲ着ケ」「休メ」）とはやや異なる役割を発揮しているのではないかと例えば、エスカレーターの片側あけの慣習に象徴的に表れているように、「前へならえ」はほとんど強迫観念といってもいいほどに内面化されているが、同時に誰でも瞬時に理解し実践できるほどに単純化され普遍化され、なおかつ道徳化された呼びかけである。その一方で最近気づいたのは、二列に並ぶべき場所で一列にしかな並べないという現象である。見知らぬ他者の横に並べないことや、列の先頭に立てないことが、「前へならえ」——正確には「後ろへ従え」だろう——を後押ししているのではないか。そこにあるのは内面化された権力への自発的服従というよりも、眼前の状況に対する無自覚な追従だけだ。

サイドは、「オリエントを管理したり、むしろオリエントを生産する」といった効果をもたらす言説としての「オリエンタリズム」を検討すべきだと述べていた。だが、「植民地なき植民地主義」（西川長夫）の時代にあつて、「オリエント」という言葉を地政学的なカテゴリーとする必然性はもはやどこにもない。地球上のあらゆる場所が植民

地主義的状况を生み出す可能性を持っているのだとすれば、前へならう身体は、むしろこうした現代の〈新〉植民地主義的生産管理システムに適合された人間、すなわち新時代のオリエントを構成しているのである。

私たちは、世界中のあらゆる場所でバラバラに漂いながら、いつでも集合・整列・解散可能な身体として準備させられているのだらう。そこではもはや国家による管理を頂点とする複雑で階層化された〈規律＝訓練〉は必要ない。生産・流通・消費のシステムが個人に合わせてシステムの側を最適化してくれるからだ。「前へならえ」の単純明快さとその普及力は、民族も宗教も言語も超越した従順なる身体の誕生を告げているように私には思われた。

(村田裕和)

*1 ミシェル・フーコー著、田村俤訳『監獄の誕生』(新潮社、一九七七年)二〇三頁。

*2 『新式歩兵操典生兵の部』(陸軍省、一八七八年)

*3 生田清範編『図入兵式体操教範卷之一』(金港堂、一八八六年)、『師範学校新制体操教科書』(大正洋行出版部、一九三九年)など。

*4 西川長夫『〈新〉植民地主義論』(平凡社、二〇〇六年)二七頁。

古典解釈の弁証法

——戦後日本における『紅樓夢』論争の受容と村松暎——

藤原 崇雅

1 先行論の整理と本稿の目的

短く刈った巨大な頭に小さめのメガネ、その奥で見開かれたくつきりとした眼。花山文芸出版社から、一九九七年に出版された『俞平伯全集』第一巻には、その『紅樓夢』研究が人口に膾炙し、周作人や林語堂らとともに小品文運動を展開したことで知られる文学者・俞平伯（ユウピンボク 一八九九—一九九〇）の、凜とした表情の一葉が収められている。

清末の古典学者であり、『三侠七義』の作者として知られる俞樾ユウエの曾孫として生まれた文人は、現在でこそあまり知られていない。しかし、彼は一九五〇年代の中ごろ、中国はもとより日本でも、その名を知らない者はいないほど著名であった。皮肉なことに批判されたことによって、そうなった。『紅樓夢』

解釈をめぐる思想闘争、通称『紅樓夢』論争が中国で展開され、その動向が日本において紹介されたのである。

『紅樓夢』論争とは、山東大学の学内誌に李希凡リシーファン（一九二七—二〇一八）と藍翎ランリウ（一九三二—二〇〇五）が発表した『『紅樓夢簡論』そのほかについて』（原題「關於『紅樓夢簡論』及其他」）が中国共產党の理論誌『文芸報』に転載されたことをきっかけに、古典文学研究の権威であった俞平伯批判の風潮が高まり、李希凡らをサポートする文献が数多く発表され、俞平伯が自身の古典解釈を訂正した一連の過程のことである。中華人民共和国の成立を背景に、進歩的な研究者たちが、実証主義的な解釈に反駁した論争で、『紅樓夢』という作品が、作者の自伝なのか、それともそれを越えた社会批評なのかが争われた。規模としても、『文芸報』や『人民日報』を中心に約五ヵ月間に二〇〇篇近くの論

文が発表されるほどの大きなものとなり、一九五五年六月に作家出版社編集部編『紅樓夢問題討論集』全四卷（同出版社）が、同時に出版されることとなった。

周作人ほか『現代支那文学全集 文芸論集』（吉村永吉ほか訳、一九四〇、東成社）収録の邦訳論文や、目加田誠「兪平伯氏会見記」『中国文学月報』一九三五・五、竹内好「旅日記抄（二）」『中国文学』一九四二・七といった文献も確認されるため、兪平伯の名は、中国現代文学に興味をもつ者なら論争以前からすでに親しみがあつた。しかし、専門家にしか知られていなかった文名は、中華人民共和国の論壇状況の受容を通じて日本の知識人、ひいては文学に興味をもつ一般の人々にまで知られることになったのである。

日本の研究者が、兪平伯批判の意見に夢中になる一方で、中国のアカデミズムにおけるイデオロギー批評の広がりに対する疑念もまた、当時表明されていた。『紅樓夢』論争と同時期に行われつつあつた知識人の思想改造は、その苛烈さが日本でも問題となっており、兪平伯批判もまたその動向の一部ではないかと目されたのである。児童文学者・謝冰心との対談「新中国の作家生活」『世界』一九五五・一〇）で奥野信太郎は当該の論争を話題にしつつ、それを胡風が反革命的作家として立場を問われた、いわゆる胡風批判と結びつけている。²「最初胡風は純粹の文芸問題から批判されていたのが、だんだん問題が移つて、スパイ問題に発展して来た」。奥野は文芸論争と知識人の思想

改造とが、共産党体制においては地続きの問題であるとしたうえで、論壇のあり方に疑義を呈し、兪平伯批判が同様の事態に陥つてはいないかを問うた。この疑義は謝冰心によつて即座に訂正されるが、『紅樓夢』論争は中国のいき方を支持するものとしてだけ受容されたわけではなかったのである。

『紅樓夢』論争については先行研究もある。たとえば、丸山昇は『紅樓夢』研究批判』（『文化大革命に到る道』二〇〇一、岩波書店）の中で、「そもそも一八世紀の中国で書かれた、作家主体の意識も違う作品に、文芸復興、市民革命等々数世紀にわたる近代欧米文学の歴史の中から生まれた「リアリズム」概念を適用することができるのか、できるとしても、そこからはみ出るもの、あるいはその言葉で覆うことによつて視野から落ちるものがないかどうか、といった大きな問題があるはずなのに、それはほとんど意識されていなかった」と、兪平伯に対する批判の公式主義を非難している。

大規模ゆえに概観さえ難しい論争の急所が端的にまとめられた先行論は、貴重なものだ。ただし、丸山の研究は論争そのものについて考察しており、日本においてそれがどのように受容されたかを明らかにするものではない。時期からいつてこの論争は、中国共産党が行った文化政策のもっとも早いものであり、日本の知識人たちにとつて大きな関心事となった。その関心のありようの検討は、戦後日本における中国文学研究者の態度を測るうえで重要なはずである。本論では、『紅樓夢』論争を日

本において紹介、受容した言説の検討を通じて、戦後日本における中国の文芸動向を受容する枠組を素描してみたい。

2 『紅樓夢』論争の発生と展開

そもそも『紅樓夢』とは、『石頭記』という原題をもつ清代初期成立の口語体小説で、全一二〇回の長さを誇る。前八〇回は曹雪芹^{ツァオシェン}作、その後四〇回を高鶚^{ガオウア}が補ったとされ、美貌の貴公子である賈宝玉^{ジャウペイユイ}と従妹の林黛玉^{リンタイユイ}との悲恋物語を中心に、宮廷生活が豪華絢爛に描かれる。長さや内容の類似から『源氏物語』と並び称されることもある、人口に膾炙した中国古典を代表する作品である。⁽³⁾ 俞平伯は以前より『紅樓夢』の研究書を公にしており、すでに大家の地位にあった。ただし、「紅樓夢簡論」の題名が先ほどの李希凡と藍翎の論文の標題に含まれることから分かるように、批判の対象となつたのは雑誌『新建設』一九五四年三月号に俞平伯が発表した論文であつた。俞平伯は、共產党の理論誌において、自説を改めて述べたのだが、その文献が批判されたのだ。「如紅樓夢主要觀念「色」「空」（色は色欲之色非仏家五蘊之色）明徒金瓶梅来」（紅樓夢の主要な觀念は明の時代の金瓶梅よりもたらされている「色」や「空」（色は仏家五蘊の色ではなく色欲の色である）という觀念のようだ）と述べる俞平伯は、『紅樓夢』の主題を人生をとり巻く觀念、性欲や無常さに還元する。

俞平伯の古典解釈は中国古典の代表作『金瓶梅』を踏まえて論が組み立てられていることから分かるように、典拠論的な性格を有している。「紅樓夢簡論」は文学エリートの家系で育つた文人の素養に支えられた、実証的なものであつた。しかし、その結果至つた結論に、「社会主義リアリズム」が批判の対象とする術語、「觀念」が用いられたことが災いしたのである。⁽⁴⁾ 李希凡らは俞平伯の論をつぎのように批判している。

紅樓夢不是「色」「空」觀念的具体化，而是活生生的现实人生的悲剧。人們通過作者筆下的主人公的悲剧命運所獲得的教育不是墮入命定論的深淵，而是激發起對於封建統治者及其全部制度的深刻的憎恨，對於肯定人物宝玉黛玉的熱烈同情。所以把紅樓夢解釋為「色」「空」觀念的表現，就是否認其為現實主義的作品。

李希凡、藍翎「關於『紅樓夢簡論』及其他」

『文芸報』一九五四・九・三〇

紅樓夢は「色」や「空」という觀念の具体化ではなく、生々しい現実の人生の悲劇にほかならない。人々が作者の筆を通して学びとるのは、宿命論にしたがつて深淵に落ちいくことではなく、封建的な統治者およびその全制度に対しての嫌悪や、宝玉・黛玉への熱烈な同情である。紅樓夢を「色」や「空」という觀念と解釈することは、それがリア

リズムの作品であることを、まさしく否認することになつてしまふのだ。

李希凡、藍翎『紅樓夢簡論』そのほかについて

『文芸報』一九五四・九・三〇

李希凡と藍翎は、宮廷社会が腐敗し、終焉に向かう過程が示される「現実主義」(リアリズム)を作品に読みとる立場から、『紅

樓夢』の主題が「観念」であることを否定する。この批評の枠組が、毛沢東が一九四二年五月に行つた「延安の文芸座談会での講話」に基づいていることは明らかだ。「われわれは社会主義リアリズムを主張する」とあるように、この講話ではリアリズム、つまり現実主義が価値のある創作、あるいは批評理論として提出された。⁽⁵⁾郭沫若が芸術工作者第二回代表大会開会の辞で「毛主席の『延安文芸座談会における講話』が発表されてから、われわれの文学・芸術活動は明確な社会主義リアリズムの基本的方向をもつようになった」と述べているように、⁽⁶⁾体制確立以後影響力を増した講話は一九五〇年代半ば、古典解釈をめぐる研究の領域にも影響を与えることになった。

断つておけば、五四運動や日中戦争、国共内戦期を生き抜いた文人である俞平伯は、「紅樓夢簡論」において自身の過去の古典読解を、ただ単に再論したわけではない。『新建設』が体制変更後の理論誌であることを踏まえ、『紅樓夢』が貴族階級の没落を表現した読み物である点にも言及している。その論文

は共産党体制下で自身の意見を公にしていくなかに十分意識的であつたといつていい。しかし、その老成した書き方をもつてしても、勇み足の青年たちの批判の矛先が自身に向くことを防ぎきれなかつた。俞平伯は実証主義に閉じこもる書き手では決してなく、むしろ自らの営為に極めて自覺的な文学者であつたのだが、⁽⁷⁾彼が想像する以上に既成の研究を批判する向きは、強まっていたのである。

この論文は党の機関理論誌である『文芸報』に転載されたことで、同様の批判が大量生産された。たとえば、毛星「評俞平伯先生的「色空」説」(俞平伯先生の「色空」説を評す)、『人民文学』一九五五・二は、「如果要説「色空」観念、那麼這種悲觀嘆息、這種人生夢幻的説法、就可以説是「色空」観念的成分。但所有這些、在全書佔的地位是很不動要的、絶不能把它加以誇大」(「もしも「色空」という観念を説くことが必要なら、悲嘆や嘆息、人生が夢のようなものであることがそれを説明する要素となる。ただし、これらは些細なことであり、本書全体の中ではあまり重要なこととは言えない。誇張して表現してはならない」と、李希凡らとほぼ同様の論旨を展開している。

毛星のような批判が続出した結果、俞平伯は、「堅決与反動的胡適思想劃清界限」(きつぱりと反動的な胡適の思想とけじめをつける)、『文芸報』一九五五・三・一五)という自己批判論文を発表し、「我不但錯認了「紅樓夢」的客觀效果、即对我自己研究「紅樓夢」的作品所發生的效果也非常麻痺」(私は誤つて「紅樓夢」

の客観的な効果を認めなかったばかりではなく、自分の研究がもたらした効果について鈍感であった」と、自身の立場を否認するに至った。俞平伯が感じていた圧力の大きさは、自己批判が「客観」というマルクス主義批評の用語によってなされている点はもちろん、明末文学者の文体模倣でならした文学者一流の、曖昧な調子が完全に放棄されているところにも看取できるだろう。

李希凡と藍翎の論が、党の基本方針に沿っていることは明らかである。しかしこのような主張は戦後日本において、研究者らには熱烈に歓迎され、新聞メディアからは批判的にとり上げられた。中国共産党の文芸思潮は、支持および不支持、両方の立場から紹介されていく。

3 戦後日本における論争の受容

一九五一年一二月、吉田茂首相は台湾の国民政府を正統政府と認め、中華人民共和国とは講和しないことを言明した後、「日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約」が発効した一九五二年四月二八日に、日華平和条約に調印した。対して中華人民共和国政府は、非軍国主義化を条件としたボツダム宣言に逆行する日本の動きを警戒し、一九五〇年二月、「中華人民共和国とソビエト社会主義共和国連邦との間の友好、同盟及び相互援助に関する条約」を締結する。その第一条で、日

本帝国主義の復活と日本の再侵略があった場合、共同して阻止することを謳い、日本は中ソ共同の仮想敵として定位された。一九五〇年代は東西の対立が国際関係において、明らかに構造化された時期だったのである。⁹⁾

しかし、こうした国際関係をアメリカによる日本占領の徹底と捉える立場から、同時期の論壇では独立国家として再出発を果たした中国を、支持する論調が広まっていくな。古典評価の問題がまず表面化したのは、中国現代文学研究のバイオニア、竹内好の起こした国民文学論争においてである。⁹⁾ 国民の抛りどころとなる民族性の構成に寄与する文学を求める傾向は、過去の文学の再評価をめぐる批評の機制を、再編することになった。¹⁰⁾ 『紅樓夢』論争の紹介は、国民文学論の盛り上がりが耕した土壌の上に花開いていくことになる。

『紅樓夢』論争を受容する言説にはふたつの種類がある。それを支持するものと、批判するものである。まず量的に圧倒的に多い前者から確認していこう。典型的な論争の紹介としてはまず、君島久子、立間祥子、檜山久雄の連名の論文「紅樓夢論争とその展開」(『北斗』一九五五・四)が挙げられる。「今回の運動は、知識人の間にマルキシズムの文学観を徹底させ、「人民のための文学」という立場に統一させることによって、文学界に新しい発展をもたらそうとする大きな意義をもつものと見てもよい」と述べるこの評論は「マルキシズムの文学観」が「大きな意義」をもつことを前提としている。比較的若い世代の研

究者でもある君島らは、兪平伯と李希凡らのうち、後者の立場を熱烈に支持しているのである。

隣国で達成されつつある文学の大衆化への憧れが感じられる。発言は、つぎのようなものだ。

また竹内実「紅樓夢論争・その後」(『図書新聞』一九五五・四・二)も、兪平伯批判に可能性を読んでいる。ただし竹内は、李希凡と藍翎以降の文献もよく読み込んでおり、批判のバリエーションが、「市民派と封建派」に区別できるとする。「当時の市民層の勃興、資本主義的要素の成長、市民意識の高揚をどの程度にみとめるかによって、この論争が生まれている」とする竹内は、原文を精読した結果、『紅樓夢』に描かれた歴史的段階の捉え方として、封建社会の終わりと市民社会のはじまりとの、二種類の存在を認めている。批判文献の丹念な読解に支えられた成果だが、しかしそれでも『紅樓夢』のリアリズムが「社会の本質」を捉えているとすることへの疑いを、竹内が有しているわけではない。この紹介も、論争が積極的な価値を有することが自明とされている点においては、『北斗』のものと似る。

思想闘争といわれる紅樓夢論争は、実は学者も学生も、作家も評論家も教師も加わって、さらに広く大衆が参加しようとしているような、学問をほんとうの学問にする闘争だが、学問にその本質を発揮させる国民的運動を展開しえないわが国では、源氏研究そのものにしても、宣長のもののあわれ論をやや曲解した「もののあわれ論」が依然横行し、源氏とリアリズムと何の関係があるか、主題性の発展などというのは近代文学をまねたにすぎない、というふうにその新しい到達は打ち消されようということが少くない。

益田勝実「紅樓夢論争と源氏物語研究」

(『日本文学』一九五五・四)

さらに論争は、日本の古典文学研究にまで影響を及ぼした。益田勝実の評論はその端的な例である。以下の引用は『日本文学』に掲載されているが、この雑誌を機関誌としてもつ日本文学協会は同時期、同氏らを中心とした進歩的な文学研究者が集う集団として出発したばかりであった。⁽¹⁾戦争中の文学研究を反省し、新しい方法の確立を目指す日文協の雰囲気と、中華人民共和国のいき方は共振したのだろう。益田の書きぶりからは、

益田は、学問が大衆参加の場となっていることを評価したうえで、日本の文学研究の後進性を批判する。中華人民共和国では、青年らが文学解釈を重要な問題と捉え、その解釈を積極的に更新しようとしている。対して日本の古典研究、たとえば源氏物語の読まれ方においては、旧弊な解釈が批判されていない。益田の言説には、作品における宮廷社会の腐敗や市民社会の勃興という積極的テーマを読みとらない源氏研究を遅れたものとし、論争における批判を論壇のありようとして理想化する機制が看

取される。¹²⁾ 論争が大眾同士、対等に議論できる関係のうえに成り立っており、問題が持ち上がったとしても、対話を通じて解決できる。そういった、樂觀的とも受けとれる中華人民共和国観に益田は支えられている。

青年層が論争に参加し、民主的な言論空間が成立しつつあることを支持する言説は、このほかにも、今村与志雄「紅樓夢研究の動向」『世界文学』第四号、一九五五、刊行月不明）、魚返善雄「海外ニュース 中国」『出版ニュース』一九五五・二・一二）、竹内実「『紅樓夢』をめぐる思想改造」『中国経済年報』第九集、一九五五・二、本郷賀一「『紅樓夢』をめぐる思想闘争」『世界週報』一九五五・三・二一）、今村与志雄「『紅樓夢』論争について」『文学』一九五五・五）、武田泰淳「古典の再評価」『文芸』一九五五・七）など、数多く確認される。

ただし、思想闘争を非難する言説もある。「ヤリ玉にあがっているのは兪平伯だが、そのねらいは、古典に対する思想の統一にあるらしい」、「洗脳運動はここまで及び、学者も昔のままの『夢』をむさぼってはいられないわけだ」と、『朝日新聞』夕刊の記事「紅樓夢」（一九五四・一二・二三）は論争を批判している。また同紙は、「紅樓夢」をめぐる思想闘争」『朝日新聞』朝刊、一九五五・一・一〇）でも、「マルクス主義思想を国民に広く普及しようとするネライを持つものであることにまちがいない」との論調を展開している。

『朝日新聞』が洗脳運動と呼んでいるのは、中華人民共和国

で開始されつつあった、知識人の思想改造のことである。知識人の思想改造は本稿の冒頭で採り挙げた胡風をめぐる批判が有名だが、ほかに一九五一年末から翌年にかけて実施された三反五反運動もある。贈収賄、脱税、国家資材の横領、原料手間のごまかしなどをとり締まる名目のもと、遅れた思想をもつ知識人を改造する運動であった。¹³⁾『紅樓夢』論争を、中華人民共和国の体制がマルクス主義に沿わない知識人を排除した思想改造と連絡して捉える視座も、戦後日本の論壇においては、報道のうちにあったのである。

引用してきたように、『紅樓夢』論争の受容をめぐることは、青年らの読解および論争姿勢を支持する立場と、支持しない立場に分かれていた。文化大革命を経て、中華人民共和国における文化・文学をめぐる議論が苛烈な権力闘争の手段として利用されたことが暴露された今日においては、論争支持の言説は中国のアカデミズムが政治動向と地続きであることを捉え損ねており、対して青年たちを批判する言説は正當なもののようにも思える。ただし、中国の体制が変更されたばかりであり、文化大革命のような時期に比べて、批判もまだ苛烈には成りきっていないかった状況を踏まえると、日本の知識人たちのほとんどが兪平伯を批判する青年らの支持にまわったのも、仕方なかったと考えられる。実際、兪平伯はすぐに自己批判を行なったこともあって、その後も人民共和国において地位を保持し続けている。しかしながら、支持不支持の二項対立的な枠組からはみ出

るようなかたちで、論争受容を行なった、村松暎（一九二三―二〇〇八）という人物がいる。彼は論争の成否を問うのではなく、自らも論争に参加していくような、独自の立場から意見を展開していった。

4 村松暎の中国文学研究

一九四〇年代から五〇年代にかけての中国文学研究は、既成の漢学やシノロジーへの批判から出発した、中国文学研究会が中心にあったといっている。東大グループが周辺の研究者を誘い入れ結成されたこの会は、戦時下において一時的に休止状態となったが、そこで活動した文学者らはその後、それぞれの持ち場で業績を公にしていた。特に、東京都立大学に籍を置いた竹内好のもとでは、継続的に研究者が輩出された。また、東京大学における魯迅研究会の組織や、関西でも現在にまで続く中国文学研究会が結成され、中国文学研究の拠点となっていた。⁽¹⁴⁾

村松はこのような潮流からは離れた場所、慶應大学に籍を置いていた。上海を愛した梢風の息子である暎は、白話小説に興味を集中させ、新たに組織された中国研究の動向には組しなかった。慶應大学を退任する際の記念論集に寄せられた村松暎「定年に当たっての感慨」『芸文研究』一九八九・三）では、彼が中国文学研究をはじめたあらしが振り返られている。慶應中等

部の教員をしていた村松は、大学部の教員として赴任した奥野信太郎の指名によって助手となる。村松が自らの文芸観について、「異端」や「我流」という言葉を用いているように、影響力のある研究会から離れた場所で、一人研究を開始していったのである。

ただし、彼は現代中国の動向に無関心ではなかった。『毛沢東の焦慮と孤独』（一九六七、中央公論社）や、『中国三千年の体質』（一九八〇、高木書房）など、共産党体制を論じた成果を着実に発表したように、村松は現代の状況にも強い関心をもつ研究者だった。⁽¹⁵⁾

彼が研究者としての最初期に行なった仕事に、宋代の通俗的な短編小説の翻訳である『杭州綺譚』（一九五一、酣燈社）がある。⁽¹⁶⁾ この著作の「解題」において、村松は「中国の思想は大体において実用といふことが重んぜられてをり、処世の法については千万言を費してゐるにもかかはらず、その奥に横たはる人間性の問題の如き直接役に立たぬことについては殆ど触れてゐない」と述べている。村松は、中国における文学が現実反映的な観点から読まれることで、個別の人間が抱える心情などがよく検討されないことを問題視していた。彼が直接に批判しているのは、明清期における文学に社会的実用性を読み込む読解コードである。ただし、そのような読解コードが、体制変更後の中国においても回帰することを、「それが新しい形で現れて来る危険性も十分に考へられる」と、村松は予示している。現

実を規定するイデオロギーを踏まえた読解コードが、イデオロギーの命題を変えながら連続していく可能性を、村松は指摘するのである。

イデオロギーを投影する読み方を退ける村松は、自身の読解において小説の創作的要素を積極的な価値として析出するという書き方を採っている。そのことは、村松がまとまった意見を提出した「紅樓夢の小説性」(『芸文研究』一九五五・二)から窺える。

この論文は、周汝昌という紅学の徒が一九五三年、棠棣出版社より刊行した研究書、『紅樓夢新証』への反駁として書かれている。周汝昌は、兪平伯に似た立場の実証的研究者で、作品の注釈書に記されている解説を手がかりに、『紅樓夢』が作者の自伝であることを論証しようとする。この著作に対して村松は、批語と作品とのずれに注目する。たとえば、周汝昌は賈家と曹家の同一性を強調するのに対して、村松は賈家と比較して曹家の富がその何分の一かであったことに光を当てる。周汝昌は『紅樓夢』を自伝的小説として読解しようとするのだが、むしろ自伝からずれる要素の多い小説であることが証明されると、村松は指摘するのである。

「紅樓夢の小説性」は先行論のあげ足とりのようであるが、よく読むと村松の『紅樓夢』に対する評価軸が分かる。「曹雪芹は単なるレアリストであつたのではな」く、「小説のなかで自分たち「曹雪芹と死んだその恋人——引用者注」を結びつけようと企てたロマンティストでもあつた」。村松は、『紅樓夢』

が作者の実人生を核に虚構の創作が試みられた、中国文学史上、貴重な作品として評価しているのである。「天上の世界から、互いに恋すべく運命づけられて、またその恋は遂げられずに終るべく運命づけられて降ろされた」と評価する村松は、作品の創作的な部分を前景化して読もうとする。村松は『紅樓夢』を、「小説性」を有した作品として価値づけるのである。¹⁷⁾

「紅樓夢の小説性」を公にしたことから分かるように、村松は慶應大学に赴任後、『紅樓夢』に興味を集中させていた。先に引用した、「定年に当つての感慨」でも、「紅樓夢論争が起つたのは、私が『紅樓夢』に耽溺しているころ」とある。村松にとつては研究者としての出発期にあたる一九五〇年代半ばに、『紅樓夢』論争が発生したのだ。すでに自身による『紅樓夢』評価を確立させつつあつた村松は、『紅樓夢』論争を受容するにあつて、兪平伯と李希凡らどちらかを支持するのではなく、創作性の読みとりという観点から、両者の意見の部分的な評価を行いつつ、自身の意見を論争中の意見に併記していく文献「紅樓夢論争に対する批判」(『芸文研究』一九五五・二)を公にした。

この文献の中で、「革命につきものの行過ぎも部分的にあつたが、それも時の経つにつれて、それなりの落着きを見せてきている。だからといって、(中略)中国で行われている紅樓夢の解釈を、無批判にそっくりそのまま頂戴しなければならぬ義理合ひは私どもにはないのである」という村松は、兪平伯批判を認めつつも、李希凡らの意見にも組することがない。まず、

李希凡らに対して村松は、「宝玉の反封建闘争の意義を強調するというのは明らかにいきすぎである」と述べ、「彼は女の子を相手に勝手に熱を吹く以外にはこれといったことは一つもしていない」と、マルクス主義的読解の根拠不足を述べる。賈宝玉は、「闘争」などといえるような積極的な行動のできる男ではない」のだ。

李希凡らによる俞平伯批判が部分的に支持されているところもないではないが、基本的に村松はマルクス主義批評の性急さを再検討しようとしている。村松は、論争において優勢であった李希凡らの意見に修正点を多く見出すことによって、『紅樓夢』解釈を片づいたものとせず、いまだ検討を要する議題であることを読者に印象づけているのである。さらに村松は、俞平伯や李希凡らの意見、そのどちらでもない三番目の意見として、自らの作品読解を併記することも行なっている。たとえばつぎの箇所では、作品の主題を説明した部分として煩繁にとり挙げられた色空説について、独自の解釈が開陳されている。

現実世界は仮のものであり、天上世界こそ真のものである色即是空的なものは、この意味で作者の唯美主義思想を支えている骨格である。これを曹雪芹は「色空」という仏教用語で表現し、俞平伯はそれをそのまま仏教的に解釈し、批判者もそのままうけついで解釈するので、ひたすら消極的なものと見なすことになるのだが、この一見色空的

な現実否定的なものが、紅樓夢の中では美を永遠のものたらしめるという積極的な役割を果たしているのである。

俞平伯は作品中の色空という言葉をも、仏教における色即是空、人生は無常であるという解釈を行なった。対して李希凡らは、俞平伯の解釈を政治的に文脈化し、貴族階級の没落として読んできた。両立場を踏まえ村松は、仏教的にこの語を解釈することから決別を図る¹⁸⁾。村松は、色空を作者である曹雪芹の唯美主義的な考えが端的に表現された語として捉えることで、『紅樓夢』を創作性の高い作風として理解しようとするのだ。

5 古典解釈の弁証法

俞平伯は作品における典拠との関係や、作者の自伝的要素と対応する箇所を前景化しており、また李希凡らは主人公をとり囲む宮廷社会の状況を前景化していた。これに対して村松は、冒頭にある神話的要素を前景化している。どこを前景化するかで、作品の解釈が変更されるのは当然といえば当然だが、重要なのは論争を受容した村松が、論争における二様の意見と、異なる自らの意見を併記している点である。俞平伯と李希凡らの意見は、どちらもが支持されなかったりで整理されることで、論争が係争中である印象を読者に与えていたが、さらに村松は自身の作品解釈を示し、解釈の複数性を示してみせたのである。

もちろん、創作性を重要視する自身の立場を軸として書かれている以上、村松の意見が説得力を持つているようにも読め、三者の意見は平等に扱われているとは言いがたい。ただ、自分の意見を唯一の読解ではなく、今日における読解可能性のひとつとして提示する書き方は、日本においてもしかも我流で中国文学を読んできた自らの解釈を論争空間に繰り込もうとする、村松の一風変わった態度として理解できるだろう。

自覚的なものではないだろうが、村松の独特の言説は、台湾出身の理論家である陳光興^{チンクワン}が、中国を対象として研究を行う際の態度として定式化した、「弁証法」と呼ぶ方法だと捉えられる。陳光興は、溝口雄三という研究者の議論を踏まえ、つぎのように述べている。

私の理解で言うと、溝口が意図したのは、内在的に中国を理解するだけでなく、そのためにこそ内在的にそれを超越し、さらにお互いの相対化を通じ、また客体化を媒介的プロセスとして、「中国」と「日本」についてこれまでと異なった理解に達することである。すなわち、ナルシシクな Being ではなく、相互転化へと解放された Becoming である。

陳光興「アジアを方法とする」(丸川哲史訳『脱 帝国』

二〇一一、以文社)

陳光興は、中国について研究を行うと、それがすなわち日本

国内の状況へと文脈化され、対象を軽視した中国理解となってしまう危険性を、溝口の評論から読みとっている。それは単に希望する日本社会を、中国を媒介にしつつ述べた記述に過ぎない。本稿の文脈にこの知見を転用すれば、『紅樓夢』論争を理想的なものとして支持する立場から紹介する言説と、思想改造として不支持の立場から紹介する言説は、日本を中国化するかあるいは中国化しないかという点を争っている点で、非弁証法的な記述に陥ってしまった 것이라고考えられる。論争受容の二様の言説は、中国に関心を払っているようにでいて、隣国で示された状況に対して局外から判断を下すだけの、凡庸な意見にほかならない。

これに対して、村松は『紅樓夢』論争で示された解釈に対して、自らの解釈を併記するという方法で受容文獻を書いている。これは、中国の文芸解釈の是非を問うのではなく、中国の古典解釈に自らの解釈を併記し、そこに止揚の可能性を胚胎させることで、さらなる高次の意見が生産される契機を生み出す結果をもたらすだろう。他の受容文獻において論争は、支持か不支持かという非生産的な判断がなされるだけであったが、村松は自らの解釈を踏まえたうえで論争に参加するような態度をとったのである。

重要なのは、日本の学者によって論争が係争中のものとして捉えられ、そのうえで中国の古典解釈と日本の古典解釈による弁証法の契機が、論争空間に埋め込まれたことである。この手

続きによって、『紅樓夢』解釈は単に中国だけのものではなく、日本も含めた東アジア規模で争われることになり、そこには論争を係争中の動態として留める道が開かれる。もちろん、そこまで大きなうねりを生むことはできなかったが、しかし彼が受容する際にとつてみせた振る舞いは、議論を開いていく可能性を有していたのではないだろうか。

そして、古典解釈の弁証法は、興味深いことに現実的なレベルでも実践されている。村松は、「紅樓夢論争に対する批判」を公にした直後に中国へと渡り、俞平伯や李希凡らに、自らの『紅樓夢』読解を開陳し論戦をもちかけたのである。その顛末は、『中国で会った人たち』『文庫』一九五六・二二で報告されている。著名な文学者でもある郭沫若に歓待された村松は、彼が招待してくれた宴席で俞平伯と会った。白くなつてしまつた頭をイガラ栗に刈つた小柄なお爺さんで、ひどい南方訛りがあるという印象を残しており、最高の教養を有する大家をやや皮肉つているが、これは村松の忌憚ない性格がにじみ出た記述なのだろう。

対話はというと、村松が『紅樓夢』を調べている」と言つと、そのことを知らなかつた俞平伯が「紅樓夢問題を知っているか」と返答し、それに対して村松が「はじめから非常に興味深く見ていた」と答えると、「君はどう思う」とあちらから聴いてきた。これを受け村松が、「わたくしは先生の意見には反対です」が「しかし、先生に対する批判者の意見とも違います」と言つと、俞平伯は「そうか、そうなけりゃいかん」と答え、「わたしの研

究は趣味でやつていたので、どうも研究と言えるようなものではない。君にも教えてもらわなければならないが、書いたものがあつたら是非読めないか」と対応を試みせた。

大規模な批判がされたとはいえ、年齢、文名、語学および文学のリテラシー、どれをとつても圧倒的な俞平伯からそう言われた村松は、「恐縮を通りこして、いささか返答に窮してしまふ。俞平伯が創作者から研究者になつたのは、おそらくその創作に含まれる批判性が時代とあつてきを起すようになったことが主要な理由のため、趣味でやつていたわけではない。しかし、腰の低すぎる余り卑屈な印象さえある態度で接した俞平伯と村松の間には、それ以上の意見交換がなかつたとしても、対話の回路が設置されかけていたのである。

また、村松の噂を聴きつけ、今度は李希凡と藍翎が来訪する。村松は文章を通じて、「さぞ気の荒い、人を眼中におかぬといった、血氣盛な連中」だと予想していたが、実際に会つてみると彼らは、学生と話をしているような気さえるほど朴訥とした雰囲気青年たちであつた。村松が挨拶すると彼らは開口一番、「自分たちのやつたことは、とても研究などといえるようなものではない」く、「俞平伯先生などには及びもつかない」ので、「自分たちは俞先生が紅樓夢の研究を続けているのを喜んでい」と述べ、その腰の低さに村松は驚く。

村松は政治的な解釈を声高に主張してくることを予想し、「ヨロイカブトに身をかためた」ような心境で接していたことを反

省しその後、「二時間近く、時の経つのも忘れて、大いに話しあつてしま」う。ここでは、中国と日本の研究者の間に建設的な対話が交わされたはずだ。俞平伯にしろ、李希凡と藍翎にしろ、事前の予想はよい意味ではずれたのである。

『紅樓夢』論争の当事者との面会について述べられる「中国で会った人たち」からは、村松が中国で議論される古典解釈とは異なる解釈を踏まえたうえで相手と接していることと、その態度が生産的な対話の手がかりとなっていることが読みとれる。村松が意図的にそのような戦略をとったとは考えにくい、彼の態度をそのように評価することも可能だ。

そして、村松の意見は注目され、中国共産党の機関文芸誌に論文を発表する機会が与えられる。村松映「我対『紅樓夢』二三問題的看法」(劉仲平訳「私の『紅樓夢』に対する二三の点についての見解」、『人民文学』一九五七・一)が公にされたのである。村松はここで、「研究古典文学作品、必須注意的是這些作品常常帶有複雜的相互矛盾的因素。(中略)如果不特別注意這點、就会有陷于片面的解枳的危險」(「古典文学作品の研究は、作品はいつも複雑で相互に矛盾する要素をもっていることに注意しなければならない。(中略)もしこの点に特別な注意を払わなければ、片面だけを解釈する危険に陥つてしまふ」と述べている。ここで述べられるのは、「紅樓夢の小説性」で公にした意見のうち、マルクス主義的な読解に対する批判を強調したものとなっている。末尾、「由于处在旅行当中、準備很不充分」(「旅行

の最中ということもあって、準備が不十分であり」とあることから、この評論は村松が中国滞在中に執筆したものが、『人民文学』に掲載されたものである。村松は日本人でおそらく唯一論争に参加し、『人民文学』という場に李希凡らへの批判を公にすることで、論争を多義的な議論の場へと開いていった人物であつたのである。

それでは、村松にとって論争は、何をもちがらしたのか。陳光興が「相互転化へと解放された Becoming」と述べる点を重く受けとるなら、論争に参加することで村松がどのような存在になつた(Becoming)のかを考察した方がよいだろう。前節で引用した「定年に当つての感慨」では、論争が自らに与えた影響を、少しではあるが村松自身が語っている。村松の中国滞在中、語学の学習相手として、週に二三回、若手の文学理論家が、宿舍に来てくれたとある。そのとき、村松が「あなた方はあの魅力的な紅樓夢を、そんなに固苦しく面白くなく読むのか」と尋ねると、その理論家は「いや、読む時には違ふ」と答えたりしい。この返事に対して村松は、「これは中国文学を考える場合の大きなカギを私に与えてくれた」と述べている。村松は、マルクス主義的な読解が鑑賞の次元ではなく、あくまでも論争に参加し、自身の政治的立場を固める目的で行われていることを知るのである。

「定年に当つての感慨」は回顧であるため、割り引いて受け止めなければならないものの、『紅樓夢』論争を経て、村松は

個々の批評よりも、批評が提出される中国人の気質へと興味を差し向けていったようである。たとえば、その後に書かれた「中国人の性格」『中国三千年の体質』一九八〇、高木書房）では、「彼等は統制された社会の住人である。内心はどうであれ、政府の方針に従う。あるいは従うふりをする」と中国人の気質が論じられるが、こうした認識は論争に参加した結果、獲得されたものだろう。この意見が斬新な意見であるのかはさらなる検討が必要だが、重要なのは、論争が村松自身にも影響を与えたことである。論争は村松にとって、中国観を確立していくひとつの契機になったのである。

一九二三年生であり、一九五〇年に慶應大学の学部を卒業したばかりで教職についた村松は、世代的に李希凡と藍翎とほぼ変わらない。明治末年生である武田泰淳や竹内好のような中国文学研究会の主要メンバーと比較しても、村松の若さは際立っている。李希凡と藍翎といった、同世代の青年が発表した革新的な論調を、思慮深い態度で受容した村松は、相当に珍しい資質を有した文学者であったと言える。

ちなみに、本稿で参照した理論家の陳光興は、その体系を竹内好の言説読解から組み上げている。今日において、中華圏や日本において、中国文学者として竹内の論の有していたアクチュアリティは高く評価されている。竹内の理論が、単独講和による比喩的な占領状態が連続する日本や、あるいは大陸による同一化の圧力にさらされている台湾において、独立を希求す

る人々に大きな手がかりを与えていることは間違いない。ただし、竹内が華々しく論戦を展開したすぐ後の時期、村松もまた目立たないようなかたちで、中国と対していた。

『紅樓夢』論争が、中国共産党の方針のもとで作られた議論であることは、批判論文が党肝いりの新聞雑誌に掲載されていることから、間違いない。ただし、日本でも苛烈な知識人批判が問題視された文化大革命とは異なって、兪平伯はページされたわけではなく、その後も大学の教員であり続けた。そのため、議論は政治的に生み出されたものであったにもかかわらず、当時としてはそのことが分かりにくくなった。

本論で詳細に論じることがなかったが、たとえば武田泰淳という作家は、創作的エッセイ「渺茫たるユ氏」『中国文学』一九四七・九）を発表するほど兪平伯文学に親しんでいた。しかし、そのような作家であっても、評論「古典の再評価」『文芸』一九五五・七）や、小説「うつし絵」『改造』一九五五・一）を通じて、兪平伯ではなく進歩的な青年らを支持し、間接的に共産党のイデオロギーを下支えしてしまう意見を提出してしまったのである。

こうした言説とは違って、村松の体系的でないかたちで提出された一風変わった批判は、中国に対してどう接していくかの、ひとつの手がかりになるだろう。論争に対して判断を下すのではなく、自らも議論に参加することで議論を動態とし、さらに中国を通じて自らの意見自体を生成していく。そうした道の開

き方があることに、彼が提出した『紅樓夢』論争に対する言説を通じて気づくことができるのである。

注

- (1) 正確には、山東大学の紀要である『文史哲』一九五四年九月号に掲載された当該の論文が、『文芸報』一九五四年九月三〇日号に掲載されたことが発端となつて論争が巻き起こった。この転載版には、「把它転載在這裏，希望引起大家討論，使我們对「紅樓夢」這部偉大傑作有更深刻和更正確的「了解」(それをここに転載すること、みな討論を引き起こし、「紅樓夢」この偉大な傑作をわたしたちにとつてより深くより正確に理解することを希望する)」という言葉が付されており、雑誌編者によって積極的に方向づけられていた論争の性格を知ることができる。
- (2) 胡風批判については李輝^{リーホイ}「風雲の秋」(千野拓政ほか訳『囚われた文学者たち』上巻、一九九六、岩波書店)や、小山三郎「中国共産党の文芸政策と一九五五年の胡風事件」(『中国近現代作家の政治』二〇一六、晃洋書房)に詳しい。
- (3) 『紅樓夢』の書誌や梗概については、松枝茂夫「解説」『紅樓夢』(一)一九五五、岩波書店)を参照した。
- (4) 周揚「社会主義リアリズム(II)」(『中国事情』一九五三・五)は「社会主義リアリズム」を、「作家が真面目に、真実に、現実を革命的発展の面において描くことを要求する」立場として定義している。
- (5) 千田九一訳『現段階における中国文芸の方向』(一九四六、十月書房)、鹿地亘訳『毛沢東の文芸講和』(一九五一、ハト書房)、毛沢東選集刊行会訳『毛沢東選集 第五卷』(一九五三、三一書房)など、講話は日本でも積極的に紹介された。本稿では毛沢東選集刊行会編訳を参照している。
- (6) 郭沫若「中国文学・芸術工作者第二回代表大会開会の辞」(同ほか、中国文学芸術研究会訳『文学・芸術の繁栄のために』一九五四、駿台社)。
- (7) 俞平伯の文業については、拙論「中国文人の〈隠退 Passivity〉」(『阪神近代文学研究』二〇一八・五)に詳しい。なお、本稿の論述は一部、この拙論と内容的に重複するが、その論旨および結論は異なっている。
- (8) 当時の国際情勢については、馬場公彦「中ソの「平和攻勢」に動揺する日本論壇 一九五一―一九五五」(『戦後日本人の中国像』二〇一〇、新曜社)を参照した。
- (9) 一九五〇年代の国民文学論とは、米軍占領下からの独立をめぐる議論に呼応しつつ、文学創作や研究をめぐる民族性の確立が議論された言説群のことである。この論争の中心人物であった竹内好が、毛沢東に対する関心を深めたうえで議論を開始した経過については、渡邊一民「国民文学論争」(『武田泰淳と竹内好』二〇一〇、みすず書房)に詳しい。
- (10) 日本文学協会編『日本文学の伝統と創造』全二巻(一九五三・一九五四、岩波書店)では、『万葉集』や『源氏物語』『平家物語』など、古典文学の再評価をめぐって討論が行われている。

(11) 日本文学協会の発足は一九四六年六月一五日。その後、注10で

引いた書籍を出したのち、一九五二年一月に現在まで続く『日本文学』が発刊された。益田の文献のほかにも、阿部知二「文化と人間の誕生」(『日本文学』一九五五・三)が載っており、中華人民共和国の動向への注目度は高かったことが推察される。

(12) 梅沢伊勢三「もののあはれ論の成立」(『芸芸研究』一九五四・六)など、戦後の古典研究は依然として本居宣長の解釈を再検討する、既成路線をたどっていた。

(13) 三反五反運動については、座間紘一「社会主義への移行と「三反・五反」運動」(野沢豊編『中国革命の勝利』一九七八、東京大学出版会)を参照した。

(14) 戦後日本の中国文学研究については、代田智明「戦後近現代中国文学研究管窺」(伊藤徳也ほか編『戦後日本の中国研究と中国認識』二〇一八、風響社)を参照した。

(15) 村松の経歴については、三田英彬「村松暎」の項(小田切進ほか編『日本近代文学大事典』一九七七、講談社)を参照した。また、村松暎「定年に当たっての感慨」(『芸文研究』一九八九・二)には、さらに詳しい履歴や著作目録が掲載されている。

(16) 『杭州綺譚』という題をもつ物語ではなく、宋代における杭州を舞台とした小説のいくつかを集めた刊本である。なお、村松の初期の業績としてはほかに、清末の作家を論じた「李汝珍と『リルジエン女王国』」(『三田文学』一九五三・一〇)がある。なお、村松の白話小説受容を論じた先行論としては、勝山稔「近代日本に於ける中国白話小説『三言』所収篇の受容について」(『国際文化研究科論

集』二〇〇九・一二)がある。

(17) 村松はあるべき文芸として、西洋の近代文学を想定していたと考えられる。たとえば「中国人の小説観」(『毛沢東の焦慮と孤独』一九六七、中央公論社)では、「中国の近代文学は、欧米近代文学の視点からいうならば、あまり近代化されなかったことになる。(中略)西洋的な近代文学の影響を受けることが少なかつたからであろう」と述べている。ここで言及される「欧米近代文学」が何を指しているのか分らないが、文章内に坪内逍遙への言及があることから、ウィリアム・シェイクスピアをはじめとした英文学を想定していた可能性はある。

(18) 第二節で確認したように、兪平伯が述べる「色即是空」とは、仏教的なものではなく、人間の欲情を指す用語として用いられている。この点、村松は兪平伯の意見を正確に読みとっていない。

【付記】漢字は新字体に改め、ルビや参考資料の副題は適宜省略した。引用文中の(中略)、／(改行)、「」(注記)は藤原による。中国語の文献については、邦題を付し、括弧中に原題を示した後、引用文の後に「」を用いて日本語訳を付した。邦題と日本語訳も稿者自身による。なお本稿は、同志社大学国文学会研究発表会(二〇一七年十二月三日、於同志社大学)での口頭発表を経て、作成した。各席上でご指導頂いた方々に心より感謝申し上げる。

武田泰淳「日本文学的命運」の紹介と翻訳

——上海における日本人居留民の中国語評論——

藤原 崇雅

解題

武田泰淳（一九二一—一九七六）は、第一次戦後派の作家として知られるが、戦時下から敗戦直後にかけてはむしろ、『司馬遷』（一九四三、日本評論社）を著した中国文学者として知られていた人物である。茅盾（マオ・シャワン）『虹』（一九四〇、東成社）をはじめとした現代文学の翻訳や、竹内好が組織した中国文学研究会の機関誌に発表された業績が認められ、上海から帰国した後は一時、北海道大学に新設された法文学部に、教員として赴任したこともある。その職は半年で辞し、職業作家として自立の道を辿ることになるのだが泰淳は当初、中国文学研究者として世間に認知されていたのである。

泰淳の研究を下支えしたのは、語学のリテラシーである。川西政明「武田泰淳年譜」『武田泰淳伝』二〇〇五、講談社）によれば、泰淳には潮江院住職である赤尾光雄という中国語や中国

文学に詳しい従兄がいた。泰淳は一六歳頃、光雄を通じて中国語に興味を持ちはじめた。そして一八歳になると、本郷区金助町にあった私立第一外国語学校の夜間部に通いはじめ、その後、東京帝国大学の支那文学科に進学した。「古典の再評価」『芸芸』一九五五・七）には、「老先生は蒙古系の北京人で、たった二人向かいあつて、その美しい発音を聴いてゐるあいだけ、戦争も何も忘れていられた」と、中国語を熱心に学習していた当時が振り返られている。大学はすぐに中退してしまつた泰淳だが、それはあくまでも授業に熱心になれなかつただけで、語学に対する興味関心はその後も把持されていたものと思われる。そのリテラシーを活かし、泰淳は敗戦後の上海において、日本人が国民党政府系の機関に提出する書類を代理で作成する、いわゆる代書業を営んでいた。同時期に外地に滞在した堀田善衛は「上海時代」『海』一九七六・二二）で、「虹口地区にみんな集

中されて、今度は「日僑」という腕章をつけなきやならなくなつた」とき、「印刷屋が接収されることになって、いろいろな書類がある」ようになり、そこに下宿していた泰淳が「中国語」で「おじさんのために書類を作つてあげ」たことを回顧している。噂を聴きつけ、「いろんな人がやつてきて、接収関係の書類」の作成を依頼されたことから、泰淳は代書業を営むに至つたのだ。

泰淳が代書業をしていたことは、上海を舞台とした私小説的な作品の設定として反映されていることから比較的よく知られている。たとえば「審判」『批評』一九四七・四)では、「中国側に提出する書類の数は多く、代書商売は案外に繁盛した。工場、閉鎖、商店の接収、帰国の手続きなど仕事は絶えなかつた」とある。ただし、「審判」をはじめとした上海ものの作品論的研究は多くあるものの、泰淳が実際に代書ができるほどの語学力を身につけていたのかどうかについては、これまで考察されてこなかった。その理由は、泰淳が中国語で書いた文章の存在が明らかになつてこなかったためである。たとえば、筑摩書房から刊行されている全集には、日本語で書かれたものしか収載がない。

しかし、稿者が中華民国期に刊行された雑誌のデータベース「大成老旧期刊全文数拠庫」を調査したところ、泰淳が中国語で書いたと推定される評論として「日本文学的命運」(日本文学の命運)『遠東觀察者』一九四六・四)を確認した。この評論は

泰淳の語学力を確認するうえで、重要なものと考えられる。本稿では、「日本文学的命運」を翻訳・紹介することで、研究において看過されてきた中国語リテラシーの水準を詳らかにしたい。

「日本文学的命運」が発表された雑誌『遠東觀察者』は、上海で刊行された中国語の資料で、現在創刊号だけ確認が可能である。二号以降については、発行されたかどうかも含めて分かつていない。表紙には「遠東諸問題之研究批評与介紹」(極東の諸問題の研究批評と紹介)とあり、上海を中心としたアジアの政治問題について批評、紹介することを主旨とした評論誌であることが窺える。一九四六年四月一〇日発行で、編集兼発行人は遠東觀察者月刊社、印刷社が改造日報社となっている。遠東觀察者月刊社については不明だが、改造日報社は比較的有名で、国民党第三方面軍の將軍で、上海統治のトップであつた湯恩伯(タンエンボ)によって、日本人居留民の思想防共のために組織された新聞社として知られている。居留民の思想を緩やかに統制するため、『改造日報』や、『改造週報』、『改造叢書』、『改造評論』など、さまざまな日本語の刊行物を公にしていた。同出版社で印刷されていたとするならば、『遠東觀察者』もまた、国民党政府系メディアの一つと捉えて差し支えない。

『遠東觀察者』の「稿約」欄を確認すると、第五条に「訳稿請附原文、否則註明原稿出処」「訳稿には原文をつけること、

さもなくばその出所を明記すること」とある。中国語の雑誌であるため、訳稿とは他言語から中国語に訳された文章のことである。つまり、この雑誌は他言語で書かれた意見を現地の中国人に向け紹介する目的をもつて刊行されたと考えられる。当該の号で「日本人論日本―特輯（日本国内及在華日本人特稿）」（日本人が論じる日本―特集（日本国内および在華日本人による特稿））が組まれていることから、この方針は明らかだろう。ちなみに、「日本文学的命運」もこの特集文獻のひとつとして収録されたものである。猪俣庄八「後記」『中国文学』一九四六・五に「武田泰淳が三月下旬、上海から帰つた」とあるため、泰淳は同年三月まで当地に滞在していたと考えられる。泰淳は上海時代最後の仕事のひとつとして、評論を書いたのではないだろうか。

特集「日本人論日本」には青木恵一「關於絶対制的一个覚書」「絶対制についてのある覚書」、森戸辰男「向民主主義前進」（民主主義への前進）、中村静治「日本経済之再建」（日本経済の再建）、武田泰淳「日本文学的命運」（日本文学の命運）、谷川勉「東京的反常」（東京の普段との違い）の五編が収録されている。これら文獻の末尾には、基本的にどの記事も訳者名が記されている。たとえば青木恵一の文獻には「一九四六、三、二雨鶴^{ユイヘ}訳」とある。このことから、日本人の書いた原稿は基本的に中国語に翻訳後掲載されていることが窺える。

ただし五編のうち、泰淳の文獻にだけ、訳者名が記されていない。したがってこの評論は翻訳する必要がない、もともと中

国語で入稿された記事だと推定される。もちろん、執筆や推敲の過程で、中国語話者に援助された可能性もある。しかし、代書業を営んでいた経歴と合わせると、評論が中国語で書かれたとしても、不思議ではない。以上の掲載状況から、「日本文学的命運」を泰淳が中国語で書いた評論と判断した。

研究者であつた泰淳は、小説と同時に多くの評論を残している。中でも「中国文学の命運」『文明』一九四六・八）は、タイトルからいっても内容からいっても、またほぼ同時期に発表されている点からいっても、「日本文学的命運」と関連した業績と考えられる。これは、中国の現代文学に関する評論で、郭沫若^{クオモルオ}や林語堂^{リンユイタン}といった作家の作品が、日本の現代文学とは驚くほど違った作風を示していることを論じたものである。この中では、「中国文学が日本文学とかぎりなく離れてゐたことを、その「命運」と言つて見たまでである。離れていたことの意味は、しかし深いのである」と述べられる。そのうえで泰淳は、中国の現代文学の特徴を政治主義としつつ、中には政治的なテーゼでは説明しきれない生活感情が含まれることがあることを述べ、その要素を中国現代文学の可能性と分析している。

また、現代中国の文学史的記述と併せて、泰淳は日本文学についても記述している。「今となつて見れば、日本文学は、やつぱり驚くほど世界から孤立した特殊美であつたから、それがここ十数年、中国文芸と離れてゐたとて、別段不思議でもない

けれど。やはりここには、両国の文学の命運を考えさせる暗示がある。政治主義的な中国文学とはうって変わって、日本の現代文学は、政治から乖離した特殊な美の表現に終始したと、泰淳は分析する。日本の文学者は時局と対決するのではなく、自分と周囲の極限された範囲に創作の対象を絞ることで、政治とはかけ離れた美的な表現を生み出してきた。泰淳は日本現代文学の主流をそのように位置づけたうえで、中国文学と日本文学を、正反対の行き方をした領野だと考察している。泰淳は両国の文学を、別種の命運を辿りつつあるものとして捉えていた。今回紹介する「日本文学的命運」は、「中国文学の命運」の中で言及された日本文学の特徴が、具体的にどの作品から発想されているのかを確認できる点で貴重である。詳しくは以下の訳文に委ねるが、泰淳は日本文学の代表的なものとして、川端康成「伊豆の踊子」や「名人」、また堀辰雄『大和路・信濃路』さらに谷崎潤一郎『細雪』などの作品を想定している。同時に泰淳は、中野重治の転向文学も大きくとり上げている。それらの文学は、政治主義からの挫折や逃避であるのだが、挫折や逃避せざるを得なかった状況を対象化している点で、見るべきところがある。泰淳は日本文学について、政治主義的にならない点を当時の政治状況の反映と理解する、一種逆説的な評価を試みているだろう。

そして評論は精力的に作品を発表していくことになる泰淳の、今後を予見したものとして読むこともできる。今後の戦後文学

における題材として原子爆弾や天皇、餓死を扱うことが提案されているが、泰淳は「ゴジラの来る夜」『日本』一九五九七）や、『貴族の階段』『中央公論』一九五九・一五、また「ひかり」『新潮』一九五四・三）によって、それらの主題を追求している。

さらに重要なのは、「敗戦というのは、けつして言葉や概念ではない。それを長編の政治論文のテーマとして書いてはならない。それは凹凸や傾斜、また陰影や断層などに満ちた不平等で不統一の現実なのであり、作家にとって非常に恐ろしく、真実の文学において日常へと限りなく近づくことなのだ」という一節だろう。泰淳は戦前期から開始していた小説の創作に、戦後において本格的にとり組んでいくが、そのときとられた方法は、上海体験を私小説に似た形式で書く、というものだった。「審判」や『蝮のすゑ』『進路』一九四七・八、十、一九四八・二）、また、「非革命者」『文芸』一九四八・五）では、紛れもなく上海における自己の「現実味のある文学的日常」を描くことが作品において試みられたのである。

こうした創作の方法が、中野重治に代表される転向文学への積極的な評価から導き出されていたということが窺える点で、本評論の資料的価値は極めて高いと考えられる。「日本文学的命運」は、外地で生活した居留民による文学史的記述としてはもちろん、戦後文学者として成熟していく泰淳のその後の主題を説明したものとしても、貴重な資料なのである。

凡例

一、漢字は、原則として簡体字や繁体字ではなく、日本で通用している新字体で統一し、異体字なども通例の字体に直した。
一、句読点、括弧、改行は原文通りの表記とした。ただし、括弧の用法が明らかに誤りと認められる場合には、「ママ」のルビを振り原文そのままであることを示した。

一、判読不明の箇所については、一字分を□で示した。

一、原文中、具体的な作品名や、歴史的な事象に言及があった場合は注を付した。

一、文脈上明らかに誤りと認められる場合には、原文に「ママ」のルビを振ったうえで、妥当と考えられる漢字を充てた意味に直して訳出した。

一、訳文に関しては、現在通用している書法によって筆記した。他作家の小説が引用されている部分についても、読みやすさを優先し、同様の書法によって筆記した。

一、原文中、他作家の小説が引用されている部分は逐語訳するのではなく、もともとの小説における表現を充てた。ただし、一部改変した箇所については特記している。

翻刻資料

最近読到日野重治の「不能写小説の小説家」⁽¹⁾、對於他那文学家似的潔癖甚感佩服。這位小說家當時以轉向而得出獄，受官方的嚴格監視，發表作品極為困難。批評家們批評着說那高木高吉稍

微妥協一點，把伏字減少一點就好了。但那「高吉却不能苦笑。他只感到「討厭什麼，蠢才……」強烈的感到批評家的好意和同情。批評家誤解了。高吉的小說中決沒有過激的文句。講到有沒有妥協的話，他如今顯然是和支配者們妥協了。他不過想寫自己如今如何妥協，為何至於屈服。他相信並感覺到人類的屈服着羞醜」⁽²⁾。

さいきん中野重治の「小説の書けぬ小説家」を読んで、彼の文学者らしい潔癖について非常に感動した。この小説家は転向によって出獄できたものの、政府の厳しい監視を受け、作品発表が極めて困難になっていた。批評家たちは高木高吉のすこしも妥協しないところを評価しつつも、伏字を減らせばよくないと述べている。しかしそのとき、「高吉は苦笑することはできなかつた。彼は「何をいやがる、ぬけ作奴……」と感じる一方で批評家の好意と同情とを強く感じた。批評家は誤解しているのだつた。高吉の小説には過激な文句などは決してなかつた。ただ彼は、自分が今どう妥協してるか、どうして屈服するようになったかを書きたかつた。彼は人間が屈服することの醜さを信じ感じていた」のである。

不管批評家對於自己寄与怎樣奇妙的同情，不管社会賜以怎樣寬縱的好意，他只相信並感覺屈辱的羞醜。他的潔癖使他甚至連苦笑也不可能。對於自己，對於同志，他的好惡都過於明確，是不能糊弄欺騙的，因此他感覺並判斷伙伴們的一舉手一投足。

批評家が彼についてどんな奇妙な同情を与えようと、社会がどんな勝手な好意を授けようと、彼はただ屈服することの醜さを信じ、また感じていたのである。潔癖は彼に苦笑させることさえ不可能にした。自己や同志に対して、好悪はすでに明確であるため、ごまかしあざむくことは絶対に不可能であり、それゆえに彼は仲間の一挙手一投足から何かを感じ、判断している。

「我們出来了。我本^{ゴツ}能了解他們。彼們是多麼煥發呀！他們中間，例如M是怎樣包圍在花裡面呀！他到底為什麼跑到俄国去學習呢？這個村子是多麼美麗呀！但他們仍是卑鄙的。至少S是卑鄙的。就是M的精神煥發也和卑鄙少不了關係。不，也許不是卑鄙，但和我們是不同的「^{ゴツ}（二個小記錄）^{（3）}

「私たちは外へ出た。私には彼らの人間がわからなかった。彼らは何と明るいだろう。彼ら、たとえばMはなんと花に囲まれているだろう。彼はいつたい何しにロシヤへ勉強に行ったのだろう。なんとこの村は……これは村だ！……美しいだろう。しかし彼らは……卑しいぞ。すくなくともSは卑しい。Mの陽気だって卑しさに關係してるんだ。いや、卑しくはないかも知れぬがおれたちとは別だ」^{（4）}（二つの小さい記録）

從這個小說集出版到現在已經十年了。^{（5）}而他^{（6）}被推為某黨議員候選人。上海的報紙也登載了這個消息，人們簡單

的談到「是麼，中野重治做了候選人麼」，而嘆息人世的變幻無常。但對於文學家中野，事情並本如是簡單，也不是感傷的。彼一定依旧聲迴視，認真的說「他們是卑鄙的。不，也許不是卑鄙，但和我們是不同的」。喫了敗仗就是喫了敗仗，世界有了變動就是有了變動，他用過於明確而不能糊弄欺騙的好惡之念來感覺並判斷戰爭的一舉手和世界的一投足。他的党派也許會急速擴大勢力，他的政治地位也許出乎意料之外的變得重要。但為^{ゴツ}作家的他却執拗的發出小孩子似的低語說「我不能了解他們」，以潔癖為武器來掘發，深化或高揚自己的小說。這乃是「不能寫小說的小說家」的命運。

この小説集が出版されてから、現在すでに一〇年が経った。彼は聴くところによれば推薦されて、某黨議員の候補者になつたらしい。上海の新聞もこのニュースを掲載したため、人々はいとも簡単に「そうですね、中野重治が候補者になつたんですか」と話している。世の中の移り変りの速さにはため息が出るほどだ。しかし、文學者の中野にとつて、ことはさほど簡単ではなく、感傷的なものでもない。彼はおそろく相も変わらず眉をしかめて周囲を見ており、真面目に「彼らは卑しいが、しかしおれたちとは別だ」と言っているはずである。敗戦は敗戦であり、世界も變動したにはしたが、彼は極めて明確なごまかしあざむくことのできない好惡の念をもつて、戦争の一挙手と世界の一投足について考え判断しようとしている。彼の党派はもしかすると急速に勢力を拡大し、彼の政治的地位は思ひの外、

重要なものに変わっていくかもしれない。しかし、作家としての彼は却って執拗に、子どもに似た低い声で「私たちは彼らの人間がわからなかった」と言い、武器としての潔癖をさらに発掘し、自己の小説を深化また高揚させていくだろう。これこそ「小説の書けぬ小説家」のたどる命運なのである。

世界情勢對於日本作家究竟是怎樣的東西呢？一句話，那是文學的常事，夏目漱石，森鷗外，永井荷風也都被放在「世界情勢」前面站着，而生活在那裏面，他們雖沒有特別帶着暴燥的聲音跪上講壇，但他們從海外回來之後各自自家的潔癖明示了火傷的傷痕。精通英國文學史，写了「倫敦塔」的漱石，編写暗淡的心理小説，想穿了日本的家庭生活，是什麼原故呢？那樣透澈理解德國醫學和歐洲文藝的鷗外，埋頭著作以那樣特別的日本中世為題材的歷史小説，是什麼原故呢？馳心於「美國故事」，「法國故事」等優美的異國浪漫中的荷風，為什麼傾向於那樣的江戶趣味，傾向於那樣受限制的近代日本都市的奇怪美了呢？⁽⁸⁾那乃是由於世界情勢對於他們是文學的常事的原故，他們好像沒有厚皮膚以撇開日本的文學的常事去考慮世界。他們也許迷惘過，但一次也沒有転眼他顧。

これまでの日本作家は世界情勢に対して、どのような態度をとってきたのだろうか？この問いには、世界情勢を日常として文学で描いた、と答えることができる。夏目漱石や森鷗外、また永井荷風の全員が「世界情勢」のまえに立たされ、またその

中で生活をし、彼らは登った演壇のうえで特別に荒々しい声をあげることはなかったけれども、彼らが海外から帰ってきたあと、自分たちそれぞれの潔癖で火傷のあとを明示してみせた。英国文学史に精通し、「倫敦塔」を書いた漱石が、暗い鬱陶気の心理小説を創作し、日本の家庭生活を見通そうとしたのはなぜだったのか？ドイツの医学と欧州の文芸について透徹した理解を示した鷗外が、特異な日本中世を題材とした歴史小説の著作に没頭したのはなぜだったのか？『あめりか物語』や『ふらんす物語』など優美な異国ロマンに心を馳せた荷風が、どうして江戶趣味という限定的な近代日本都市の奇怪な美の方へ傾いていったのか？それは世界情勢が文学的・日常的の中に繰り広げられていたからであり、彼らは日本文学における日常的な話題を捨て置いて、世界の考慮を繰り広げるほど厚顔ではなかったのだ。彼らはずいぶん途方に暮れつつ、しかし決して目を周囲へと逸らさなかったのである。

把中野的話再引用一次罷。／「他想振作威勢，把永井荷風他的作品抽出來閱讀。永井荷風他的作品很好。但是陳腐。他抽出鷗外的作品來讀。鷗外的作品雖新鮮，但是生硬，他隨手抽出雜誌來閱讀平庸的新作家們作品。一個一個都拙劣不值一讀，看見那樣平庸的小説也可以稱為小説，他感到發生了勇氣，而即刻又感到這件事的可憐」⁽⁹⁾

中野の話をもう一度引用してみよう。／「彼は威勢をつけ

たくて永井荷風を引き出して読んでみた。永井荷風はうまくいった。しかし古臭かった。彼は鷗外を引き出して読んでみた。鷗外は新しくたつたけれども固まっていた。彼は手あたり次第に雑誌を引き出してやくざな新進作家たちを読んだ。どれも下手でたわいがなかった。そうして、そういうやくざな小説が小説で通っているのに元気づけられるのを感じ、すぐまたそのことの切なさを感じた」

在昭和十一、二年前後、新進作家們是平庸的，他們沒有力量使文學的常事結晶成不為世界情勢所嚇倒的自己革新，因此一個一個都拙劣而不值一讀。但荷風雖陳腐却很好，鷗外雖生硬却新鮮。這很好和新鮮並不是小小的技巧技術問題。那是觸到精神深处的，所謂內心表現問題。

昭和一一、二年前後における新進作家はやくざで、彼らは世界情勢に圧倒されないように自己革新を起して文学の日常に結晶させるだけの力量がなく、したがってひとつひとつの作品は拙劣で読むにも値しない。荷風は古臭いが却ってうまく、鷗外は固まっているが新しい。このうまさや新しさは、微細な技巧技術を問題としているのではない。それは精神の深い部分に触れているか否か、いわゆる内心表現の問題なのである。

目下日本在全世界成了戰敗，屈辱和絕望的處所。在日本國內，無論古代，中世，近世，由於內戰內亂的結果，我們的祖先曾嗜

過種種的戰敗，屈辱和絕望。但那些戰敗，屈辱和絕望乃是無人注意，無人知曉的，它們發生在世界史中最偏僻的處所，而且是在蔭蔽的洞穴中。但這一次不同了，這一次世界的陽光毫不客氣的照射到國內來。不管什麼樣的排外者，什麼樣的保守主義者，什麼樣的厭世主義者，世界舞台的鈴兒都會在他們耳邊發響，催他們快登舞台，對於日本人，偶然而又必然的驚異之幕業已打開，這是無可疑惑的。尤其是文學家坐在最前排，正當着從後台吹過來的寒風和舞台上的塵埃。無論怎樣平庸的作家，怎樣拙劣不值一讀的作家，要想把眼睛轉開不看劇的進行是不可能的。

さしあたり日本は全世界において敗戦し、屈辱と絶望の場所にいる。日本国内においては、古代・中世・近世と、内戦内乱の結果によって、私たちの祖先はかつてさまざまな敗戦、屈辱と絶望を味わってきた。しかしこれらの敗戦、屈辱と絶望には誰も注意せず、誰も知らなかった。それらは世界史における最も辺鄙なところで発生していたし、薄暗い洞穴で起きたことだった。しかし今度の敗戦は異なっている。今度のそれは陽光のように、すこしの遠慮もなく国内を照らし出してしまった。どんなに排外的な者でも、どんなに保守主義者であっても、どんなに厭世主義者であっても、世界の舞台上で開演のベルがすでに耳元で鳴り響き、彼らが舞台に速く上がるよう急ぎ立てる。日本人にとって、偶然また必然的に驚くべき幕が開いたことに關しては、もはや疑う余地はない。特に文学者は舞台上、最前列に並ばされ、ちようにど楽屋の方から吹いてくる寒風と塵埃と

に体を洗われている。どんなにやくざで拙劣な一読に値しない作家が、劇の進行を見ないようにし目を逸らしたくなっても、それはもはや不可能となったのである。

日本は絶対打敗了。国民一斉都浸在戦敗の水の中、直到頸根。戦敗並不是一句話，也不是概念。它不能僅是寫長篇政治論文的題目。那是一種充^マ凹凸，傾斜，陰影，斷層等不平等，不統一的現實。它對於作家們成為非常可怕，非常真實的文学的常事而近迫。

日本は絶対的に打ち負かされた。国民は一斉にみな、敗戦という水の中に首の根っこまで浸されている。敗戦というのは、けっして言葉や概念ではない。それを長編の政治論文のテーマとして書いてはならない。それは凹凸や傾斜、また陰影や断層などに満ちた不平等で不統一の現実なのであり、作家にとって非常に恐ろしく、真実味のある文学的日常として迫ってくる。

文学家，因潔癖而受火傷の人們，不管是昨天，今天，明天，都應該注視。原子彈可以在一瞬間使全市住民死滅。死對於人類是極合物理而平等的。但他們會看到死的人有一秒間死去的，有脊背炸裂而栽倒的，有髓漿流出而断氣的等等微細的個別事實。對於他們，原子彈的威力在成為政治問題之前，也是文学的常事。所以他們最具体的去看它。

文学者は潔癖で火傷を受けた人々であるため、昨日と今日、また明日にかかわらず常に注視しておかなければならない。原

子爆弾は一瞬のうちに全市の住民を死滅できる。死は人間に対して、完全に物理学的かつ平等である。しかし、彼ら文学者がたった一秒間で死にゆく人を見る場合、背中は炸裂してひっくり返り、体液が流出し息が絶える等々のことは個別の事実としてある。彼らにとって原子爆弾の威力は政治問題の手前にあり、文学においては日常の中に表現されるのだ。であるから彼らは、進んでそれを具体的に見るほかない。

餓死不待説將影響日本文学。對自己，对社会，餓死的迫来都有深刻的意味。但餓死之政治的意味只是政治的意味，不改变是不能成為文学的。說餓死不是平等的而發表政見，發表政見的人可以成為現代日本小説的登場人物，只不過這一點可以稱為文学的現實。在餓死狀態的繼續期中，可能有某種文学家「相信並感覺到人類屈服的差^ズ醜」，一定会低声說「我不能了解他們」，想睜開臨終的眼再来好好看看。他們恐怕把最複雜的東西也看丟了，站在最單純的滿足，瓦礫的荒野中。

いうまでもなく餓死の問題も、日本文学に影響を与える。自己や社会に対して、迫り来る餓死はすでに深刻な意味を持ちはじめている。ただし、餓死の政治的意味はただ政治的な意味としてあるに過ぎず、それを文学的な意味に改変してはならない。餓死は政見を發表するように平等に話題にするだけでなく、發表された政見の中の当人を現代日本の小説の登場人物とする必要がある。文学的な現実と称することができるのは、そのよう

な扱い方をしたときだけなのだ。餓死迫る状態の文学者がもしいたならば、「人間は屈服し醜いものであることを信じ感得する」べく、「わたしは彼らのことが分らない」と確かに小聲で述べ、もう一度外界をよく見ようと臨終の眼を開こうとするべきだ。彼らは最も複雑なことの見落としを恐れつつ、最も単純な満足を抱きながら、瓦礫の荒野に立つ。

在両三年前、評論家小林秀雄曾說過「作家是以人類為複雜而無弁法的人」。這是當戰爭中他在一個從壞的意思講富於政治臭味的演說會上所講的話。⁽¹⁰⁾在那個時候，對於人的處理是極其簡單的，一無所知的官僚的命令有左右文學的局勢。也有一些文學家想掌握無聊的宣傳概念加以進一層的擴大。小林的潔癖似乎不能再忍受這樣的事了。因而遂在最不相稱的席上漏出了純粹的話。

二、三年前、評論家の小林秀雄が「作家は人間を複雑で仕様がなない人間と捉えるものだ」と、かつて述べたことがあった。これは戦争中、政治の香りのきつい演説会で、彼が抱いた面白くない思いが豊かに述べられた言葉である。当時、人の処し方はごく簡単で、何も知らない官僚の命令によって文学が左右された時局であり、つまらないプロパガンダの概念を、一層広げようとした文学者がいた。小林的潔癖は、このような事態にもはや耐えることができなくなった。したがってすぐ、最も似つかわしくない席上において、純粋な言葉を漏らしたのだらう。

我以為或許有一天有誰拿當作人看的天皇來寫小說。對於作家，這比較議論天皇制廢止論更正当得多，因而也費事得多。對於他自己，比一般存廢論更深刻而又複雜的人間論有發生的可能。「人類似複雜而無弁法」的苦痛會磨練他那好惡頗強的潔癖，使他創造出更強韌，更広潤的小說世界。因為那時候他已經達到一種地位，能够站在私人小說的傳統上，握個人的追求轉化為社會總現實的追求。

もしかするとある日、誰かが人間としての天皇を小説に書くかもしれないと思ふ。作家にとって、これは天皇制の廢止論を議論することより正当で、そして面倒なことである。このとき作家自身は、一般的な廢止論よりも、さらに深刻で複雑な人間論を産みだすことが可能になる。「複雑で仕様がなない人間」がもたらす苦痛は作家の好悪のはつきりしたすこぶる強い潔癖を鍛え上げ、さらに強韌でさらに広闊な小説世界を創造させる。そのときのため彼はすでにある地位に到達し、私小説の伝統のうえに立ち、個人的な追求が社会における現実すべての追求に転化するよう書くことができるのだ。

今後の日本作品究竟会那一個方向作強韌而広潤的成長呢？首先那不会依靠作品的題材，而是要依靠作者內心的寬広与深遠，依靠所謂驚訝。關於原子彈的，關於天皇的，關於餓死的，總之關於戰敗的文学，其產生並不由於對象，而由於凝視對象的作家。作家如果不感到誘發內省的驚訝，会看不見任何東西的。如果沒

有這宝貴的驚訝，任何人世間の変貌也不会使他自己変貌的。

今後、日本の作品はいったい、強靱で広闊な成長を遂げる方向へ成長できるだろうか？まずそれは作品の題材の問題ではなく作者が広く深い心を持つているか、いわゆる驚きを感じているかどうかという点が問題になる。原子爆弾にしろ、天皇にしろ、餓死にしろ、敗戦の文学はすべて、対象によって生み出されるのではなく、対象を凝視する作家によって生み出されるのだ。作家がもし内的な驚きを感じられなければ、いかなるものの発見も難しい。もしこの大切な驚きを感じ得ないならば、いかなる世の中の変貌をもつてしても、自己を変貌させることはできない。

在戰爭中、情報局以無恥的戰爭理念逼人接受，迎合者□有压倒不迎合者的局勢。但少数的文学家一点也不驚訝，一点也不改变面貌，冷然像是無關的樣子，他們像是不看正在發生的事情。從「伊豆的舞女」到「雪国」，再到「名人」，川端康成以優美的抒情和銳敏的感覺，甚至對於極小的愛情也不忘記給以正確的描写。写过「聖家族」和「美麗的村莊」的堀辰雄，在為戰爭中俗臭噴噴的婦人雜誌写「大和路・信濃路」的時候，也只着眼於遙遠古代的人物和隱靜的自然，做出詩樣的文章。⁽¹³⁾那些作品固然極其軟弱，固然其消極而特殊，可是純潔他們以一貫的偏狹，只写自家所喜歡的事情，有不触及可厭惡的事情的純潔。

戰爭中、情報局が恥知らずにも戦争の理念をむりやり受け入

れさせたことで、迎合する者は迎合しない者を压倒する傾向があった。ただし、少数の文学者はすこしも驚かず、顔つきすら変えることなく、どうやら無関心な様子で冷然として、起きていることに眼を向けなかった。「伊豆の踊子」から『雪国』や「名人」まで、川端康成は優美な抒情と鋭敏な感覚によって、非常に小さな愛情にさえ正確な描写を施すことを忘れていない。「聖家族」や「美しい村」を書いた堀辰雄は、戦争のために俗臭のぶんぶん匂う婦人雑誌に『大和路・信濃路』を書いた時でさえも、ただ遙か遠い古代の人物や静かな自然にのみ眼を向け、詩のような文章を作り出した。そのような作品はむろん極めて弱々しいし、消極的で特殊であることを免れないが、しかし彼らの一貫した偏狹さはある種、純潔とさえ呼べるだろう。ただ自分の好きなことだけを書き、嫌悪することに触れずに済ませるという意味での純潔である。

横光利一在戰爭中繼續写大長編「旅愁」，和陸續湧現於腦海中的問題相周旋。⁽¹⁴⁾因此戰爭這個大問題出現，和由此而生的急激的世界變貌，像是也使他改變了面貌。想從曾僑居巴黎的日本人的思想感情回到日本人的傳統精神，這一野心頗有使他轉入反動的危險。但幸而他是「以人類以複雜而無弁法」的文学家之一。他是一個頑固的漢子，不管情報局的命令和迎合者的威嚇，把複雜的問題當作複雜的問題，一直分析，推断到心理過得去為止。為着想屢次發見，屢次驚訝的願望，他反而在本質上沒有動搖，

沒有變貌，以至今日。

橫光利一は戰爭中、大長編である『旅愁』を書き続けた際、脳裏を続々とよぎる問題と格闘した。戦争という大きな問題の出現、およびそれに伴う急激な世界の変貌は、彼の状態を変えてしまった。かつてパリに仮住まいしていた日本人の思想感情から、日本人の伝統精神へと回帰した。この心情は、彼を反動的で危険な状態へと陥れた。しかし幸い、彼もまた「複雑で仕様がなない」文学者の一人であることには変わりない。彼は頑固な男で、情報局の命令やそれに迎合する者の威嚇があつたにも拘わらず、複雑な問題をきちんと複雑な問題として分析し続け、自分が納得するまで推断を繰り返した。なんども発見をしたい、なんども驚いてみたいという願望のために繰り返される思考は、かえって彼を本質的な動揺や変貌から守り、今日に至らせたのである。

但川端、堀、以及横光在今日都感到誘発内省的驚訝。他們能够改變面貌，獲得強韌而広濶の成長。或許戰敗也不能像睡覺，喫飯，男女交接等根本事實一樣吸引他們的注意。但讀者却喫驚，變貌，成長着。作家有使其滿足的責任。誠然，到了夏天，永井荷風の「澤東綺識」的驟雨現在還會降落在東京的繁盛地点。⁽¹⁵⁾谷崎潤一郎の「小雪」今年冬季也要為大阪的天空添色罷。⁽¹⁶⁾再說上去，在茨城県の農村裡，長塚節的「土」中的農民一定帶着沈鬱的眼神在田地裡。⁽¹⁷⁾那些驟雨，雪和土不改面貌，同樣的春夏秋冬

來訪我們的山河。而作家們的全新的驚訝，作家們的火傷，是日本人一齊身受心感的。一切的作家必須向這一點試用他們的潔癖。美，抒情，愛，甚至好惡之念，他們都要從新再看一遍。對於他們，與其說從新再看，不如說繼續看更為適當。

しかしながら、川端と堀、ならびに横光も、今日においては全員、内的な驚きを感じているはずだ。彼らの面貌には変化が、強韌で広闊な成長がもたらされる。敗戦は睡眠、食事、男女の交接といった根本的な事実ほど、彼らの注意を引き付けるものではないかもしれない。しかし読者は驚き変化することで成長する。それに対し、作家は読者を満足させる責任がある。なるほど夏がやつてくれば、永井荷風の『澤東綺譚』の驟雨は、今でもまだ東京の盛り場に降り続けている。谷崎潤一郎の『細雪』は、今年の冬も大阪の空に色を添えずにはおかない。さらに遠くの方、茨城県の農村では、長塚節の『土』における農民はきつと田んぼの中で、沈鬱な目つきをし続けているだろう。驟雨や雪や土は相も変わらず、春夏秋冬と同じように私たちの山河にやつてくる。そのたびに作家らの全く新しい驚きや火傷を、日本人が一齊に身をもつて受けとる。全ての作家にとって、ここで潔癖を試すことは必須である。美や抒情や愛、また好悪についての考えさえ、彼らは見直すべきだろう。いや、彼らにとつては見直すというより、むしろ見続けるといったほうが適切だろう。

現実在日本一斉都成了世界的。世界光線の強度威脅而又保護文学の常事。最複雜的東西、最個性的的東西也被放在亮处。最世界的個人主義、最個人的世界主義也許會從那裡發生。把泥土、礪石塊の手、着油膩、染塵汚の胳膊、也許會代替旧的作家。那些也許是粗野而健康的。但這些作家們大約仍旧要說「但他們是卑鄙的、不、也許不卑鄙、但和我們是不同的」輕視非文学的人罷。像日本的戰敗、屈辱和絕望成為世界的一樣、他們握這輕視變為世界的。

現實に、日本は一斉に世界のものとなつてしまつた。世界から放たれる光の強度は脅威だが、文学の日常を保護してもいるそれによつて、国内の最も複雑なもの、最も特殊なものが明るみに出されるだろう。最も世界的な個人主義、また最も個人的な世界主義はそこから生み出されるかもしれない。泥を掴み、石の塊を打つ、油の汚れがついており、埃で汚れた腕は、もしかすると旧時代の作家にとつて代わる。それは、粗野ではあるが健康である。しかし、このような作家はおそらく、依然として「しかし彼らは……卑しいぞ。いや、卑しくはないかも知れぬがおれたちとは別だ」と述べ、非文学的な人を軽視し続ける。敗戦した日本のように、屈辱と絶望は世界そのもののことであり、彼らは世界への軽視を掌中にするのである。

注

(1) 「小説の書けぬ小説家」のこと。中野重治の短編小説で、『改造』一九三六年一月号に発表された。転向後、執筆内容の制限によつて、思うように書けなくなつてしまつた小説家、高木高吉が、なんとか作品を生み出そうとする物語である。本稿では評論中で言及される単行本、中野重治『小説の書けぬ小説家』（一九三七、竹村書房）を底本とした。底本の書誌や内容に関しては、注4に記している。

(2) 伏字だらけの小説しか産み出せない高吉に対する批評家の厳しくも同情的な意見が述べられた一節。底本では、一三頁から一四頁にかけて示されている内容である。泰淳の評論は鉤括弧の活字が正しく組まれていないため、直接引用と泰淳が内容をまとめて書いている部分の区別が困難だが、注を付した段落の前半は泰淳が内容をまとめた部分、注を付した段落の後半は中野の小説の直接引用と判断して訳出した。

(3) 「一つの小さい記録」のこと。中野の短編小説で、『中央公論』一九三六年一月号に発表された。マルクス主義者である佐藤と周囲の仲間たちの微妙なすれ違いが、転向前後の行動を通じて描き出される。本稿では注1と同じ単行本を底本とした。引用箇所は、佐藤が佐久間という同志と連れ立つて、南というソビエト留学経験のある画家を訪ねた一節。下世話な話をする佐久間たちに佐藤は失望する。底本では、一三八頁から一三九頁にかけて示されている内容である。もともとの小説では、登場人物の名前は略されずに姓で書かれていたが、泰淳の評論ではアルファベットに変更

されている。本稿は小説本文に依りつつ、人物名のみアルファベットを用いて訳出した。

(4) 中野重治『小説の書けぬ小説家』(前掲)のこと。「この小説集が出版されてから、現在すでに一〇年が経った」あるが、泰淳の評論が掲載された雑誌は一九四六年四月の出版であり、中野の単行本は一九三七年一月出版なので、正確には九年三ヶ月しか経っていない。ただし、引用される小説作品「小説の書けぬ小説家」と「一つの小さい記録」とは、ともに竹村書房の単行本が初収録であり、二作が同時に収録されている点から考えても、評論中で指示されているのは同単行本であると判断した。二作品とも一九三六年初頭の発表であるため、泰淳がその時期と初刊の刊行時期とを、曖昧に記憶していた可能性もある。

(5) 松下裕編『年譜』(『中野重治全集』第二八巻、一九八〇、筑摩書房)によれば、中野は戦後、一九四六年四月一日に行われた第二回衆議院選挙、同年六月一日に行われた同回衆議院選挙再選挙(得票数不足のため行われた補欠選挙)、一九四七年四月二〇日に行われた第一回参議院議員選挙の計三回、候補者になっている。評論の掲載誌は一九四六年四月の発行であるため、泰淳が言及するのは、一九四六年四月一日に行われた第二回衆議院選挙だと判断できる。この選挙で中野は落選したが、「彼の政治的地位は思いの外、重要なものになんともいえない」との予想があるため、評論執筆時において泰淳はまだ結果を知らなかったようだ。「日本文学」の「命運」が書かれたのはしたがって、中野が候補者になったものの、まだ落選は公になっていない期間

であり、一九四六年三月一二日から泰淳が帰国の途につくまでの数日間だと推測できる。

(6) 日本の普通選挙に関する話題は現地の新聞でもたびたび報じられていた。たとえば「日本普選昨挙行」(『中央日報』一九四六・四・一一)や、「三大大票数接近」(『申報』一九四六・四・一二)など。ただし今回調査した範囲では、中野重治が衆院選の候補者となったことを報じた記事は見できなかった。上海市年鑑委員会編『上海市年鑑』(一九四六、上海市通志館)の「日報一覽」を確認すると、現地では小規模のものを含めると、三〇紙程度が刊行されている。私見では、泰淳も記事を執筆したことのある国民党政府系の邦字新聞『改造日報』に中野に関する記事が掲載されている可能性が高いと考えられるが、衆院選前後の刊行分については国立国会図書館に所蔵されておらず、今回調査することができなかった。

(7) 「倫敦塔」のこと。夏目漱石の短編小説で『帝国文学』一九〇五年一月に発表された。主人公が留学中一度だけ倫敦塔を見物したときの幻想的な印象を振り返る物語である。

(8) 『あめりか物語』と『ふらんす物語』のこと。どちらも、永井荷風によるオムニバス形式の作品。複数の雑誌に掲載されたものに書き下ろしを合わせて成立している。『あめりか物語』は博文館より一九〇八年に刊行され、『ふらんす物語』は同館より一九〇九年に出版納本された。ただ、後者は発売禁止処分を受けたため流通しておらず、その後一部内容を削除して刊行された新編版や全集版で初めて読むことが可能になった。泰淳が読んだと

すれば、これらの刊本を通じてである可能性が高い。

- (9) 「小説の書けぬ小説家」の一節。どうしても作品を書けない高吉が、参考到他作家の作品を読む場面。底本では、三五頁で示されている内容である。

- (10) どのような性質の演説会における発言か未詳。泰淳の別評論「中国文学の命運」(『文明』一九四六・八)には、上海滞在時に小林と会見したことが明かされており、泰淳が直接に小林の発言を聴いた可能性もある。ちなみに吉田熙生「小林秀雄年譜」(阿部良雄ほか『小林秀雄』一九九一、小学館)によれば、小林は一九四三年一〇月から一九四四年六月まで、第三回大東亜文学者大会の準備のために中国へ渡っている。泰淳が上海の文化機関に勤めはじめたのは一九四四年六月からであるため、小林と泰淳が外地で会ったのは、同年六月頃と推定される。ただし、両作家の中国滞在については不明な部分も多いため、会見が別の時期に行われた可能性についても否定はできない。なお、泰淳は自伝的小説『上海の蜚』(一九七六・二・九)のなかで、小林と上海で面会した経緯を回想している。

- (11) 福島鏗郎「戦時言論統制機関の再検証「情報局」への道程」(『総合ジャーナリズム研究』一九八六・一、四、七)や、春原昭彦「戦前の言論統制」(『コミュニケーション研究』一九九六・三)が述べるように、言論統制は内務省や陸海軍省など各省庁がそれぞれに担当していたが、一九三六年に内閣情報委員会が設立され、その後一九四〇年に情報局が成立した。泰淳が「情報局」と述べる場合、情報委員会のことを指している可能性もある。なお、この

情報局は敗戦の同年一二月に廃止されたため、泰淳の評論が書かれた時点においては、すでに存在していない。

- (12) 「伊豆の踊子」、『雪国』、「名人」のこと。「伊豆の踊子」は『文芸時代』一九二六年一月号と二月号に連載された。一高生と旅芸人の踊子の淡い思慕を描いた作品である。『雪国』は複数の雑誌に掲載された内容をまとめて、一九三七年に創元社より刊行された。後に決定版も出ているが、時期的に考えて泰淳が言及したのは、戦時下刊行の初刊と推定される。無為に日々を過ごす島村と温泉の芸者である駒子との恋愛物語。「名人」の成立事情は複雑であるが、泰淳が見たものとして想定されるのは「名人」(川端康成編『八雲』第一集、一九四二、小山書店)か。碁の名人、本因坊の引退碁を記した観戦記形式の物語である。

- (13) 「聖家族」、「美しい村」、「大和路・信濃路」のこと。「聖家族」は堀辰雄の短編小説で、『改造』一九三〇年一月号に発表された。九鬼という人物の突然死と、彼をめぐる三人の男女の恋愛関係を描いた物語。「美しい村」は中編小説で、一九三三年六月二五日、『大阪朝日新聞』朝刊に冒頭部分が掲載された後、他雑誌で公にされたものと合わせ翌年、野田書房より『美しい村』としてまとめられた。失恋で傷ついた青年作家が自然に囲まれた生活を通じ活力をとり戻す物語。『大和路・信濃路』は、一九四三年一月から八月にかけて『婦人公論』に連載された。奈良、長野への旅行を題材としたエッセイ作品。

- (14) 『旅愁』のこと。横光利一の長編小説で『文藝春秋』などに一九三七年から戦後にかけて連載された。前半は主人公のヨ一

ロッパでの恋愛が、後半は帰国してからの思索生活が描かれた作品。評論が書かれた時点で読むことが可能だったのは、『文藝春秋』一九四五年一月号に発表された第五編第三回までと考えられる。

- (15) 『遷東綺譚』のこと。永井荷風の中長編小説で、『東京朝日新聞』および『大阪朝日新聞』夕刊紙上で一九三七年四月一六日から六月一五日にかけて連載され、同年に岩波書店から単行本が刊行された。大江匡と、玉の井の私娼お雪との交情が描かれた物語である。

- (16) 「小雪」とあるが、『細雪』のことではないかと推定される。『細雪』は谷崎潤一郎の長編小説で上中下巻が存在するが、敗戦以前に刊行されたのは、一九四三年一月号と三月号に『中央公論』に連載された分と、掲載自粛を受けて一九四四年に配布された私家版とがある。泰淳が読んだのは前者である可能性が高い。船場の旧家時岡家の四姉妹の生活が描かれた物語である。

- (17) 『土』のこと。長塚節の長編小説で、一九一〇年六月一日から一月一七日にかけて、『東京朝日新聞』に連載された。茨城県鬼怒川べりの農村を舞台に、小作農たちの生活が描かれた物語である。

【付記】資料の公開に当たって、泰淳のご息女である武田花様より、格別のご配慮を賜った。また、資料は北京大成数拠有限公司・北京超星公司作成のデータベースである、「大成老旧期刊全文数据库」を使用して閲覧した。これは、狭義の中華民国期に刊行された哲学、人文科学、自然科学、教育関係の雑誌およそ六五〇〇種

を収録するものである。データベースは五つの部分から成るが、本稿で扱った資料掲載の雑誌は、そのうち大成小庫D（政治、法律、軍事）に収録されている。確認した範囲では、慶應義塾大学や京都大学が契約しており、論者は学外者ながら、後者機関のご厚意によってその調査が可能となった。また訳出の際、原文のニュアンスや文法の微細な点について、林麗婷氏や穆彦姣氏に多くの点でアドバイスを頂戴した。各氏・各館に、心より感謝申し上げます。

■特集 浦西和彦の仕事

浦西和彦先生インタビュー

秦 重 雄

本稿は、二〇一七年九月一六日に秦重雄氏が浦西和彦氏に実施されたインタビューです。秦氏および故浦西氏ご遺族のご了解のもと、ここに掲載することとなりました。このインタビューは、二〇一七年末に、一部の関係者に送付されました。冒頭の「みなさまがたへ」はその際に、インタビューに添えられたものです。当時の状況がよくわかりますので、このまま掲載することとしました。（編集部）

みなさまがたへ

二〇一七年一月一六日、関西大学名誉教授、日本社会文学会会員の浦西和彦先生がお亡くなりになりました。

二〇一七年の九月上旬に和田崇さん（三重大学）からご連絡があり、浦西先生の御体調が相当悪いことを知りました。すぐ浦西先生に電話しました。

「手術ができないすい臓がんになった。『延命措置』はせんといてくれ、なりゆきにまかせる、と医者に伝えた。まあ、一年後か、三年後かにお迎えがくるやろ。」

とお元気なお声で明るくお返事をされました。

そこですかさず、「先生、誠に失礼ですが、インタビューをさせて下さい。」と申し込みました。「さあ、体調が持つかない？」
「二〇分でも、一五分でも。インタビュー中に気分が悪くなったら直ちにやめます。」との応答をしました。

というわけで、九月一六日（土）ご自宅の上牧町周辺は大雨だったんですが訪問し、約二時間のインタビューを行いました。浦西先生のお声はしっかりと、お話は淀む所はありませんでした。インタビュー終了後、奥様のご運転で駅まで送っていただきました。車中も浦西先生と普通に会話をしました。

インタビューの文字起こしはひと月もかからずできたのですが、細部を調整してから浦西先生に見てもらおうと置いておきました…。

一二月月上旬に東京の大和田茂さんから連絡をもらい、浦西先生の訃報を知りました。実は同日に八五歳の叔父がなくなり、三日間ほど新聞の訃報欄を見る余裕がなかったのです。また、浦西先生のお言葉には「一年後」はございましたが、「半年後」はなかったのがインタビューの文字原稿の完成は二〇一七年中も…という認識でした。

二〇一七年が終わるにあたって浦西先生の生前インタビューを完成させて、御関心ある方々に送ります。浦西先生の語り口を出来るだけ活かしたつもりです。

なお、生前インタビューの公表につきましては浦西先生から許可は得ておりました。

御参考にあつて「新刊紹介」(秦執筆) 浦西和彦著『文化運動年表 昭和戦前編』

『社会文学』第四六号、二〇一七年七月)

「書評」(秦執筆) 浦西和彦著『著述と書誌』全四巻

『社会文学』第三二号、二〇一〇年二月)

インタビュー

二〇一七年九月一六日(土) 午後から約二時間。

浦西和彦先生宅で。聞き手は秦重雄。

○浦西和彦先生のご経歴

(日外アソシエーツ刊『日本プロレタリア文学史年表事典』二〇一六年、の奥付による)

一九四一年大阪府生まれ。

一九六四年関西大学卒業。

関西大学文学部教授。

二〇一二年定年退任。

秦

お体に差し障りのない程度に質問させていただきます。

関西大学を卒業されて岐阜県坂下女子高(現在の岐阜県中津川市坂下の坂下高校)へ行かれたのはなぜでしょう？

浦西

関大の学部を卒業して坂下女子高に行つた。当時は、小さな町で岐阜県と長野県の県境にあつた。いい所であつた。就職部の窓口でたまたま岐阜県の教員募集があつた。安保闘争の後で、田舎で暮らすのもいいなと思つていた。高等学校なのでもっと大きな所だと予想したが、土地勘もない場所、新しい女子高だった。住むのは良い所だった。行き手のない教師だとか、新採用の人だとか、自分の様なよ

そこから来た人が多かったと思う。校長が面接の時に、島崎藤村のゆかりの地が近くにあるので国語の教員がこの学校に來たがる、と言っていた。まあ、行つて良かった。

秦 先生と岐阜県とは何かつながりはあったのでしょうか？

浦西 全く関係はなかった。もともとどこでも良かった。たまたまだった。

葉山嘉樹と出会つたのもたまたまだった。坂下は岐阜県だが、木曾川を越えると山口村があり、葉山が晩年住んでいた。坂下とも行き来していた。学生時代にプロレタリア文学は多く読んでいなかったが、葉山嘉樹を読んでびっくりした。昭和一〇年代の作品にも葉山には良い作品がある。何とかしないといかんと思った。すべて偶然だった。

小さな学校で文芸部があつて雑誌『友樹』を年二回出していた。顧問をして葉山嘉樹の特集号を出した。学校で葉山の特集をするなんて無茶をしたが若いから出來た。三〇〇部くらい出していた。顧問だから年二回は何か書かないといけない。ということで葉山を調べ出した。

一九七五年発行の『葉山嘉樹全集』は小田切秀雄さんが筑摩書房に話を付け、中野重治さん、寺田透さん、金子洋文さんが編集委員となつた。編集と章立ては全部自分がやった。良い作品がたくさんあつた。

それ以降は、目立たずに良い仕事をした人、里村欣三や伊藤永之介などの『文藝戦線』派の文学者を主に調べてみた。

今は、プロレタリア文学というより、文学そのものがダメになつてしまつた。ほとんどが読まれなくなつてしまつた。あの当時は小説を読む文学青年がいたものだ。文学全集、個人全集が編まれ、文庫本も多く出された。今は推理小説の作家しか文庫本にならない。国文学をやる今の学生は三島由紀夫も、川端康成も、大江健三郎も知らない。

秦 田舎では資料集めは大変だったでしょう？ どうされたんですか？

浦西 独身だったから、夏休みに四日とか、一〇日とか、またつた時間を取つて、国会図書館にこもつた。あの時は安い宿が相部屋であつた。(秦：相部屋があつたんですか！)出張で東京に來る人が利用していた。毎年夏休みは国会図書館に行つていた。当時は近代文学館がまだなかった。(秦の注：日本近代文学館の開館は一九六七年四月。)

秦 当時の国会図書館は昼休みは出納しないし、一回に三冊までなのでずいぶん不便ではなかったですか？

浦西 その代わり利用者が少ないのでわりと回転が速かつた。案外のおんびりしていた時代だった。大学にかわつても、学会に顔を出さずに、国会図書館(後には日本近代文学館も)に入り浸つていた。出張で学会に行くことにしていた。でも学会に顔出しせず、出張費をもらつて国会図書館が近代文学館で調べていた。あまり人とのつながりを持たないようにしていた。たまたま人と出会うとこれを調べようとい

う予定がパーになる。めったに会わない人と会うんだから無視できない。これを調べようと思って東京に行って知っている人に会ったら話をしないといけない。知らん方がいい（大笑い）。そうして一〇年、二〇年過ぎたんやな。

雑誌を調べようと思うと大阪でも資料がない、結局は国会図書館に行かないと。あの時代は雑誌の復刻版がなかった。近代文学館が『文藝戦線』の復刻版を出してくれたのが最初だった。復刻版が出て来たから地方にいても雑誌を見る事が出来るようになった。でもそれで原本を調べなくなつた。そういう傾向が研究者にはあるんやな。

あの時代の古書店は面白かった。揃いでなくてもいろいろな雑誌が出ていた。今は出て来ない。

出てきても高価な値付けをしていますね。古書店もしつかり勉強していますから。

なかなか光の当たらない、注目されていない作家をお調べになったのはなぜでしょうか？

葉山に出会ってまわりを調べ出したのがきっかけ。それと大阪に係るものを調べ出して拡げてしまった所がある。

谷澤（永一）さんはぼくの師匠だが、本や雑誌はもう太刀打ちできないと思った。新聞やったら勝てるやろうとそう最初から決めてしまった。谷澤さんの弱いところを考えて、谷澤さんは運動するのがイヤだから出歩かない。そ

れならと地方の新聞や大学新聞を国会図書館に行つてノートを取つていった。今はマイクロフィルムや復刻版があるが当時はなかった。『文化運動年表』はその時のメモをまとめたもの。『読売新聞』なんかがそう。今やれと言つても出来ない。そうやって積み重なつていった。

大学新聞―帝大新聞なんかは案外面白い。わりと作家が書いていた。プロレタリア文学者だけではなく、普通の文学者も意外と多く書いている。逸文がいくつか出て来る。

メモをするとおつしやいましたが京大カード方式なんですか？

浦西 自分用のカードを使っていた。大学図書館が新築する時に古くていらなくなつたものを全部処分すると言つてきた。古いカードケースを処分するくらいならその時に貰つた。何台置いたかな。今は丸善も図書カードを置いていない。そのカードケースに入れて整理し、カードで記録していた。

秦 整理の仕方は年代順ですか、作家別ですか？

浦西 だいたい年代順。図書カードは整理が便利。たとえば橋本英吉を調べようとしたら並べ直して組み替えるだけ。なにより良かった。定年退職の時にはそのカードケースの処分に困つた。家に持つて帰るわけにはいかないから一番頭が痛かった。結局は全部処分したが。なんせ、本と言うのは重いし、場所を取るし、整理しなかったらある本もどこにあるかわからないし、ないものと同じになる。

定年退職の時に、家の本と大学の本と全部一緒にあきた文学資料館に寄贈したんや。どんなところ知らない、行ったことがないんやけど。おさめときや何とかなると。将来、必要な人はどっか探してくれるやろ。伊藤永之介も『種蒔く人』も秋田やから、一番いいかな。

秦 秋田県立大学の高橋秀晴さんから「浦西さんから寄贈された。少しずつ整理しています。」とお話いただきました。二〇〇九年一〇月の社会文学会秋季秋田大会はあきた文学資料館で行われました。

浦西 浦西先生と谷澤先生とはどういう御関係なのでしょう？
谷澤さんからはいろいろと学んだなあ。坂下の文芸部の雑誌を谷澤さんに送って認めてもらった。坂下に行かなかったら近代文学の研究をやっていなかったかもしれない。『文化運動年表』も『日本プロレタリア文学史年表事典』も一〇年、二〇年の蓄積じゃないですよ。

浦西 日外アソシエーツは定価は高いけど売れない心配はない。一定の部数を確実に売っている。

秦 『文化運動年表』も『日本プロレタリア文学史年表事典』も五〇〇年、一〇〇〇年残る業績ですよ。それを見越して日外なんかは出版したんでしょうね。

浦西 最初は、『文化運動年表』も『日本プロレタリア文学史年表事典』とをセットにして本作りを考えていた。組み方がうまくゆかなくて、別々になった。

『日本プロレタリア文学史年表事典』は校正の段階で事典にしてくれと注文された。あわてて事典らしく体裁を整えたけど困った。事典なら売れる、図書館が置いてくれると判断したんやな。

秦 浦西先生には複数のテーマがあってそれを追求されている。

浦西 やってみたいテーマがあるけど、昨夏にガンだと言われて結局は時間がないのであきらめなかんかった。ガンだと宣告されて映画化された文学作品を調べようと思った。やりかけて調べ出して昭和二年位で中断した。うかつだったが、映画化されたものがすごい数にのぼることが分かった。吉川英治や菊池寛やの作品がすぐに映画化されている。映画が娯楽やったから。大衆文学は映画化されていた。自分の残された時間のあと二、三年では無理だと分かった。思いきって止めてしまった。ともかく膨大な数だった。文学作品と映画とはどうしても映画の方を下に見る感覚が研究者にはありますね。

浦西 最初から今の映画の様ではなく、チャチなものだったから。『金色夜叉』は一番映画化されている。芝居のセットを映画にした。

大学を辞める前にテーマを震災に絞った。どういう発言を文学者がしているか、調べ出した。やりかけて福島震災やろ。原発事故がどうなるかわからなかったからやめて

しまった。原発のことは終わることがない、永遠のものである。神戸の震災に絞つとけばよかった。関東大震災でも集中すればよかったかも。関東大震災はほとんどの文学者が体験している。死んだ文学者は一人だけだった。書き手が残ってくれたから出版の復興も早かった。菊池寛は悲観的だったが。関東大震災はそれまでの近代の矛盾がいっぺんに噴出したもの。大震災が無かったら昭和の時代はもっと変わった。大震災で負債をいっぱい抱えて無茶なことを続けた。今は建物の造り方も人々の意識も大きく違う。あの時は火を点けっぱなしにして避難したんやから。でも今は地下の影響が怖い。あの時は地下の心配はしなくて済んだ。原発の心配もしなくてはいけない。本当に安全なのかと。

秦 それはそうと『温泉文学事典』は今迄とは違う着想でしたね。

浦西 当時は冷暖房がなかったから。文学者は寒くなると熱海とかの温泉に行き何日も籠って書いていた。多喜二も温泉に泊まって書いていた。きちつと長いものを書こうとすれば家にいれば家族もいれば用事もできる。あの頃は旅館も安かった。梶井基次郎の旅館も粗末なものだった。あまりお金持ちでなくても泊まることが出来た。文学作品には意外と温泉が出て来る。角度を変えて拾ってみたら面白いやろうと。出るのが時間がかかった。入稿してから出版まで

が。著作権の問題が出て来たから。要約は著作権を冒している、という考え方が広がって来たから。司馬遼太郎の要約が遺族から訴えられて裁判で負けてからビビッてしまった。作家の文章を載せるわけではない、事典やから、というのがこちらの言い分、本人が生きていりやどうってことないんだが。『石川近代文学事典』で後ろに文学碑の一覧表を載せた。室生犀星の文学碑の俳句を載せたんだが、遺族が訴えたよってに問題になった。本人がおりや、かえって喜んでくれるのに。売れる本でもないのにビビッてしまつて、『温泉文学事典』は出るまでに時間がかかった。温泉が出て来る描写は引用が出来ない、短歌や俳句は引用しないとけない。弁護士も仕事がないからいろいろ言うてくる。長い引用はひつかかる。

秦 あちやう、あらう、広い世間ではそれほど厳しくなっていたんですね。

浦西 非営利の一般的な学術書ではなかったら、ひっかかってしまう。犀星の著作権が切れる直前だったから。それでなかったら、もう少し面白い本が出来た。

秦 浩瀚な文学碑事典もすでに刊行されていますし、地方自治体のHPには短歌・俳句の全文を載せたコーナーもあるのですのに。

浦西 それと旅館の悪口が書いてあるのは営業妨害になつてはいけないうのでカットした。

作家にとって正直な気持ちが見れている箇所を我々研究者は当たり前と思って引用したいんだが、そういう所を削った。面白みがなくなってしまったんだが、『温泉文学事典』は一番売れたんじゃないかな、再版が出たから。個人文学事典は出しにくい。個人情報を守ると言われるから。ヘンな時代になってしまった。生きている人の生年月日や出身学校のことは載せられない。文芸事典の時代は終わった。ほんのちよつとの時代の差がある。『四国近代文学事典』の時は、俳句の同人に往復はがきで本人の経歴を問い合わせたが返事をくれた。石川県のアレで懲りた。我々の学生の頃の何でもない事が通用しない。時代とともに変わってゆく。まあ、それを使って悪いことをする奴が出て来たからね。震災などテーマごとだったらまだ大丈夫かもしれない。

秦

話はプロレタリア文学に戻りますが、今後に残るプロレタリア文学の魅力はなんでしょう？

浦西

文学運動としてあれだけ大きい運動はなかったんじゃないか。それも東京だけではなく、地方でも若い書き手が生まれ、それが革命運動と結びついてゆく、きわめて特別なものだった。従来、本を読むのは知識人中心で農民や商人には贅品だった。しかし、プロレタリア文学が生まれてから、本を読む人が増え、大衆化が進んだ。それどころか工場で働いている人も文章を書くようになり、そこから作

家が生まれた。今までになかった現象だ。庶民の文化が高まっていった。プロレタリア文学の革命はソ連や北朝鮮のような社会を目指したのではなく、もつと夢のある理想社会を目指した。今は否定的にとらえられているけどプロレタリア文学があつたゆえに庶民の文化が豊かになった歴史的事実は消すことが出来ない。

現代社会ではプロレタリア文学に書かれているような現実がいっぱいある。電通の過労自殺がそうだ。労働組合がある時代にプロレタリア文学の時代の悲劇がなぜ起こるか、不思議だ。

昭和の時代と今の時代はちがうんだが、現代のプロレタリア文学が書かれないといけない。もつとも書いても社会の方がどんどん進んでゆくから書くのは難しいやろな。

秦

一九八六年に『日本プロレタリア文学書目』が出版されたのはびっくりしました。プロレタリア文学の単行本ではなく、プロレタリア文学に関わった作家の一九四五年までの書籍を全部拾い上げている。その探求の精神には圧倒されました。

浦西

プロレタリア文学の研究と言うことで多喜二や百合子やるだけでことを済ますんじゃないくて、例えば、林房雄とか藤森成吉も沢山の本を出している。それらをなんとかまとめた気持ちが強かった。

谷澤さんは幅広いんだが、ぼくにはここしかないと思っ

た。プロレタリア文学の本を集めることに集中した。谷澤さんは、「本を貸してください。」といえばすぐに貸してくれるんだが、それは一切しなかった。自分の手で集めた。他人の手を借りてはだめ、ここだけは！ って思っただろな。

谷澤さんの家に行ったら家じゅう本だらけで、書庫を見たら絶望的になった。こんだけあらゆるものが集まっているのに自分はどうかと考えた。一力所だけ徹底するしかない。

東京の青山毅さん（一九九四年没）とも近代文学館でよく一緒にした。青山さんもプロレタリア文学に関心を持っていた。集めていた。

秦 一九七九年に青山さんの御家を訪問し、本棚を見せてもらいました。きちつと整理されていましたね。

文学研究は無くならないと思うのですが、有効性はなかなか認めてもらえませんか。

浦西 近代文学に限らず、古典の研究でもこの人はすごい、という人がいなくなつた。『源氏物語』の研究でもそうだ。目先のことばかりやって、科研費にあたるかどうか、それほどばかり心配している。何十年かけてコソコソやる研究が無くなった。国の方針は良くない。近代文学の研究もそうだ。国文学研究にお金を出さなくなつた。そんなものは好きな人がやっておればいいので税金を投入してやらんでいい、

という考え方。自然科学だけいい、と言っている。

秦 文学研究は人間の研究だから「役に立つ」と思うのですが。

浦西 吉田精一の時代は大学で近代文学を教えなかった。京大もつい最近まで近代文学をやる人はいなかった。古典一本やりだった。高度成長で大学で近代文学の講座を設けるようになった。

秦 細かい話ですが、学生時代にマルクス・エンゲルスを英文で読んだ林房雄や浅野晃はなぜあのような転向をしていったのでしょうか。

浦西 林房雄はもとにも取り組む必要があったやろうな。才能があり過ぎたんだろう。『青年』は作家同盟に評価されなかった。彼の転向はきちつと調べておくべきであった。戦後は家庭小説・ホームドラマを書いた時期がある。三島由紀夫を惹きつける怪物であったことは確かだ。一面、わりと素直な面もあった。『越中谷利一著作集』を編纂する時にこの作品は実はあなたの作品ですか？ と聞いたことがある。そしたらそうだと認める返事を寄越した。案外素直な人だという印象を受けた。

秦 越中谷利一とも岐阜つながりでしたか。

浦西 そう。『岐阜文学』をやっていた大牧富士夫さんがなくなつたことを知らせてくれた。越中谷利一は戦後は俳句の方向に行った。会ったことはない。亡くなってからのつながりだ。江口渙との関係が強かった。越中谷はナツプに参

加し、江口渙もナツプに行った。

秦

京都に三月書房という有名な新刊本屋があつて、四〇年前に古書を集めた時に店主の後ろの棚の高いところに『越中谷利一著作集』が一冊置いてありました。それで、古書ではなく、新刊本として『越中谷利一著作集』を購入しました。

浦西

一段組み、七〇〇ページの大冊だった。手書きの原稿でコピーは青焼きの時代だった。箱は大変シンプルなものだ。森田草平を研究されたのも岐阜つながりだったんですか？

秦

浦西

やっぱり岐阜つながり。坂下高の文芸誌『友樹』で特集をやった。そのまま進んでいたら、漱石関係、その周辺を調べていたやろな。まあ、葉山嘉樹を調べてその方向には行かなかったけど。草平には面白い作品がある。部落問題を扱った『輪廻』もいい作品だった。草平はだいぶん集めた。漱石をやる人は多いから、漱石とその周辺の人たちの調査は一時やろうと思つたが結局はやらなかった。

秦

江口渙は『わが文学半生記』の中で森田草平をクソミソに書いていますね。日本共産党の同志なのに。草平の日記を読みますと共産党に入党してから大変誠実に党活動を行っている、勉強もしていますね。

浦西

真面目なんやろ。覚悟して入党したんだろう。草平の『私の共産主義』に入っていない文章も少し集め

たんですが、草平はエンゲルスの『家族・私有財産・国家の起源』を読破したり、頑張っています。江口渙はヌーボーとして漱石先生に叱られる森田草平を描いていますですが情がない書き方ですね。

浦西

江口渙は漱石山房にあとからちよつと顔を出す。格が違ふ意識もあつただろう。ねっからのやつかみもあつたかもしれない。

秦

二〇年ほど前に阿智にある草平の文学碑を見に行きました。細川嘉六の書いた文字がかすれていました。お寺の本堂を見て「ここで細胞会議をしていたんだな。」と想像しました。浦西先生が江口渙の「或る女の犯罪」を手厳しく批判されていますがこういう風に読むんですよと大変勉強になりました。

大田洋子をされたのもなぜなんでしょう？

浦西

やっぱり原爆がきっかけだった。彼女は悪口をよく言われていた。人間的に良くなかったんやろな。そのフアクターを除いて、原爆を描いた作品は読まなあかん、ということで大田洋子をやってみた。人がやっていない人をやったかつたんやな。借金を踏み倒したり、評判が悪い、全集もない、でも原爆ものはきちつと残さなあかん、と考えたのが調べるきっかけやった。

秦

三一書房がよく出しましたね。話を作ってくれた人がいて、知らない色々なメンバー

が入ってきた。良く出来た。四巻本だった。

秦 のちの『日本の原爆文学』を編むきっかけとなりましたね。

浦西 今は個人全集は出ない。インターネットの青空文庫が出たもんやから本が出にくくなった。文化が進むのはいいいことなのか、難しい。

秦 青空文庫は便利なのは便利です。スタンダードな作品ならわざわざ本棚を探さなくてもすぐに読み返すことが出来ますから。

全集では最近『谷崎潤一郎全集』が中央公論社から出ていますね。谷崎潤一郎と江戸川乱歩しか個人全集は売れない時代になってしまいましたか。

浦西 中央公論社は良く出した。でもあの全集は書誌をきちっとしていない。きちんとする人がいないんやろな、谷崎の研究者はたくさんいるのに。谷崎の書目はあるが初出をきちんと調べていない。全集というのならやつとして欲しい。いまの研究水準ならその辺のことはやっているもの、と思います、違うんですね。

河野多恵子さんは異色なんです。河野さんをされた理由をお聞かせ下さい。

浦西 それもやはり大阪の人やから。彼女は丹羽文雄のところに行くんやな。みんな左翼的な作家の所に行くのに珍しかった。田辺聖子と正反対。ある意味プライドが高いんやろな。田辺聖子さんの文学とは思えないと思うほどに。

大阪の人では、藤本義一や山崎豊子もしたかったが出来なかった。藤本義一は映画の脚本を書いていて、藤本家に保管されている話があった。思い切って見に行けば良かったが行かなかった。

秦 大阪のプロレタリア文学やその流れを汲む『関西文学』についてお聞かせ下さい。

浦西 『関西文学』は結局は同人誌なんやな。面白いのはプロ文系と織田作之助らが一緒になって『大阪文学』を出したことだ。

秦 『大阪文藝雑誌総覧』には明治の時代の『なにはがた』が最初に載せられていますね。

浦西 明治の大阪文壇があればどんな感じだったんですか。

浦西 京都や大阪にも出版社はたくさんあった。京都は仏教書を出すのが出版社の仕事で文芸ものには手を出さなかった。関西の一番ダメなところは文科系の大学を作らなかったことなんや。若い大学生が文芸ものに手を付ける。三高・京大からしか作家は出ていない。やっぱり大阪は商売人の街で出版社は文芸ものを出してもつぶれて行く。丁稚奉公のひとは文芸書は読まない。懐に入れられる立川文庫を読んでいた。江戸時代からの流れがあるんだが読者の層がまったく違う。

大阪はおばちゃんらが芝居を見に行く。その読み物を新聞小説が書いていた。新聞小説のとおり芝居が上演され

る。菊池幽芳や渡辺霞亭など新聞小説と芝居は密接な関係があった。連載の途中から早々と芝居になったものもある。お金にならない文芸ものは関西では育たなかった。連載小説と芝居と講談で当時の新聞は決まっていた。やはり読み手がいないと文学は育たない。後に大阪毎日芥川を客に迎えたがそれは大正も半ばを過ぎてから。

今みたいに流通機構もないし、全国ネットもないから文芸ものはやっぱり東京中心になる。それは昭和三〇年代から四〇年代まで続いた。

映画は違った。京都でつくって広まって行った。映画は大衆のものやった。

文芸ものは金にならなかったから若い人は、梶井基次郎もそうなんやが同人誌で発表した。だから当時の同人誌はレベルが高かった。いまはどうなんやろ、村上春樹はうまい書き手と言えるけど文学作品としてはもう一つのような感じやな。

秦

私も村上春樹は評価しませんが、世界中で読まれているので評価の食い違いに戸惑います。

ああ、もう二時間近くになってしまいました。先生のお身体にさわると思いますのでインタビューはこれくらいに致します。どうも長時間ありがとうございました。

葉山嘉樹へ、葉山嘉樹から

——浦西和彦先生のお仕事

竹内栄美子

『中野重治全集』第二十七巻に「葉山嘉樹」という項目の文章がある。これは、一九六六年十月号の『友樹』に掲載された「葉山嘉樹について」というアンケートに答えたものである。質問とともに再掲する。

一 葉山嘉樹について興味をもたれたことがありますか。

答え ある。最大の興味をもつ。

二 印象に残った作品がありますか。

答え ある。ほとんど全作品。

三 その作品について思うこと、また学んだもの。

答え 極上のもの。

四 現代でも葉山嘉樹文学は価値がありますか。

答え ますます。

とにかく返事を書きますが、葉山は私の先輩でも同僚でもあつて、いろいろな形で問いに答えるのは苦痛なほど

です。「現代でも……価値がありますか。」——こういう問いは、葉山を一行も読まない人の口から出るのにふさわしいと思うということをつくわえます。諸君を非難するものではありません。（六月十日）

この『友樹』が、浦西先生が関西大学を卒業後に勤務された岐阜県立坂下女子高等学校文藝部の雑誌であることをご存じのかたは多いであろう。葉山作品を愛するあまりアンケートの質問の仕方に苦言を呈した中野重治だけでなく、小田切秀雄、佐多稲子、平林たい子、久保田正文、寺田透、平野謙なども回答し、広く反響を呼んだ雑誌特集だったようだ。一九四一年うまれで二十五歳の若き浦西先生が生徒たちとともに編集作成した雑誌と考えるだけでも、葉山研究への情熱の深さの一端に触れるような気持ちになる。翻って自分が二十五歳のときに何をしていたかといえば恥ずかしくなる思いで、この葉山特集は、卒

業論文が「源氏物語」であったという浦西先生のその後の膨大な研究成果の出発点であったのだと改めて思われた。

「浦西和彦教授略年譜」『国文学』第96号、二〇一二年三月、関西大学国文学会）によれば、一九六四年三月に関西大学文学部国文学科を卒業し、四月から岐阜県立坂下女子高等学校教諭に就任、文藝部、新聞部、卓球部の顧問をされた。「坂下町の弥坂橋を越えると長野県の山口村である。山口村で葉山嘉樹が晩年を過ごした。当時、菊枝夫人が住んでいらした。坂下女子高校には葉山嘉樹と親交があった歯科医の松井恭平さんが非常勤教師をしていた。葉山嘉樹の作品に出合う」とある。同じことは『浦西和彦著述と書誌』第三卷『年譜 葉山嘉樹伝』（和泉書院、二〇〇八年一〇月）のあとがきにも書かれていて、坂下町に住むようになって初めて葉山の作品に出会ったという。就職した場所が縁となってその後の研究が進められる、その偶然に、いま多くの学恩を蒙っている私どもは感謝しなければならぬ。

＊

一九六四年に高校教諭として着任されて以来の葉山嘉樹に関する研究成果は、まず「近代文学資料6」として『葉山嘉樹』（桜楓社、一九七三年）にまとまった。同書には「葉山嘉樹年譜」「葉山嘉樹著作目録」「葉山嘉樹参考文献目録」「葉山嘉樹宛書簡―前田河広一郎・島田晋作・青野季吉・里村欣三―」が収録されている。ついで「人物書誌大系16」として『葉山嘉樹』（日

外アソシエーツ、一九八七年）が上梓され、その後『葉山嘉樹―考証と資料』（明治書院、一九九四年）が刊行される。同書には、Iとして「葉山嘉樹」「葉山嘉樹―悲惨なる過去」の拘束「葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」「淫売婦」と『海に生くる人々』『海に生くる人々』の改題・改稿・発表経過等について」「『海に生くる人々』と「蟹工船」「葉山嘉樹の「創作構想メモ」（写真版）について」「葉山嘉樹（昭和の文学・鼎談）中野重治・寺田透・浦西和彦」が、IIとして「葉山嘉樹と室蘭」「宮嶋資夫と葉山嘉樹」「浅田隆著『葉山嘉樹論―海に生くる人々』をめぐって―」「広野八郎著『葉山嘉樹・私史』―解説にかえて―」が、IIIとして「田口運蔵の葉山嘉樹宛書簡」「荒畑寒村の葉山嘉樹宛書簡」が収録された。

のちにまとまる四卷本『浦西和彦著述と書誌』（和泉書院）の第一卷『新・日本プロレタリア文学の研究』には、右の『葉山嘉樹―考証と資料』IおよびIIIの諸編と「葉山嘉樹宛書簡―前田河広一郎・島田晋作・青野季吉・里村欣三―」が、第二卷『現代文学研究の基底』には、第一卷収録文章とは別の葉山論が収載されている。書評などもあわせると「浅田隆著『葉山嘉樹論―海に生くる人々』をめぐって―」「葉山嘉樹「淫売婦」の女」「広野八郎著『葉山嘉樹・私史』―解説にかえて―」「葉山嘉樹と室蘭」「宮嶋資夫と葉山嘉樹」「葉山嘉樹断片」「浅田隆著『葉山嘉樹―文学的抵抗の軌跡―』」「葉山嘉樹・人と文学」といった八編が第二卷にはあり（これらのうちの四編は前掲書『葉山嘉樹

―考証と資料』Ⅱに収録されている)、第一巻とあわせれば、合計十八編の葉山論を数えることができる。もちろん、これら以外に第三巻には『年譜 葉山嘉樹伝』という大部の年表がある。

さらに、編纂書として、一九七五年から翌年にかけて筑摩書房から刊行された『葉山嘉樹全集』全六巻(編集委員は金子洋文・中野重治・寺田透・小田切秀雄・浦西和彦)および『葉山嘉樹短編小説選集』(郷土出版社、一九九七年)がある。『葉山嘉樹全集』があのようなかたちで読めるようになったのも浦西先生のお陰だろう。

*

これだけの葉山研究の蓄積をみて思うのは、数々の論考や全集の編集もさることながら、やはり『浦西和彦 著述と書誌』第三巻『年譜 葉山嘉樹伝』の質量ともに充実した成果である。日本近代文学研究では、荒正人の『漱石研究年表』がしばしば話題になるが、それに勝るとも劣らないこの年譜研究は圧倒的な存在感でせまってくる。ここには、一八九四年に福岡県京都郡豊津村に生まれ、一九四五年に開拓団員として渡っていた中国東北部、ハルピンの南方、徳惠駅すこし手前の列車の中で病死した葉山嘉樹の五十一年七ヶ月足らずの人生が、一日一日、日を追って詳述されている。作品批評はもちろんのこと、葉山は日記を残していたから、その記述に従った部分が多くあり、またそれ以外の多様な資料を駆使して、葉山の人生を生き生きと組み立てている。読ませる年表は『文化運動年表 明治・大

正編』『文化運動年表 昭和戦前編』(ともに三人社)をはじめとして、浦西先生の得意技であったが、この『年譜 葉山嘉樹伝』も同様に読んでいてあきない年譜となっている。

というのも、現在、『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集』(丸善雄松堂)を読む研究会を行っているなかで、葉山嘉樹が発行編輯兼印刷人であった稀少雑誌『労農文学』を一号から読んでいるが、この『労農文学』に関するさまざまな情報が『年譜 葉山嘉樹伝』に記載されているのである。これまで『労農文学』は『戦旗』派に並ぶ『文藝戦線』派の有力な雑誌として知られてはいたものの、復刻版もなく、所蔵館もばらばらで一括して参照できる状態ではなかった。DVD版として『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集』が刊行されたことは嬉しいことであつたが、それも浦西先生の所蔵資料によつて可能になったのだという。そして、実際に研究会で雑誌を読むようになって『年譜 葉山嘉樹伝』がいかに豊かな内容であるかに改めて気づかされたのだった。

『労農文学』は一九三三年一月に創刊されたから、『年譜 葉山嘉樹伝』一九三三年の記述をみると、村松梢風や長谷川伸や直木三十五がこの雑誌にそれぞれ援助金三十円ほどを出していたことが分かり、意外なことであつた。また、この年一月二十三日には堺利彦が亡くなるので、同郷のこの先輩の通夜、火葬、葬儀に参列し追悼文を書いたこと『労農文学』第三号に葉山が書いた追悼文「堺利彦氏を弔う」が荒畑寒村や堺真柄の文

章とともに掲載されている、二月二十一日には夕刊で小林多喜二の死去を知ったことなどが記述されている。小林多喜二の死については、連日記載されている日記からの引用がなされていて、浦西先生の論文『海に生くる人々』と「蟹工船」のなかでも葉山と小林多喜二との交流と文学性が報告され、また中野重治、寺田透、浦西和彦三名による「葉山嘉樹〈昭和の文学・鼎談〉」『群像』一九七五年三月号）においても詳しく語られている。二月二十三日の日記には「小林多喜二の屍体の解剖を、どの大学病院でも断つた。通夜に集まったものは片つ端から検束。無茶だ。今日午後一時から告別式だと云ふ。行つて、歪んだであらう顔を見て別れを告げよう。可哀想なことをした。政治的には意見を異にしてゐたが、好きな男だったのに。」とあり、浦西先生は右論文において「小林多喜二とは政治党派的に対立拮抗していたが、葉山嘉樹は小林多喜二に対する個人的な深い好意を日記に吐露している。しかし、葉山嘉樹と小林多喜二は、生前一度も会ったことがなかったようだ」と書かれている。『労働文学』には、堺利彦の追悼特集はあっても小林多喜二の記事は見られない。だが、葉山の多喜二への注目をこのように特筆する浦西論文によって、雑誌の誌面に現れただけではない実情を知ることができる。

*

さて、この『年譜 葉山嘉樹伝』からは、坂下女子高等学校赴任時からじまって葉山嘉樹へと求心的に研究を進めていっ

た痕跡と、その一方、葉山嘉樹から遠心的に研究が広がっていった形跡とがうかがえる。その双方ともが重要だ。広がっていったなかには、たとえば「田口運蔵の葉山嘉樹宛書簡」に見られる田口運蔵についての研究もあった。『労働文学』第一号の目次には、田口運蔵の「レニンからの伝言（全文削除）」とあり、雑誌のなかほどに「本誌の刊行は出版法によるので、同志田口運蔵の『レニンからの伝言』は、遺憾ながら全文削除の余儀なき結果になり」と事情説明されている。『文藝戦線』同人、また『労働文学』同人でもあった田口運蔵は、文学研究の場面ではそれほど知られてはいないだろう。のちに荻野正博『弔詩なき終焉——インターナショナルリスト田口運蔵』（御茶の水書房、一九八三年）がまとまるが、それ以前に浦西先生は右の「田口運蔵の葉山嘉樹宛書簡」（関西大学『文学論集』一九七五年十一月、創立九十周年記念特輯に初出掲載、『葉山嘉樹——考証と資料』に収録）をまとめていた。

それによれば、田口運蔵は、一八九二年に新潟県に生まれ仙台二高を中退後、密航者として海外放浪し、アメリカで片山潜とともに活動、アメリカ共産党に入党後はソ連に行つて、日本人として初めてコミンテルン第三回大会に出席し、レーニンとも会見している。一九二三年の後藤新平とヨッフフェの日ソ予備交渉のさいに、ソヴェト全権ヨッフフェの秘書として帰国した。このように革命運動史における重要な役割を果たしながら、田口運蔵の晩年は不遇であつたという。浦西先生は、田口が肺結

核や貧困と闘いつつ、別府、東京、御宿、伊東と療養生活を送りながら葉山にしたためた手紙を翻刻紹介した。紙幅の関係上ひとつひとつの紹介はできないものの、葉山とのつながりや『文藝戦線』を田口が親しく考えていたことがわかる手紙のそれぞれが興味深い。また田口について、浦西先生はこうも言っている。「田口運蔵は第一次日本共産党にも、またその後の第二次日本共産党にも正式に参加しなかった。日本共産党そのものが、田口運蔵のような人物を組織の中に抱擁するだけの成熟さに、まだ到達していなかったのであろう。田口運蔵の日ソ予備交渉の画策は、日本共産党と関係のないところでなされた。しかし、ヨッフエが来日したという事実は、ソビエト政府がいかに田口運蔵に大きな信頼を寄せていたかを明瞭に示しているであろう。」「日本マルクス主義の研究が講座派の人々を中心に進められるのは当然であろう。しかし、それ以上に講座派以外の人々の活躍が再検討されないことには、運動そのものの動態的把握が出来ないのではないか。田口運蔵などの思想的検討は日本マルクス主義研究のこれからの課題の一つであろう」。主流の講座派ではない領域、見過ごされた人物にもスポットを当てることが一九七五年の段階で提起されている。このような田口運蔵研究も浦西先生の葉山研究から広がった成果のひとつとして重要なものであろう。記憶しておきたい。

＊

最後になったが、肝心の葉山論において何度も書かれるエビ

ソード、葉山の二児「餓死」のことに触れておかねばならない。『葉山嘉樹―考証と資料』を読んださいに、一番印象に残ったのがこの二児についてのことであった。前掲の中野・寺田・浦西の鼎談「葉山嘉樹〈昭和の文学・鼎談〉」でも、浦西先生はこのことに繰り返し言及し葉山が非常に子煩悩だったと語っている。一九二四年十月に名古屋共産党事件で禁錮七ヶ月、未決通算六十日に決定、その後、巢鴨刑務所入獄中に妻子が行方不明となり、数え年五歳と四歳の男の子（長男の嘉和、次男の民雄）が相次いで死んでしまったことがたびたび記述されているのである。「餓死」という衝撃的な言葉は、葉山の小説「誰が殺したか」に出てくる言葉だが、「葉山嘉樹―悲惨なる過去」の拘束」では「二児の死は葉山嘉樹に大きな衝撃を与え、その後の作家・葉山嘉樹の生き方を決定してしまったといつてよい」と言われている。刑期を終えたあと、行方不明の妻子を探して心当たりを探しまわったものの絶望におわり、名古屋の労働組合運動には復帰せず、木曽の落合水力発電所の工事現場へ行く。ここにいる間に息子たちの死を知り「飲酒の癖を覚え」「ひどくニヒリスチックになつてしまった」（自作年譜）という。犠牲者の家族に対する組織的な救援活動などなかった時代に、残された家族は途方に暮れたに違いない。

巢鴨刑務所入獄のまえ、一九二三年六月に収監された名古屋刑務所には、妻の喜和子が子供を連れて面会にきていた。『年譜 葉山嘉樹伝』には、葉山の「獄中記」から多く引用されていて、

「会へないと淋しい」と書く葉山がいかに妻子思いであつたかがうかがえる。一九二三年九月七日には「此四日、きわ子は名古屋から離れてゐるやうな気がする。若き燕がゐたのか、きわ子が来た。一日赤尾（穂）に泊つたと云ふので嫉けた。が、今はそんな時ではない。食へさへすればいいのだ。命さへあればいいのだ。もう彼女が他の男と結婚してもいいから丈夫で子供を育てゝくれ。俺はもう俺の運命に見切りをつけた。あゝ人世は苦しいものだ。泣くにも泣けない苦しさだ」と引用されている。妻がほかの男性のもとに走つたのか、嫉妬の思いを抱きながらも、命さえあればいい「丈夫で子供を育てゝくれ」と願う葉山の痛切な声が響いている。

「葉山嘉樹は、愛児二児も「餓死」させてしまったという「悲惨なる過去」を背負うて、プロレタリア文学運動に入つた。葉山文学の根柢にあるものを、前掲論文「葉山嘉樹——「悲惨なる過去」の拘束」で浦西先生はこのように語る。そして、労働運動に挫折し、家族を失い、そこから文学運動に入つていった葉山は、なにか問題があつたときには常に労働の現場に、それも社会の底辺で働く人のところに帰って行くという。そういえば、中野重治「村の家」のなかで父藤作が転向後の勉次にむかつて筆を捨てよと言ひ、土方に行つてゐる里見がまつとうな人間のやり方だと語つてゐた、その里見は葉山嘉樹がモデルであつた。そこには勉次が否定した「畏」につながる問題点があつたといへ、葉山嘉樹は、浦西先生によれば常に社会の底辺で働

く人のところに帰つて行く人だつた。

このような葉山の文学、葉山嘉樹という人をまるごと掴まえるようにその人間性を明暗含めて立体的に描き出した浦西先生の研究は、いまもなお文学研究のひとつの指針として屹立しているだろう。それは、峻嶺として私ども後進の前に聳え立っている。だが、後進を峻拒するのではなく、多くの恵みを与えてくれる豊かな嶺である。大阪文学や温泉文学など軽みのある洒落な文学にも造詣が深かつた先生の文学観の根柢には、坂下町以来取り組んできたこのような「葉山嘉樹」があつたのではないか。ただし、両者は対立しているのではなく、共通するその原型は、理論重視の観念的抽象性とはおよそ無縁の、具体的な庶民の生活に基盤をおく人間研究にあつた。その時々の研究の流りに左右されない、プロレタリア文学研究における資料博搜の徹底も、そこに通じているように私には思われる。（二〇一九年一月三日）

超人・浦西和彦

——氏のプロレタリア文学研究に導かれて

大和田 茂

1

浦西和彦のことを思い出すとき、一口で言えば、細くて長い付き合いだったという表現が適当であろうか。ときどき定期的にお会いするような仲でもなく、出版などで濃密な関係性もなかったが、晩年に至るまでご著書をしばしば恵送していただき、恐縮の極みだった。また、ときおりの資料などの問い合わせには、つねにきちんとお応えいただき、進呈した拙文・拙著などにも、必ずご返信を頂戴した。

浦西氏と最初に顔を合わせたのは、たしか一九八五年五月二五日、日本社会文学会の創立大会後の懇親パーティーの場で、少し言葉を交わしたと記憶する。氏は学会というものにはあまり出席しないようであったが、社会文学会には特別の思いもあったのだと思う。この学会にもめったに顔を見せなかったが、

印象深いのは、一九八八年一〇月、大阪の帝塚山学院大学で開催された秋季大会研究発表の司会ぶりだった。「発表時間を多くとりたいので、発表者紹介は省く、したい人は自分で、では始めます」というだけの味もそつけないもので、いかにも書誌学者らしく合理的だなと一人感心していた。

学会等ではめったに会うことのない浦西氏だが、氏が四〇代半ばから五〇歳近くの頃であろうか、ときどき国会図書館や日本近代文学館で姿をお見かけした。お互い調べものに集中しているのでもろん短いあいさつ程度だが、氏は私に対して「大変やねえ」と言われるのがつねであった。東京にいる私の方から見れば、関西から出てきて調べものに歩き回る方が大変だろうと思うのだが、怠け者の私にいつもこんな言葉をかけてくれた。一度か二度か忘れたが、駒場の文学館で帰りが一緒になり、駅前の喫茶店で一時間ほどおしゃべりをしたこともあった。おそ

らく私が、浦西氏の師にあたる谷沢永一氏を通じて親交していた小田切秀雄氏の門下だということもあり、弟分のように親切にしてもらったのかもしれない（『小田切秀雄全集』別巻で年譜と書誌を担当したのは、浦西氏だった）。どちらかというと童顔の方で、いつまでもお若く見えるので、私より二、三歳上かと思ひ込んでいたら、九歳も年長であつたとは、うかつにもお亡くなりになってやつと気づいた。

それはまだインターネットなどない時代であつて、関西在住でも「何か書誌を作成しよう」とすれば、坂下町（氏が若い頃高校教師をしていた岐阜県中津川市坂下町——大和田注）にいた時と本質的には同じであつて、結局、東京まで出かけて行くより仕方がない。そんなに古い雑誌や特殊な本でなくて、ごく最近の、しかもどこにでもあるように思われる本や雑誌が、地方にいるとなかなか容易に確認することが出来ないのである」（「書誌偶感（私の書誌作法）」、『図書館雑誌』一九八九年（二月号））と書いているように、徹底した資料調査のためには、頻繁な東京出張は必須だった。やはり学会などに出ているヒマはないのである。

2

氏のことは社会文学会創立以前から、むろん存じ上げていた。私たち法政大学系の研究者たちで一九七七年に大正労働文学研究会を立ち上げ、機関誌『大正労働文学研究』を七号まで出し

た。浦西氏はその定期購読者だったはずで、私に限らず会員諸氏は氏から資料提供を受けたり、また問い合わせをいただいたり、ときどき情報交換をしていた。そして研究会解散後、『日本プロレタリア文学書目』（日外アソシエーツ一九八六年）が出たときの衝撃は忘れられない。こんな群小作家までと思うほど、多くのプロ文学家の著作を一九四五年まで二五一一冊も網羅している。我が研究する労働文学の諸作家、新井紀一、丹澤、中西伊之助、平沢計七、平林初之輔、宮嶋資夫、宮地嘉六の著作リスト、データが詳細に収録されている。わずかな欠落はあるが、ほぼ完ぺきに近い。驚きとともに、研究会での成果が少しお役に立っているというひそかな実感を得た。むろん、葉山嘉樹、中野重治、佐多稲子、徳永直など少数を除けばプロレタリア文学作家には、しつかりとした書誌がない。小林多喜二でもあまた研究書はあるが、書誌は不十分で、なぜか浦西氏は手つかずであつた。この『書目』は私には座右の事典のような存在となつている。その後『著述と書誌』第四巻ではさらに増補改訂し充実した内容になつているが、横組から縦組になつており、目録類は個人的には横組の方が読みやすい気がして、旧版を使うことしばしばである。

その後、浦西氏は様々な人物の書誌、全集、事典などを破竹の勢いのごとく編纂しているが、総合的な仕事としては『昭和文学年表』全九巻（明治書院一九九五～一九九六年）という大仕事を達成して、さらに『文化運動年表』の明治・大正編と昭和

戦前編二冊（三人社二〇一五、二〇一六年）を「浦西和彦著」として刊行したときには、また驚かされた。たとえば「宮地嘉六が牛込の下宿を引き払い、本郷千駄木町の下宿に移る」（一九一七年九月頃）とか「小林多喜二が新井紀一宅に出かけたが、見当たらず会うことができなかった」（一九二八年五月一九日）とか、実に細かく文学者や社会運動家の動向が日録風に書かれている。浦西氏は、どれだけの作家の年譜や伝記、日記、あるいは新聞の彙報欄等を机上にそろえてこの年表を書いたのだろうか。あるいは、氏の記録作業はカードに拠ったのか、またはパソコン出現後はそのスキルに習熟していたのか、作成の現場を垣間見たいという思いに駆られたこともあった。

たしかなことは、『日本プロレタリア文学書目』から上記の年表類、そのあとに出た『日本プロレタリア文学史年表事典』（日外アソシエーツ二〇一六年）までのまさに超人的な仕事の産物のおかげで、後塵を拝する我々プロ文研究者の仕事はどれだけ効率が上がったことか。その学恩は測り知れない。ついでに言えば、これら労作の数々には、すべて索引（人名索引、書名索引）が付してあることである。これは重要で、各書の機能性をさらに高める。たしか「索引のない本は死刑にせよ」とは、東京・本郷の古書店ベリカン書房店主にして内村鑑三研究者である品川力氏の名言であったと聞くが（氏の名を冠した文庫が日本近代文学館にある）、索引があるのとないのでは大ちがいののである。実は、浦西氏の著書にも索引のないのが少なくとも二冊ある。

それは『日本プロレタリア文学の研究』（桜楓社一九八五年）と『現代文学研究の枝折』（和泉書院二〇〇一年）という代表的論文集であり、かねがねそれに不満を抱いていた私は、それらが『著述と書誌』の第一巻、二巻として増補刊行されたとき、巻末に詳細な「人名索引」「書名・作品名・記事名索引」が付されているのを見て、またまた感じ入った次第だった。

かつて拙著『社会文学・一九二〇年前後―平林初之輔と同時代文学』（不二出版一九九二年）を出したとき、浦西氏から「地味なうえに地味な仕事」という評言をいただいたが、私はそれを褒めことばとして受けとめた。なぜなら「地味なうえに地味な仕事」を重ねて、数々の書誌の大作をなしている浦西氏だからこそと、不遜にもそう思ったからである。

3

ところで、浦西氏は書誌の人だけではない。先の二冊の論文集を読めばわかるように、プロレタリア文学作家を中心として、実証的かつ的確な読みに裏打ちされた多くの作家論、作品論も発表している。たとえば「伊藤永之介「梟」について」（『日本プロレタリア文学の研究』所収）は、先行研究文献の誤読、誤記を指摘・訂正したうえで、プロレタリア文学運動壊滅の逆境を乗り越え「昭和十年代にもっとも奮闘した作家」という平野謙の言葉を引きながら、「梟」という作品が、戦時下、秋田の農

村における濁酒密造の悲劇を描いたものとして、次のように述べる。

酒役人の非道な圧迫ぶりが最初に描かれる。「梟」には、このお作婆さんの話をはじめ、濁酒密造について、お峰と与吉の物語をたて糸にして、無数の挿話書き込まれている。濁酒密造に関係するおびたらしい人物が出てくる。特定の個人の性格を主に深く追求して描くということに作者の興味や関心があるのではない。個人の生活や心理よりも濁酒密造という現実の社会相を描くことにあるようだ。

浦西氏は、「梟」から始まる「鶯」「鴉」「燕」「鷗」などいわゆる鳥類ものとされる、伊藤の農村小説の手法を鋭く見抜き、また、これらは現実よりどぎつく描いたフィクションなのだとする作者の言を鵜呑みにせず、当時の新聞記事を精査して、戦時下の農民たちの小説同様のやそれ以上に過酷な窮乏、悲惨な状況を発見し、そこに小説のモデル性を見出している。そして、伊藤が「戦争に進んでいく時勢に決して批判の目を失って」いない点を指摘し、ファシズムに抗した作家の一人だと位置づけるのであった。

『本庄陸男全集第五巻』解説』（『現代文学研究の枝折』所収）においては、山田清三郎が一九二九年にプロレタリア文学作家から採ったアンケート（略歴、プロ文学作家になった動機、作品リ

ストなどに答えた本庄の回答、すなわち米も食えない少年期の悔しさが「青年期になりかける頃平沢計七氏のアヂ演説に体係づけられました」（プロレタリア文学に入った動機）という回答に氏は注目する。ナツプ系の作家、運動家として「猪突猛進」の勢いで活動した本庄が、当時、「最も模範的な働き手」であり公式的な作品や教育論しか書かなかった理由を山田が指摘するナツプの政治主義的方針の「誤謬」に見るよりも、本庄自身が平沢計七のアジェンションに自縛され、むしろ積極的にプロバガンダ芸術に惹かれていた結果だという見解を示している。そして、プロ文学運動消滅期に至り、これらの呪縛が解け本庄は文壇でも注目された小説「白い壁」で、やっと文学的本領を発揮し始めたとみるのであった。

これら慧眼というしかない独自の作品論、作家論にはいろいろ教えられるが、さらに浦西氏の別の側面をあげるなら、大阪ゆかりの作家に関する仕事の数々であろう。谷沢永一、武田麟太郎、開高健、織田作之助、田辺聖子、河野多恵子といった人物の書誌や全集編集に加え、『大阪近代文学事典』（和泉書院二〇〇五年）、『大阪近代文学作品事典』（同二〇〇六年）、『大阪文学書目』（遊文舎二〇一〇年）などがある。故郷大阪への偏愛、いい意味での大阪への文学的愛情発露の仕事といえる。

私にとって、浦西氏の死は突然であった。まだご活躍中とばかり思っていたのに、闘病生活を送っていたとは知らなかった。七六歳とは惜しまれるべき年齢だと思うが、還暦を迎えて刊行

した『現代文学研究の枝折』の「あとがき」には、すでに「私にはこれから残された最後の時間の猶予がどのぐらいあるのか、一切わからないし、見当もつかない。ただもはや暢気にのんびりに構えているわけにはいかない年齢に達したことは確かである。それだけに残された時間を無駄にしたくないという思いが切実にする」という一節があり、これを読んだとき、人生九〇年の時代、こんなことを言うのはまだ早いのではないかと思っただ記憶がある（念頭には、早逝した書誌学者青山毅氏のことがあったかもしれない）。しかし、この立派な覚悟の通り、その後の一五年間、『著述と書誌』四巻をまとめ、一〇冊以上の書誌、事典、年表の刊行を果たした。私のような常人には及びもつかない情熱とパワーの持ち主であった。やはり超人だったといえる。

■特集 浦西和彦の仕事

『浦西和彦 著述と書誌』全四巻について

伊藤 純

はじめに

浦西和彦先生が亡くなられて、はや二年近い時が過ぎた。

浦西先生を知ったのは、ちょうど二〇世紀の終末近い一九九九年五月、貴司山治日記の存在について問い合わせを頂き、関西大学をお訪ねして、その所蔵状況をご説明した時である。その後、東京の私の自宅にお出でになり、その日記の現物を見られた。確か三日間ほど通ってこられ、リビングの一隅で終日読みふけておられたのを記憶する。

しかし、貴司の日記は一九一〇年代から死没直前の一九七一年に至る膨大なもので、とても数日で読み切れるような代物ではない。結局、プロレタリア文学運動の時代を中心に何冊かをお貸しして、それは後日書き起こされ、関西大学国文学会紀要に活字となって掲載された。¹⁾

そのようなことを機縁として、その後、貴司が戦前編集刊行

した雑誌『文学案内』の復刻刊行にもアドバイスを頂き、また、特に記憶に新たなのは、私が戦前の小林多喜二全集刊行への貴司山治の関わりを探索しているとき、その決め手となるような小文が掲載された資料をご恵贈くださったことである。

それは、戦後最初の新日本文学会編『小林多喜二全集』全九巻（一九四八年―一九四九年）³⁾——いわゆる「新日本文学会版」に挟み込まれていた『月報』である。全集そのものはともかく、それに挟み込まれていた『月報』は滅多に出会うことが出来ない。ところがそのことを聞き及ばれた浦西先生が、たまたま（？）もっておられた月報の現物を送ってくださった。なにげないハトロンの封筒でそれが届いた時は、本当に驚いたものである。

一、『浦西和彦 著述と書誌』全四巻の概要

『浦西和彦 著述と書誌』全四巻は、浦西和彦の主要な著作

と研究を集大成した著作集と言えるもので、二〇〇八年一〇月
〜二〇〇九年二月の間に大阪の和泉書院から刊行された。A5
判クロス装箱入り、一巻毎に青、黄、赤、緑と、異なる色のク
ロスで装本されている。

その内容は――

第一巻『新・日本プロレタリア文学の研究』 二〇〇九年一月
三〇日刊

第二巻『現代文学研究の基底』 二〇〇九年二月
二〇日刊

第三巻『年譜 葉山嘉樹伝』 二〇〇八年一〇
月二〇日刊

第四巻『増補 日本プロレタリア文学書目』 二〇〇九年一月
二〇日刊

となっているが、巻序と刊行の順序は一致しない。実際の刊
行順序は、第三巻・第四巻・第一巻・第二巻である。

最初に刊行された第三巻は、本誌（占領開拓期文化研究会『フェ
ンスレス』第五号）掲載の秦重雄「浦西和彦先生インタビュー」
でも語られているように、学生時代に浦西がたまたま読んでそ
の良さに驚き、さらにまた大学卒業後たまたま赴任した坂下女
子高校（現・岐阜県中津川市・県立坂下高校）の近くにかつて住ん
でいたという二重の偶然に彩られた「葉山嘉樹」の年譜・伝記
が収載されている。

二番目の刊行が、プロレタリア文学研究者の座右の書として

膾炙する『増補日本プロレタリア文学書目』である。

そして、この書誌学的なものの後に、漸く『議論』のモチー
フが配される。『新・日本プロレタリア文学の研究』『現代文学
研究の基底』の二冊である。もちろんここでもその方法論は書
誌学的、実証主義的だが、そういう方法によりながら、論旨は
きわめて告発的――喧嘩腰といってもいいような激しいものが
ある。

埋もれるべきでないものを埋もれたままにしてしまっている
人々の怠惰への怒り、埋もれている良きものへ寄り添おうとす
る愛と焦り……そして浦西は、その告発の手段として超実証的
としかいいようがない、書誌的トリビアリズムを展開するの
である。

二、「年譜 葉山嘉樹伝」の“超”書誌学

第三巻『年譜 葉山嘉樹伝』はA5判8ポイント組五〇〇頁
を費やした大著である。

しかし、だいたいこの著作の表題自体が奇妙だ。普通、年譜
と言えば年表的なものを想像させる。他方で「伝」というと、
その主人公の人となりや身辺の出来事を物語る物語的記述を想
像する。この二つのタイトルが共存する世界とはどういうもの
なのだろう。

まず、この『年譜 葉山嘉樹伝』の目次を開くと「一八九四

年（明治二十七年）甲午 数え一歳」に始まって「一九四五年（昭和二十年）乙酉 数え五十二歳」の没年まで、一年刻みの年次が何の説明もなく並んでいる。

そこで試みに冒頭の出生日の記載『浦西和彦 著述と書誌』（以下『著作集』と略記）第三巻、三頁）をみると「三月十二日（月）福岡県京都豊津村（現在、みやこ町）大字豊津六百九十五番地に生まれ」に始まって、祖父母、異父、異腹の縁戚に至る係累、維新期の一家の動向、先行研究の矛盾の指摘など、この一日だけで記述は一九頁におよぶ。

また、一九二五年二月三十一日、「淫売婦」が評判となり、文芸戦線同人の忘年会に呼ばれていき、気炎をあげるインテリ・プロ文の連中に反感を感じた葉山が、山田清三郎と乱闘を演じ、あげく山田を投げ飛ばした瞬間に炭鉱夫仕込みの和解のセレモニーを演じて見事に座を納める姿を、山田自身の「プロレタリア文学風土記」からの引用で紹介している『著作集』第三巻、一一三頁）。

さらに、客死というにはあまりにも悲惨な葉山の死の間も、長女財部百枝の記述を長く引用することによって十分に語らせている。一九四五年一〇月一八日（木）の項『著作集』第三巻、四九〇頁）では財部百枝の一文をこのように引く。

駅に停車すると、満人が籠の中に食物を入れて売りに来る。マントウ、ゆで卵、鶏の丸焼きなど、だんだん残り少

なくなるお金に心配する。「百枝、あれ買おうよ」と父は鶏の丸焼きを指す。「まだ先が長いよ。我慢しましょう」とマントウか、ゆで卵で我慢する。こんな日が続いていく日が続いた。

……うとうとして、ひんやりした感じで、目を覚ます。汽車は停車しており、駅のかたわらのどろ柳の太木に数知れぬカラスが黒々と群がり、ガアガアとやかましく、鳴いていた。「お父さん、お父さん」と呼んでも返事がない。もう一度「お父さん、お父さん」と呼びながら肩にさわったら、もう冷たくなっていた。

暖かい身体から離れないシラミが、もう父の死を知らせるかのように、はい出していった。

（財部百枝「父・葉山嘉樹のこと」、『プロレタリア文学研究』芳賀書店、一九六六年一〇月二〇日）

そして、この『年譜 葉山嘉樹伝』は、主人公の死を報じる朝日新聞の記事の引用で終わっている。

『朝日新聞』東京版一九四六年六月四日付けは、「葉山嘉樹氏（作家）は昨年春長野県西筑摩郡の満州第一木曾郷に入植してゐたが、終戦と同時に現地を脱出、帰国の途中昨年十月十八日、ハルビン東方徳恵で病没した旨、三日朝長野県西筑摩郡山口村の自宅に帰った長女桃子さんから伝えられた。享年五十三」と訃報を、その死去から八ヶ月後に報じた『著作集』第三巻、

このように、葉山嘉樹という一人の作家の生涯を、浦西は、戸籍謄本や新聞記事などの同時代資料、あるいは信頼できると判断された書き手の述懐、記述、など、第三者の言質を引用することによって、正に『引用の集大成』として描き出したのである。その死亡の記述さえ、自らの言葉で言うことをさけ、誤記を指摘しながらも新聞社の死亡告知によって語らしめた。

自らの意見や「気持ち」でダイレクトにものを言うのではなく、徹底して「資料」「第三者の言質」を綾なすことによって、そこから醸し出される「意味」の世界を讀者自身に感じ取らせるという独特の歴史と文学の認識方法——「浦西学」を『年譜葉山嘉樹伝』は提示したといえるであろう。

三、『新・日本プロレタリア文学の研究』について

それに対して、第一巻『新・日本プロレタリア文学の研究』と第二巻『現代文学研究の基底』は、議論の書である。この第一巻には「新・」という文字が添えられているように、約二五年前『日本プロレタリア文学の研究』（桜楓社、一九八五年五月二五日）が編まれており「新・」はこの旧版の増補改訂版と言うことになる。

まずここでは、目次を一瞥しただけで、浦西がどんな思いでプロレタリア文学の作家に対峙したかがわかる。取り上げられ

ている作家を列挙すると——

前田河広一郎、江口渕、黒島伝治、岩藤雪夫、徳永直、山本勝治、伊藤永之介、里村欣三、本庄睦男、宮本百合子（旧版）、大田洋子、藤森成吉、越中谷利一

が挙げられており、文戦派の人々が大部分である。プロレタリア文学運動の中で戦旗派（ナツプ派）と文戦派（労農派）が対立した流れとして存在し、戦旗派がメジャーな存在だったことは周知のことだが、浦西はあえてマイナーだった文戦派の人々に眼差しを向ける。そこで、文戦派の代表的作家と言える岩藤雪夫についての浦西のコメントを見ると、

岩藤雪夫といえば、戦前のプロレタリア文学運動において、一時期ナツプ派の小林多喜二と並び称せられたこともあった文戦派の代表的作家の一人である。……しかし、この岩藤雪夫を総体的に論じた評論や研究論文は管見に入ったかぎりまだ一篇もない。

（『著作集』第一巻、四五頁）

と述べ、「岩藤雪夫はプロレタリア文学研究のなかでもうすこし注目されてもよい作家ではないか」（『著作集』第一巻、四六頁、五七頁）と、同じ論文の中で二度までも嘆き、二五頁にわたつ

て岩藤の作品を、題材の検討まで含めて詳細に論じている。
加えて――

戦後のプロレタリア文学研究は、ナツプ派の作家たちを中心に進められ、どうしても文戦派の作家たちを本格的な研究対象として取り上げることが極めて少なかった。

『著作集』第一巻、一一一頁

として、「経歴未詳の作家たち」という一項がもうけられ、何人かの書き手の名が挙げられるが、その中で、一九二九年、鉄道自殺を遂げた山本勝治という人物の記述を紹介しよう。山本勝治は「十姉妹」(『文芸戦線』第五巻第五号、一九二八年五月一日)⁽⁵⁾で注目されたが、その作風から農民作家に類別され、多くの論評がそれを踏襲するばかりで「経歴未詳」の世界を脱することが出来なかった。浦西は、例のごとく徹底した「身元調べ」と浩瀚な書誌的追求によってこの作品の原題が「晩暉」(タ映エの意)であることを突き止め作者のモチーフを解明し、さらには彼が農民ではなく商家の子弟であることを確認。農民子弟の農村体験による「農民小説」というパターナルな、私小説的発想に異をとねえる。

このように、浦西の姿勢は一貫して埋もれた人、誤解されている人、の無念を晴らすというような、「弱者」への熱い視線が特徴である。

従ってその反面の「埋もれたまま放置する」「誤り・誤解を放置する」という怠慢に対しては焦慮と怒りを隠さない。その典型は同じこの第一巻に収載されている「宮本百合子全集(河出書房版) 逸文について」で見ることが出来る。これは、この版の宮本百合子全集の、編纂の杜撰と怠慢に対する二九頁に及ぶ怒りに満ちた告発である。紙数の関係でこれ以上触れないが一読に値する一文であろう。但し『旧版』のあとがきで「新日本出版社版『宮本百合子全集』……が完結した今日において、その(告発の)使命はすでに果たしたものと考える。」と書かれているが、それでもなおかつそれが『著作集』に採録されているというのは「歴史的文書」として諸家への戒め、という意味が込められているものと思う。

おわりに

浦西先生のご自宅に伺うことになったのは先生が関西大学を定年退職され、その膨大な資料コレクションは県立あきた文学資料館に寄贈された、と聞いた後のことだった。噂の続報で、寄贈されたのは活字系の刊本や雑誌で、生資料はまだお手元にあると聞いたのである。二〇一三年春、占領開拓期文化研究会の二、三の方と、法隆寺に近い浦西先生の自宅に押しかけた。

先生は座敷一杯に、生資料のファイルをひろげて見せてくださると同時に、どこか適当な場所に持ち出して複写しても良い、

といって下さった。しばらく後に我々は再度車で伺い、生資料綴りを立命館大学の研究室に運びスキャナーによって画像データ化した。さらにデータベースとしての充実を図るために「昭和戦前期プロレタリア文化運動資料研究会」が組織され、小樽文学館池田寿夫旧蔵資料、大原社研資料、札幌大学松本克平旧蔵資料も加え、二〇一七年丸善雄松堂からDVDデータベース、昭和戦前期プロレタリア文化運動資料研究会編『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集』として刊行することができた。

その間、何度も浦西先生のお宅に伺うことになったが、そのたびに（日中にも拘わらず！）ワインやお寿司や、とさまざまなおもてなしにも預かることになった。そして最後は、奥様が運転する車で、王寺の駅まで送っていただくことが通例になった。……何時の頃からか、これに先生も同乗され、王寺の駅まで送って下さるようになった。実は、我々は、その深い意味に気づけなかった。……おそらくその頃、すでに先生は余命が極めて短い臓臓がんに罹っているということを告知されていたのだと思う。

王寺の駅は跨線橋の上の改札口に上がるために、幅の広い階段がある。階段を半分くらい上がって振り向くと、ご夫妻は階段の下に立って見送っておられる。会釈をして少し上がってまた振り向くと、ご夫妻はまだ立っておられる。また会釈して階段を上る……何度かそんなことがあって、我々は一度中段で会釈したら、あとは振り返らず改札口に突進することにした。

二〇一七年九月一日、我々は資料集のDVD版が上梓されたことをご報告するためにお宅に伺い、またいつもと同じようにご馳走にあずかり、王寺の駅まで送っていただいた。跨線橋の階段を上り、中段で会釈するいつものようにご夫妻は階段の下に立ってこちらを見ておられた。我々もいつものように、あとは振り返らず階段を駆け上がった。

浦西先生の姿を見たのは、それが最後であった。

注

(1) 関西大学国文学会紀要『国文学』八一号（二〇〇〇年一月）、八二号（二〇〇一年三月）、八五号（二〇〇二年二月）、八六号（二〇〇三年二月）に掲載されている。なお、この貴司山治日記はその後、立命館大学貴司山治研究会（中川成美ゼミ）の方々の尽力によってその全部、約一万三千画像が画像データ化され、貴司山治研究会編『貴司山治全日記DVD版』（不二出版、二〇一一年一月二〇日）として刊行されている。

(2) 『文学案内』は文学案内社より、一九三五年七月一日～一九三六年二月一日の間に刊行された。二〇〇五年六月一〇日、不二出版より復刻されている。

(3) この全集は当初全一一巻および別冊二巻が計画されたようだが、実際に刊行されたのはそのうち第一巻～第九巻である。

(4) 引用本文および書誌の記載は、『著作集』第三巻を参照した。

(5) この作品は戦後、臼井吉見ほか編『土とふるさとの文学全集』
第二巻(家の光協会、一九七六年五月二〇日)にも収載された。

書誌とリアリティの追究について

鳥木 圭太

浦西和彦氏の業績を振り返るとき、やはり見逃せないのはその全体に占めるプロレタリア文学研究の比重の大きさであろう。

特に葉山嘉樹研究に関しては第一人者として、その研究成果は現在の葉山嘉樹研究の基底を成すものとなっている。今、『著述と書誌 第一巻 新・日本プロレタリア文学の研究』（和泉書院 二〇〇九年、以下『著述と書誌』一卷と略記）を繙くと、その第Ⅱ部に葉山嘉樹に関する論考が置かれ、第Ⅰ部には作品研究を中心としたプロレタリア文学に関する論文が収録されているが、その多くが文戦派の作家、作品であることに気づく。

目次から第Ⅰ部に取り上げられている作家を列挙すると、前田河広一郎、江口渙、黒島伝治、岩藤雪夫、徳永直、山本勝治、伊藤永之介、里村欣三、本庄睦男、宮本百合子の一〇名であり、文戦派を脱退し作家同盟に移った黒島を含めると一〇名中六名が文戦派の作家ということになる。

このことは「文戦派の作家たちを本格的な研究対象として取

り上げることが極めて少なかった」「戦後のプロレタリア文学研究」^①に対する浦西氏の批判的姿勢の表れでもあるが、同時に、文戦派の文化運動の実践の中に、ナツプ派とは異なる文脈で文化運動と政治運動の結節点を見出していたと思われる氏の問題意識の一端をうかがうことができる。この問題意識は、一昨年丸善雄松堂から刊行された『昭和戦前期プロレタリア文化運動資料集』^②に収録された浦西氏のコレクションにも如実に反映されている。その収集対象はナツプ・文戦派を問わず、地方組織において配布されたガリ版刷りのビラや報告書、同人誌、演劇関係資料にまで及んでおり、氏の関心がプロレタリア文学運動にとどまらず、社会・文化運動全般にまで向けられていたことは一目瞭然である。

また伊藤永之介や岩藤雪夫、山本勝治、貴司山治といった、戦後のプロレタリア文学研究の主流からは外れたマイナーな作家たちに光をあてたのも浦西氏の大きな功績の一つといえるだ

ろう。氏の研究は、戦後のプロレタリア文学研究において、その沃野の広大さと多様性を開示し、後進の研究に先鞭をつけたのである。

こうした浦西氏のプロレタリア文化運動への興味関心が、氏の業績のなかにどのような形で結実しているのか。『著述と書誌』第一巻に収録された各論考を中心に、プロレタリア文学研究における浦西氏の業績を振り返って考えてみたい。

浦西氏の業績について再検討する際、必ず言及されるのはその書誌的分野における膨大な業績についてである。しかし、一言で言うならば浦西氏にとつての書誌研究とは、目的ではなく手段であつたのではないか。前田角藏氏は浦西氏の研究集のタイトルが『著述と書誌』であることに言及し、

本書のネーミングにおいて、「著述と書誌」というように、どうして氏が「著述」にこだわつたのかと言えば、そこには、浦西Ⅱ「書誌」という世間の評価への氏なりの強い異議申し立てが含まれているように思う。それは「書誌」抜きのテキスト論、あるいは（読み）の理論、パフォーマンスへの批判でもあつた。

との確に指摘している。こうした浦西氏の問題意識は、次の引用部に述べられている主張からも明らかである。

文学作品の理解の前提として、先ず作品の書誌的事実をきちんとする必要がある。書誌的調査が文学的研究とは別個のところに位置するのではない。文学的研究というものには書誌的なところからはじめねばならない。私にとつて書誌的興味は文学研究そのものについての関心である。

この言葉を裏付けるように、氏の論考はその字数の多くが先行研究における書誌的事項の誤りを正すのに費やされていることに気づく。それは作家の生年や、細かな誤字・脱字の指摘にまで及ぶ。

しかし考えてみれば、文学表象とは現実の反映であるという前提に立つ限り、そのコンテキストの背後にある現実を事実を基にして批評することとは、文学研究にとどまらず他者と話題を共有し議論する際の基本的な姿勢であろう。とはいえ、氏の各論考は、そうした大前提が文学研究において如何に等閑にされてきたか、現にされているかを提示し、文学研究に携わる者に威儀を正させずにはおかない。

そして、この浦西氏の主張をふまえて『著述と書誌』所収の各論に臨む際にうかがえるのは、あくまでも個々の作品の読みを深めるために、書誌事項から歴史的事実を丹念に掘り起こし、それを文学的なリアリティの問題として論じるという姿勢である。

例えば「岩藤雪夫『鉄』と「賃銀奴隷宣言」」⁽⁵⁾では、岩藤雪夫「鉄」に描かれたストライキが、「政治闘争への方向転換という視点から描く」「努力を殊更に回避している」ことを「作品の弱さ」『著述と書誌』一卷 五七頁）として指摘し、続く「賃銀奴隷宣言」についての分析では、題材となった日本蓄音機争議の歴史的過程を労働運動資料から丹念に掘り起こし、その記述の「虚構」性を指摘していく。いずれの作業も、単に作品の「史的不正確さ」(同前 六一頁)を暴くこと自体を目的とするのではなく、あくまで作品に描かれた「文学的リアリティ」(同前)の強度を測るための作業として行われていることに注目したい。

また「徳永直『太陽のない街』と共同印刷争議」⁽⁶⁾では、徳永直『太陽のない街』で描かれた大同印刷争議のモデルとなった共同印刷争議の事実関係をテキストと照らし合わせ、作者の中で事実と虚構が混同していることや、作中の出来事の設定年月の現実とのずれを指摘しつつ、徳永の創作姿勢が「争議を立体的に把握し、その社会的・経済的・政治的なつながりといった全体的展望でもって描く」『著述と書誌』一卷 八六頁）ことにあり、「ルポルタージュ的発想からは解放された」(同前 八七頁)と分析している。こうした作業もまた、浦西氏にとって作品の「文学的虚構」(同前 九三頁)の強度を担保する「リアリティ」(同前)の問題にかかわるものとして認識されている。

このリアリティを基軸とした作品分析は、プロレタリア文学内の一ジャンルとして捉えられがちであった農民文学を読み解

く際にもいかになく発揮される。

「山本勝治と「十姉妹」」(前出)では、

「十姉妹」は、まっとうな農民精神とは反対の投機的対象として十姉妹の飼養に手を出さなければならぬところの窮乏した農村の現実を、祖父と孫の対立、祖父と父との対照的な性格といった登場人物の形象化のたしかさにおいて捉えられ、古い地方農村の家庭の特徵的な性格をリアルにうかびあがらせているところに農民小説として傑出しているのである。

『著述と書誌』一卷 一二四頁)

と、その「目的意識によって構成された」「プロレタリア小説の図式的な構図」(同前)ではなく、その「形象化のたしかさ」によって作品を評価している。

また、「伊藤永之介「梟」について」⁽⁷⁾では、伊藤永之介研究における書誌学的な誤りを訂正しつつ、伊藤永之介「梟」の題材となった新聞記事などの一次資料を丹念に掘り起こし、いわゆる「鳥類物」と呼ばれる伊藤の農民小説を同時代における「東北農民の現実」『著述と書誌』一卷 一四六頁)を反映したものであり、その描写手法について現実にあった事件やモデルをそのまま作品の中に形象するのではなく、いったん作者の意識内で蒸留することで「芸術的形象として描きあげ」(同前 一四七

頁)ていると評価している。また、作品の改稿過程において「一人の特定の主人公に密着せずに、独得の説話体で、貧農民の群像を自在に」取りあつかう描写手法が確立され、「農民生活が時局的に空間的にもっとも集約され凝結された場面に於いて、それらの農民の社会生活と人間性」(鳥類物以後)を描くという、鳥類物の特徴である「集約的なリアリズム」(「鶯」のリアリズム)の手法を認識していった」と分析している。

以上のような浦西氏の分析の特徴は、書誌的な方法論を基軸として作品の発表当時の言説空間を再構成し、その位相において作品とそのコンテクストを形成する現実との関わりの中から作品の特質を析出するというものである。そして何よりも重要なのは、そうした分析手法が、作品の持つリアリティの強度を測定することを基底に置いているということである。

ところで、こうした氏の書誌的な問題意識が、プロレタリア文学作品を分析対象とした際に、その作品自体がもつリアリズムに対する関心とリンクするのは、ある意味では当然のことと言えらる。なぜならプロレタリア文学運動は何よりもまずリアリティを問題として展開した文学運動だからだ。

作家に対し「プロレタリアートの階級的主観」を獲得しそれによって作品を写實的に描くことを作家に要請する蔵原惟人「プロレタリア・リアリズムへの道」(『戦旗』一九二八年五月)をはじめとして、リアリズムと組織論を結びつけて展開した唯

物弁証的創作方法の提唱、一九二八年から三一年ごろにかけてナップ陣営で交わされた芸術大衆化論争、あるいは運動崩壊後のプロレタリア作家たちの創作のよりどころとなった社会主義リアリズム論など、プロレタリア文学運動の陣営で交わされた創作に関する議論はみなリアリズムの追究をその主軸に据えていた。

そしてこれらはリアリズムにかかわる議論であると同時に、あるべきプロレタリア文学とプロレタリア作家像を規定し、抑圧的に作家身体に作用していくことになる。プロレタリア作家たちはナップ・文戦派を問わず、そうしたイデオロギー的に駆動するリアリズム理論に、接近と離反を繰り返しながら作品を編み上げていった。プロレタリア文学はリアリズムという規範意識のなかで生成した文学であったのだ。

浦西氏の問題意識は、プロレタリア文学をこうした同時代の言説空間の中に再配置し、作家身体を囲繞する現実のイデオロギー的影響の中で作品を読み解かなければ、作品の真の意味での読解とはならないという認識に支えられている。氏にとって書誌研究は、当時の言説空間を再構成するための必要条件であるが、しかしそれは決して十分条件ではありえないのだ。なぜなら、単に書誌的な事項をたどるのみでは、そこに生起する人間の感情やイデオロギーの様態を読み解くことはできないからだ。

以上、浦西氏の業績から氏の書誌的な興味関心とリアリティ

の追究に向けられた氏の研究姿勢を検討してきたが、こうした氏の姿勢を参照することは、インターネットの普及で氾濫する情報の中から事実を追求するために膨大なデマゴギー——現在ではフェイクニュースやポストトゥルースという呼び方のほうが耳馴染みがよいが——と対決することを余儀なくされた我々にとっても、今なお大きな意義があるのではないだろうか。

二〇一八年三月に『サイエンス』誌上に発表された研究によれば、SNSにおける虚偽のニュースの拡散速度およびその範囲は、事実のニュースのそれをはるかに上回っていることが統計的に確認された。⁽¹⁰⁾ 虚偽の情報（フェイクニュース）が事実（ファクト）に対し、なぜあれほど広範囲に、かつ驚くべきスピードで拡散していくのか。この疑問に対し、先の研究では虚偽の情報報は事実に対し目新しさとネガティブさで勝っており、人々はそうした情報を拡散しやすい傾向にあるのではないか、という推論を提示している。

つまり、虚偽の情報報は、現実に対し「そうあってほしい」と欲望する人々の意識を通過することで、ある種のイデオロギーとして通俗性を獲得していくということなのではないだろうか。もちろん、事実の提示には、虚偽の拡散の何倍もの時間と労力が必要になるという物理的な制約もあるだろう。だとすれば、そうした虚偽のイデオロギーには、事実（ファクト）の提示だけでは対抗することはできない。問題の所在を、事実をもとに手繰り寄せ、そこに生起する（今・ここ）に生きる我々の

感情を通過した現実認識——リアリティによって描きなおすと、そうした作業を経ることなくして、真の意味での（ファクト）に到達することなどできない。浦西氏の仕事は、改めてそのことを我々に教えてくれるのだ。

注

(1) 「山本勝治と「十姉妹」」（初出は関西大学『国文学』第五四号

一九七七年二月）、引用は『著述と書誌』一卷一一一頁

(2) 昭和戦前期プロレタリア文化運動資料研究会編 丸善雄松堂

二〇一七年一〇月

(3) 「書評 浦西和彦著述と書誌（第1巻）新・日本プロレタリア文

学の研究

「第2巻」現代文学研究の基底

「第3巻」年譜葉山嘉樹伝

「第4巻」増補 日本プロレタリア

文学書目

『日本近代文学』第八一集 二〇〇九年十一月

(4) 「書誌について」（初出は日本近代書誌学会『会報』第六号、

一九九九年一月、引用は『著述と書誌 第二巻 現代文学研究

の基底』和泉書院二〇〇九年 五二五頁）

(5) 初出 関西大学『国文学』第五〇号、一九七四年六月

(6) 初出 『民主文学』第三八九号、一九九八年三月

(7) 初出 『民主文学』第一五四号、一九七八年九月

(8) 「伊藤永之介の「鼻」と同人誌「小説」細目」(初出は『日本文学』第三二巻六号、一九八二年六月、引用は『著述と書誌』一卷一五三頁)

(9) 同前 一五七頁

(10) Soroush Vosoughi, Deb Roy, Sinan Aral “The spread of true and false news online” *Science* 09 Mar 2018: Vol. 359, Issue 6380, pp. 1146-1151

■特集 浦西和彦の仕事

浦西和彦編『徳永直全集』の目次案

和田 崇

まえがき

私が関西大学千里山キャンパスにあった浦西和彦先生の研究室を訪ねたのは、二〇一一年春のことであり、あれからもう八年が経つ。そのとき私は、ある要件を浦西先生にお引き受けいただくため、依頼に参った。関西大学文学部の研究棟の外観は、築年数の浅いほかの建物と同化させるように外壁が整備され小ざれいである一方、その中は古い木造建築を思わせるような趣のある雰囲気であった。緊張をしながら研究室に入ると、入口に対して垂直方向に書棚が所狭しと並べられており、その書架の迷路を抜けると、浦西先生がいらつしやった。そのとき、浦西先生は大学院生を指導なさっている最中であつたため、私が口早に要件を告げると、ご本人の意思とは関係なく、先生はその要件を満たす資格をお持ちでなかつたために断られた。私は

がつかりとうなだれるしかなかつた。

しかし、浦西先生はそんな私に次のような言葉をかけてくださった。徳永直を研究していたね。あそこに徳永直全集を編纂していたときの資料がある。段ボール二箱ぐらいかな。処分に困っているから必要ならあげるけど、どうするかい。浦西先生が本当に処置に困つていらつしやつたのか、それとも、落胆する私を励ます意図があつたのかは定かでない。いずれにせよ、私は即答でぜひいただきたい旨をお伝えした。その後も浦西先生はきちんと約束を覚えておいてくださり、ご退職前に徳永直全集の編纂資料を送つてくださった。

本稿で紹介するのは、その資料集の中に含まれていた一部であり、幻に終わった浦西和彦編『徳永直全集』全十五巻の目次案である。資料の中には、故・祖父江昭二氏から送られた徳永直書誌の逸文の指摘や、図書館からのレファレンス回答の書簡

等も含まれており、書誌研究の鬼である浦西先生が文献収集をされた過程も垣間見られて興味深い。

資料の形態については、A4コピー用紙二十八枚の活字印刷で、誤入力が目立つことから、出版社が浦西先生の指示にもとづいてワード等のワープロアプリで入力したものと推定できる。また、本稿では十五巻立ての目次案を掲載するが、それとは別に十二巻立ての目次案も存在し、こちらはA4コピー用紙七枚の活字印刷で、エクセル等の表計算アプリで入力されている。作成年代は、以前浦西先生にお伺いした話や、断片的に残された文献探索の痕跡などから、二〇〇〇年代初頭とみられる。一部の巻では作品名の下に初出誌の情報や原稿用紙換算枚数が記されており、編集に際しては発表された年代や文字数に配慮した形跡がある。ただし、これらの注記は全巻で徹底されていないため、本稿では省略することにした。

目次を掲載する前に、徳永直の書誌と全集にまつわることを少しだけ説明しておきたい。

まず、書誌について、浦西和彦「徳永直著作目録」(『国文学』関西大学国文学会、四八号、一九七三年)で先鞭が付けられ、林真「徳永直の逸文」(『日本古書通信』一九八一年二月号)などによる指摘を踏まえて、浦西和彦編『人物書誌大系1 徳永直』(日外アソシエーツ、一九八二年)が編まれた。その後、浦西先生は「徳永直(人物書誌大系1)」の(こと)『書誌索引展望』七巻二号、一九八三年で同書の遺漏を若干補足している。最新版の書誌については、

拙稿『徳永直の創作と理論—プロレタリア文学における労働者作家の大衆性—』(博士論文、二〇一三年)に付録として掲載したが、一般には参照しづらい状況であることをお詫びしなければならぬ。つまり、三十七年前に浦西先生が編まれた『人物書誌大系1 徳永直』は、いまだに徳永の書誌探索ツールとして重宝されているのである。

次に、全集について、日本における徳永直選集は、最も長いもので二巻本であり、新日本出版社が一九八七年に刊行した『日本プロレタリア文学集・24 徳永直集(一)』および『日本プロレタリア文学集・25 徳永直集(二)』と、徳永直の会が中心となつて編集し熊本出版文化会館が刊行した『徳永直文学選集』(二〇〇八年)および『徳永直文学選集II』(二〇〇九年)の二種類が存在する。「日本における」とわざわざ述べたのは、中国で李芒の翻訳により、人民文学出版社から全四巻の『徳永直選集』(一九五九年〜六〇年)が出版されているからである。つまり、選集の巻数だけで判断をすれば、徳永直の作品は母国であるはずの日本において冷遇されてきたと言える。

こうした徳永直をめぐる状況に異を唱えたのが中野重治であった。中野は「徳永直選集の件」(『文藝』一九六九年一月号)で徳永の没後満十年が経過した頃に徳永直選集を刊行する必要性をいち早く訴え、その後も「あれこれの思い——宮本百合子死後十周年——」(『アカハタ』一九六一年一月二日)や「緊急順不同21 徳永直全集、選集、また著作集を急ぐこと」(『新日本文学』

一九七四年二月号)で、繰り返し全集ないし選集の刊行を催促した。ちなみに、「徳永直全集、選集、また著作集を急ぐこと」の冒頭で、「岡山の方のある人」から雑誌『作家クラブ』第一号に掲載された伊藤永之介と前田河広一郎の文章の標題を教えてほしいとの問い合わせがあったと書かれており、この「岡山の方のある人」こそ浦西先生である。このことは、浦西和彦「四方の眺め」徳永直全集のこと」『梨の花通信』五〇号、二〇〇五年で明らかにされている。

さて、最後に、中野の文章の中からいくつかを引用し、徳永直全集を刊行する意義を改めて訴えておきたい(*引用はいずれも『第二次 中野重治全集第二十四巻』(筑摩書房、一九七七年)による)。

徳永の死んだすぐあと、全集とか選集とかいうものが考えられたことはあつた。私も考えた一人だった、その私のところへ、ある日橋本英吉から手紙が来た。徳永の著作集、全集といった計画があるだろうが、計画実現のためには多少かけずりまわつてもいい。また編集委員会といったものが出来るのだろうか、自分はそこへ顔を並べなくてもいい、それを肚に入れておいてくれという私個人あての手紙だった。この最後の項は、橋本のほうに考えすぎからきた遠慮というか、遠慮しすぎからきた勘がよいというかがあるようにも思つたが、とにかく、その前後ちよつとあつた全集計画は、形をなさぬまま煙のように消えてしまつ

た。とても、小林多喜二全集の時のようには、宮本百合子全集のように事は運ばなかつた。(徳永直選集の件)

そこで徳永選集、徳永全集編纂のことに戻つて、私はそれが能うかぎり完全なものであることを望む。小説作品のことは言うまでもない。ほぼ二十年間の日記、手紙類はもちろん、彼の小品、雑文、時評、特に文学論文を洩れなく入れてもらいたいと思う。日記や手紙となれば、伏字とか削除とかが或る程度編者たち(あるいは肉親たち)に任せられねばなるまいが、雑誌や新聞に出たものは、共産党の細胞新聞に発表したもので、能うかぎり豊富に収録されねばならない。徳永の政治生活、文学生活には、徳永に限らぬ多少の曲折があつた。それは教訓に充ちたものでもある。その全貌が示されるようにありたい。わけても文学論文、あるいは政治的文学論と言つてもよく文学的政論と言つてもいいものをも含めて、すべての派閥的利益をこえて主要なものが収録される必要がある。(徳永直選集の件)

作品その他まとまつた発表がないため、徳永の作品の研究、人間の研究、文学史上のいろんな関係の闡明(せつめい)ということも妨げられてきている。単純に言つて、一つの大きな損失である。(徳永直全集、選集、また著作集を急ぐこと)

第一卷

要するに私は、徳永直の全集、選集、著作集ができるだけ実質的な形で一日も早く出る必要があり、その時期が熟してきていると思ひ、その実現を切望する。『小林多喜二全集』『宮本百合子全集』はすでに出てゐるが、徳永の出版がおくれているため、逆に小林、宮本の研究に停滞をきたしている向きもあるのではないかとも思つてゐる。

(「徳永直全集 選集、また著作集を急ぐこと」)

先述したように、日本共産党系の新日本出版社や、郷土熊本の顕彰組織である徳永直の会の尽力によつて、二巻本の選集こそ編まれたが、約五十年前の中野の訴えからそれほど状況は変わっていない。浦西先生が編纂していた全集は、私的な問題が絡むため経緯については公表できないが、ともかく破談に終わった。出版不況や著作権保護期間の延長など、いま全集を刊行するには乗り越えなければならない壁が多い。しかし、全集出版のためならば、私も橋本英吉と同じく「計画実現のためには多少かけずりまわつてもいい」と考へてゐる。徳永直全集を刊行してもよいという気骨ある出版社は現れないだろうか。

浦西和彦編『徳永直全集』全十五巻 目次案

無産者の恋 / 馬 / あまり者 / 何処へ行く？
 眼 / カットされない風景 / 能率委員会 / 麦の穂の
 ような女 / プロマイドを捨てる / 大砲を磨く / 戦
 争雑誌 / 握手(一幕一場) / 小資本家 / 欲しくない
 指輪 / 麦の芽 / 千二百円

第二巻

太陽のない街 / 失業都市東京 / 約束手形三千八百円也
 / 赤色スポーツ / 失業避暑客風景 / 嵐を衝いて /
 赤色スポーツ / 石炭の木 / 社会病 / 悪党になれぬ
 男

第三巻

豊年飢饉 / 「赤い恋」以上 / 銀行合併 / 活字は嘘
 をつく / 同志×村の遺作 / 戦列への道 / Yの艶書
 / 残飯の味 / 頂点に立つ / 阿蘇山 / メーデーま
 で / 赤旗びらき / 他人 / 苦しい道 / 帝国主義
 デマ / 清吉は正しかったか？ / 失業自衛団 / 栄子
 の立場 / 「組長公選」 / 世話役 / ショール / 女
 工舎監督の日記 / 未組織工場 / ファツショ / ス
 ポーツ / めし / メーデーへ / 山一製糸工場 /
 夫婦喧嘩 / 工場新聞 / 火は飛ぶ / 銃後 / 二人

の道

第四卷

文学サークル / 義雄の「お正月」 / 武士と資本家 /
あおぞらへ投げる / 島原女 / 『職人氣質』 / 母 /
百姓花嫁 / 黎明期 / 冬枯れ / 葱 / スケッチ三
題 / 彷徨える女の手紙 / お正月の客 / 梶川ツルの
死 / 最低の組織 / 女の産地 / 逆流にたつ男 /
訪ねて来た子供 / 弱虫 / 浅草一面 / 弱い強盗 /
一つのタイプ / 彼岸 / 村の十日間 / 仏壇

第五卷

飛行機小僧 / 八年制 / 木槿のある村 / はたらく一
家 / 心中し損ねた女 / 冬空 / 温泉行 / 技師阿
波忠助 / T君の犯罪 / 陽子・道代・町子 / 父親の
覚え書 / 最初の記憶 / ある解決 / 悪友 / 先遣
隊 / 藁人形 / 他人の中 / 赤い風 / ハルピンの
宿 / 先祖まつり / 長男 / ある患者の話

第六卷

ひとりだち / 読者たち / 九日の宿 / 東京の片隅
/ 世界の公園 / ある特派員 / 結婚記 / 夢の棲家
/ 見舞 / 海の上 / 宿の一夜 / 風 / 幼ない記

憶 / 二階借り / 隣組の畑 / 蜘蛛 / こんにゃ
く売り / じゃがいもの記 / 出征する人 / 男の中で
/ 自然について / 罪ある子供 / 面白い町 / 三人
/ 小さい記録 / 冬 / 五人の子供たち

第七卷

光をかかぐる人々 / 光をかかぐる人々(後篇) / 妻よ
ねむれ / 北朝鮮にいる友よ / がま / 敗戦前 /
追憶

第八卷

夜あけの風 / 本田さん / 白い道 / 「たばこ」の話
/ あぶら照り / 研究会にきた男 / 青い風 / にが
い唾 / 風のない日 / 地蔵 / 炎ゆらぐ / 背のた
かい娘 / 川岸工場から / ある婚約者たち / 村にき
た文工隊 / 日本人サトウ / 写真にそえて / さいづ
ち頭 / 町のこえ / 街道筋

第九卷

よごれた空 / 慰安旅行 / 平助の百十八票 / みちづ
れ / 基地周辺 / 富士と娘たち / 陽気なおじさん
/ かえってきた人々 / つゆぞらの下で / かたむいた
屋根で / ふみつけられる草 / 飛行機ルポルタージュ

／ あかくなる顔 ／ “旅行のナゲ” ／ 雪 ／ 草いきれ
／ 静かなる山々（第一部）

第十卷

静かなる山々（第二部） ／ よごれた手拭 ／ 黒い輪
一つの歴史

第十一卷 文学編Ⅰ

白状しとく ／ 「太陽のない街」について ／ 同志白須の
詩集「ストライキ宣言」を読む ／ 「太陽のない街」の上演
／ 「太陽のない街」は如何にして制作されたか ／ 「太陽の
ない街」と僕 ／ 未決監房の林房雄兄へ ／ 左翼文芸陣を
語る ／ プロ文学における感情の問題 ／ 文学的断想
／ プロレタリア小説の書き方 ／ 岩藤雪夫君へ ／ 力作なれ
ど傑作に非ず ／ 作家の生活大衆化 ／ 初夏の抱負
／ 吾々の文学運動の基礎を全国の工場へ！農村へ！ ／ 最後ま
で『処女作』 ／ 文学新聞の創刊 ／ 文学サアクルの性質
／ 小林多喜二の作品集「オルグ」を評す ／ 時評 ／ ナッ
プ七人集 ／ 小説は如何に書くべきか ／ 精確、単純明瞭
な文章を ／ 文学新聞は作家を産んだ ／ 「爆発」に寄せ
る ／ プロレタリア文学の一方方向 ／ ファッシズム文学の
本質 ／ 農本聯盟派のファッショ文学 ／ 文学宣伝隊の必
要 ／ 「大衆文学形式」の提唱を自己批判する ／ プロレ

タリア小説はいかに作られるべきか ／ 文芸時評 ／ 『プ
ロレタリア詩のために』——森山啓の力著—— ／ 同志窪川鶴次
郎について ／ 創作活動の成果 ／ 逆浪に揉まれて
／ 林の「青年」を中心に ／ プロレタリア文学の新たな飛躍
へ ／ 文芸時評 ／ この『行詰り』から奮いたとう！
／ 『同盟の旗が折れた』——小林多喜二についての断片—— ／ 伏
字問題その他 ／ 小説『転換時代』とプロレタリア作家、小
林 ／ プロレタリア新作家への期待 ／ 明治維新に関する
歴史小説 ／ プロレタリア作家の経済生活について ／ プ
ロレタリア文学への道 ／ 最近の感想 ／ 感ずること二三
／ 佐佐木俊郎について ／ 「作家」を志望する人々につい
て ／ 創作方法に於ける新段階 ／ 創作方法上の新転換
／ 大家の末路 ／ 「ナルプ」に対する希望 ／ 創作方法
に関する感想 ／ 「二つの提案」について ／ 坐って話す
／ リアリズムについて ／ 一九三四年への歩み ／ ゴル
キーに関する断片 ／ 新しき出発 ／ 島木健作君について
／ 「創作技術に関する問題」の提唱 ／ 弁証法的文章構成
の技術 ／ 春さむし ／ 逞ましい感性 ／ 「紋章」と「文
芸院」問題 ／ 芸術至上主義的傾向と闘へ ／ 林房雄の意
気 ／ ゴルキーに学ぶ ／ ナルプ的作品 ／ 林房雄にお
くる手紙 ／ 「太陽のない街」近況 ／ 纏まらぬこと二三
／ 転向作家とは何ぞや ／ プロ文学の昨今 ／ プロレタ
リア文壇の人々 ／ 「われらの成果」について ／ 島木健

作君への手紙 / 三十四年度に活躍したプロ派の新人たち
／ 地上に待つものの序文 / 文章と個性・社会性 / 窪川稲子の発展 / まずこんなことをやりたい / 島木健作氏の抗議に答う / 文学に関する最近の感想文 / 「雑誌文学」からの解放 / おぼえがき / 「単行本文学」の建設について / 創作におけるゴリキイの方法について / 渡辺寛について / 「主題の積極性」について / 僕はこんな心構えで書いてゆきたい / 文芸時評 / 文芸時評―明るさを求めて― / ゴリキイに学べ / 長篇は作家の財産 / 人生武者修行者 / 「炭坑」の表現と構成について / 自然について / 所謂「私小説」形式弁護のために / 文芸統制について / 世界の文学の先駆

第十二卷 文学論Ⅱ

転換期のプロレタリア文学 / 生産場面をいかに描くか / 主題と表現 / 文壇の時事問題を考える / リアリズムへの道に大きな暗示 / 労働者作家の抬頭 / 「電鍵」について / 純文学と大衆文学の区別 / 若き勤労者作家へ / 詩人はもつと病気をうたえ / スケッチと報告文学について / 「蟹工船」の非実感性 / 島木の作風について / スケッチと報告文学の提唱 / 文芸時評 / 「辛抱づよき者へ」詩集・松田解子著 / 蓋をされた文壇 / 諷刺文学の問題 / 「職場スケッチ」についての感想 / ぼく

の経験 / 工場小説のねらいどころ / 生き延びた道 / ソビエトロシアの「文学教程」 / 激しい波との闘い / 満腔の良心 / 長篇小説運動の苦難 / 文学賞を与えるとすれば / 苗代ころの感想 / リアリズム問答 / 文芸時評 / 文学形式の貧困 / 本質的不快さは別 / 日本プロレタリア文学の現状 / ゴリキイの作品が持つ労働者性 / 文章と個性・社会性 / 小説「馬鹿野郎」批評についての不満 / 「炭坑」その他 / プロレタリア文学の将来 / ルポルタージュ / 報告文学とは何か / 『社会記事』と『学芸記事』と / 日本文学の危機 / 新人作品の特徴 / 「太陽のない街」回想 / 「路傍の石」について / 主題の新しい展開 / 歴史本質への疑問 / 筋の立て方進め方 / 文学大衆化論に就ての覚え書 / 文学者の立場 / 文学的自叙伝 / 文章に表現出来ぬもの / 自己小説・風俗小説・社会小説の交流 / 「炭坑」と「東京市電」 / 最近の児童文学 / 報告文学と記録文学 / 来るべき文学 / 冬を越す文学 / ルポルタージュ文学を！ / 自作案内 / 作家の収入に立脚して / 純文学と大衆文学の境界 / 「報告文学」に就て / 西鶴物の読後感 / 農民文学への希望 / 小説報国 / 『子供とともに』―松田解子随筆集― / 現代世相小説 / 大きな転換期 / ゴリキイとアンドレーフの喧嘩 / 昭和十三年の文芸界 / 不惑の歳 / 私の手帖 / 文芸時評 / 「く

れなぬ」について / 映画の健康性 / 満州で文学をする人々へ / 文芸時評 故岡本氏の文章 農民文学の恥 / 創作日記から / 大陸文学について / 徳田秋声著「光を追うて」 / 『勲章』について / 文学の健康性 / 五月の三作品「手」「楽天作家」「神聖家族」 / 作家批評の基準について / 「筋」は「通俗」であるか / 私小説という言葉 / 長篇と論理性 / 九州出身の作家 / 強靱無比な感性 / 大江賢次著『満州国前夜』 / 文学の周囲 / 努力と才能 / 昭和十四年の文芸界 / 「小説修業」談義 / 混乱の一年 / 新人と旧人の間 / 「大陸文学」と「満州文学」のタイトルについて / 本庄陸男著「石狩は懐く」 / 「嫌な奴の登場」について / 「生活を考へる」について / 文学修行ということ / 小説における自我の衰弱 / 作品と作家の間 / 小説と生活の間 / 通俗との岐れめ / 解説（葉山嘉樹著『濁流』新潮社） / 瘦せる小説 / 生産文学について / 窪川稲子著『素足の娘』 / 文芸時評 / 中野重治著『汽車の罐焚き』 / 医者と小説家 / 小説をかく愉しさ / 「見る」と「考える」ことと「ゲーテとの対話抄」から / 新体制と文学 / アジア諸民族の文学を知りたい / 芸術における「贅沢」の意味 / 私の短篇集 / 傑作いでよ / 伊藤永之介著『離村記』 / 平川虎臣著『愛情浪漫』 / 特徴を生かすこと / 勤労と文学 / 文学的な育児観 / 今年は何んな題材を / 一

月の小説 / トルストイから学ぶこと / グウテンベルグその他 / 文学常識の向上 / 勤労者の文学 / 上林暁とその作品 / 私小説の今日的意味 / ある時の尾崎士郎 / 読み落した古典作品 / 文芸時評 / 「ロダンの芸術観」 / 上林暁「悲歌」 / 小説へはいる道 / 伝記小説について / 新聞小説について / テーマとモチーフ / 「背景」と「釣狂記」 / 歴史小説のモチーフ / 小説の科学的テーマ / 歌・小説への架橋 / 朗読に堪えられる小説 / 二葉亭について / 職業と芸術と / 長谷川君のこと / 少国民文学への反省 / 小説勉強 / 無名作家の作品 / 志賀作品の印象

第十三巻 文学論Ⅲ

文学に於ける民主主義の問題 / 文学集団と若い作家 / 「太陽のない街」の復刊 / 文学的足場 / 中野重治のこと / 「太陽のない街」について / 「日本共産党」と文学 / 報告文学について / ゴリキー作品が与えるもの / 回覧雑誌をすすめる / 労働者と文学 / 「はたらく人民」と「労働者」とその文学について / 「太陽のない街」をみて / 葉山嘉樹の死 / 民主主義文学運動について / 私はどういう風にして「太陽のない街」を書いたのか / 解説「紹介的に」（中野重治著『鉄の話』新興出版社） / 職場に作家を育てよ / 新描写論 / ルポルタージュ

論 / 「文学修行」その他 / 報告文学に就て / ルポ
ルターージュについて / 何を描かねばならぬか / 新段階
の勤労者文学 / ルポルターージュをさかんにしたい / 解
説(橋本英吉著「棺と赤旗」新興出版社) / 花ひらく / 橋
本英吉「富士山頂」 / 文化問題で大切なこと / なかの・
しげはる論 / ルポルターージュをさかんにしよう / 「は
たらく人民」と「労働者」とその文学について / 文学サー
クルの経営について / 小説を書いた私の経験 / 鷗外に
ついての覚え書 / 小田切秀雄の感覚 / 日本文学の新し
い力 / 「おれは文学者だ」 / 私の文学故郷 / 勤労者
文学の現状と民主主義文学における位置について / 勤労者
文学をもっと前におしだすこと / 「多喜二賞」と文学会員
／レアリズムをつくるもの / 葉山嘉樹の文章 / 作品
批評を展開せよ / 「勤労者文学」の創刊について / ひ
ろがる文学世界 / 勤労者文学への攻撃に答う / 生活と
文学のかみあいの弱さ / 「破戒」のもつ意味 / ついて
まわる批評 / 現実からの遁走 / 何を、どうかくかとい
う問題 / 多喜二のレールは直線だった / 勤労者文学の
前進 / 葉山嘉樹の記憶 / 志賀直哉に望むもの / あ
たらしい小説勉強 / 中村武志君に答える / 読者を忘れ
た作家たち / 読者の意見を募る / 丹羽君へ / 小説
のつくり方 / あるとき的小林多喜二 / 「太陽のない街」
のころ / 佐多稲子「白と紫」 / のろのろぐづぐづと

／「太陽のない街」の歴史 / われわれは数十歩前進しよ
う / 文学通信 / 新日本文学会の方針についての共同提
案 / 提案にたいする諸氏の意見についての報告 / 上海
文化芸術工作者総会の行動綱領十カ条をよんで / 「あなた
はネ労働者作家にあまいわよ」 / 「太陽のない街」前後の労
働者の運動と意識 / 小林多喜二と宮本百合子 / 多喜二
のばあい / 山脈や海原を越えて / 人間をかくことに
ついて / 私の処女作と自信作 / 「なぜ書けぬか？」の
問題 / 「生産面をえがく」について / 黒島伝治「渦巻
ける鳥の群」 / 愛国の英雄をえがけ / 葉山嘉樹の位置
／「阿部一族」その他 / 多喜二と「蟹工船」とその映画
化 / 労働者農民の作品が多い / 追求に厳しき欠く(金
達寿著『玄界灘』) / 作品「鍵」について / 再びペンをと
るにあたって / 映画「太陽のない街」のこと / 文学の
統一戦線と労働者農民の文学の不振について / 映画「太陽
のない街」は日本国民の誇り / 「二銭銅貨」について
／「太陽のない街」映画化について / 生活描写の真実性
／読者の皆さまへ / ソヴェト作家大会に出席して / そわ
そわしながら / ソヴェトの文学サークル / 働らくもの
の文学をそだてるソ同盟と中国 / 中村武羅夫と檜崎勤
／渦巻ける鳥の群 / 中国文学と日本文学 / 日本文学の故
郷 / 中国文壇の人々 / 全ソ作家第二回大会に出席して
の報告 / 中国と朝鮮の作品 / 老舎紀純著「文章の書き

方」／労働者が作家になるには／描くことと書かないこと／人の心を温める文学／壺井さんへの応酬ではない／壺井栄へ／労働者農民的作品が少ないことの原因を示せ／勤労読者と勤労作品と／宮本百合子批判の問題／「静かなる山々」について

第十四卷 エッセイ I

同志談林／婦人部と倶楽部／一人一役／HPの新組織に就て／産業別合同と全国総連合／動揺し始めたブル政党／博文館共済会規約改正案に就て／実際を如何に運動すべきか／飯餓線漫談^{（ヘンガイレイン）}／「明治維新史」附「絶対主義論」／メーデーの歌／名づけ親／「眼」の問題／失業自衛団／新恋愛は工場に芽生える／「女を感じる」／ブルジョワ・エロ・グロについて／ペンネーム・本名の由来／今日の出来事／三羽鳥最後の一人『渡政』／お父ちゃんを返せ！／山の階級性／石川から／鞭をあてよ／「盆踊り」を踊る／日本アルプスを超えて／外へ出ろ！／大工場地帯を行く／近代学生気質／鶴見大工場地帯／山宣サンの記念碑の畔で／農村風景／海軍大将の理想から印刷工へ／疑う／失業長屋を吹く風／私の一九三二年／工場街の春の日／戦争劇と東北凶作救済の問題に対する彼等と我々／野球／佐野学氏／組合製糸を見て／

七月二日を目がけて／この暴虐極まる求刑振りを見よ／オリンピックとは何か／工場で働きたい／成長する彼女たち／歴史的に果たした「輜重隊の役割」／あげ潮／年頭随筆に代えて／われらの文化風土記／阿蘇の高原／苳牧十二夫君について／故郷行／春さきの感想／「金銭のぬうち」について／ソヴェート芸術映画／しじみとり／工場地帯を歩く／「第三新生丸」後日譚について／初春のことば／ストーリー的に見た映画感／東北凶作地巡回記／「奇傑パンチョ」を観る／独楽を如何に廻すか？／凶作地の春を憶う／飛行機の平和性／西澤音楽の放送／あまりに偏頗／相場師／スポーツについて／一抹の明るさを感じる／春を迎える為に／東北の旅から／ある神経衰弱者の日記／掛声よりも内容／家を建てた／映画「人生劇場」を観る／半蔵の姿を／花を見た春／農家での十日間／阿蘇の山肌／私達はいつ愛し得るか？／作家の見た東北農村／煤煙の京阪地帯／阿蘇山の思い出／カブト町風景／東京大相撲春場所ルポルタージュ／僕の黒板／「出来た」いや「作られた」／F・ツイース氏著伊東鉄太郎・半田弘平氏訳『日露戦争』／作次の慰問品／石村一家／地道になった／日記の弁／梅の木／モンペをはいた娘／平凡と非凡／右往左往の記／古本の新しさ／一峯に達すれば／疲

れている／ 球磨川の夏／ おぼこ様／ 地方性と特殊
 性／ 夏・土曜日の宵のさまさま／ 近頃の読書／ 釣
 れない話／ 日記抄／ たより／ ハルピンの二泊／
 満州移民地を巡りて／ 若き世代に望む／ 葉書隨筆／
 兄弟子を真似る／ 鼻／ 梅と桜／ 二つの魅力／
 野良着その他／ ニュース映画雑感／ 近所界限／ 私
 の手帖／ 海を渡る人々／ 観客の立場から／ 移民と
 大陸と／ あれやこれや／ 海を渡る人々／ 少年歳時
 記を読む／ 佳木斯^{ジャムス}の町／ 土に萌える／ 笑い／
 野球の綴り方／ 「光をつくる人々」／ 「二袋の駄菓子」
 「浅瀬」「ちちははの記」／ 無題／ 旅への思慕／ 秋
 のつれづれ／ アメリカ我観／ たかく、そしてたかく
 ある日の私／ 野菜／ 恒常的な一面について／
 僕の落書帳／ 勉強／ 六日方伝の印象／ 「無智」と
 「金銭」について／ 畑の中で／ はたらく少年／ ぼ
 くの畑／ 春の風邪／ 馬とはたらく子／ 出ぐせ／
 「日本文化史展」を観る／ 記憶に残るもの／ ぶたれた
 子／ 原作者と翻訳者／ 夏の感想／ カルティニー
 著「暗黒を越えて」／ 「子供の一日」その他／ 弟のこと
 ／ 生活の責任／ 性格の不均衡／ 特急さくら／ 勤
 労者娯楽の今昔／ 感想録／ 工場娯楽の今昔／ 他人
 へ通ずる道／ 映画と筋／ 野良猫騒動／ 謙虚な推進
 力／ 気づいたこと／ 明治の建設者たち／ 勤労女性

の読書／ 勤労文化について／ 食い物について／ 若
 い者はハイカラだ／ 三谷幸吉氏逝く／ 活字の話／
 労働者の言葉／ 漢字制限について／ 新嘉坡陥落を祝し
 て／ 案山子の威力／ 忠犬フジ子と弟のこと／ 漢字
 制限について／ 人間は働かねばならない働くには辛抱が必
 要だ／ 五つの話／ 私感／ 活字の歴史／ 三羽の
 鶏／ 本木昌造と日本の活字／ 思いつくこと／ 勤労
 姿態の美について／ 印刷術の発展と由来／ 鉛活字の最
 初／ 作者の言葉／ 国民的発声／ 青少年期と読書
 馬糞その他

第十五卷 エッセイⅡ

未発表日記／ 精神的な荒廃／ 東北からのレポート／
 汽車の中の座談会／ 停戦発表の日／ 新制の再建／
 嘉平の活字／ 飛躍を阻むもの／ 天皇制の論議の仕方
 青年男女に告ぐ／ 上海へ／ 不孝な児童たち／
 波がしらの底は／ 議論せよ／ スケッチ・二人の老紳
 士／ とどろく歌ごえ／ 新生活運動について／ 漢字
 の政治性／ 隣組と婦人の勉強／ 朝鮮について／ 疎
 開先から／ 五十万の足音／ 飢えとたたかう人々／
 新しき夫婦／ 応援演説／ 「東京の一日」を世界におく
 る／ ほこりの中から／ わが師を語る／ 諸君は女
 房を何とよぶか／ 「どん底」をみる／ 一つの時期／

ある話 / 未亡人に新しい日 / きつねにだまされる話
/ 不便はあるが慣れていこう / 生活再建と結婚問題 /
「落し文」と「回覧誌」 / 家と子供の問題 / 人民の広場
/ 新しい朝鮮に期待する / 失われつつある熱情 / 戦
争が負けたとき泣いたということ / 感想 / 複雑な展
望 / 身につく読書 / 「戦争未亡人」と「子供」 / 顔
を上げよう / 勤労青年の性格 / 小さなことを / 新
しい鋒ぼう / 「文化日本」の可能性 / 文部大臣賞その
他 / すこしのんきに / 推せんことは / 浅草の
絵看板 / 「ヨーロッパ派」について / 外国語について
/ 平和の擁護とユネスコ憲章 / 女の表現 / 一つの提
案 / 「民衆不信」と「革命性」について / 「日常性」そ
の他 / 新しい「公私」の誕生 / 一つの報告 / 枕木
とレール / ランプ / 平和会議その他 / 本を読ま
れぬ人々 / 二つのジャーナリズム / こんなことが起
っている / 投稿諸氏への報告 / 争議のある村風景 /
シルクハットをかぶった暴力 / 惜しくない話 / ある日
のスクラップ / つむじ風のなかで / 書物と読者の関
係 / 質問します / フージュロンの絵 / 世界的な出
来事 / 行水 / 人間の悪しき心 / 徳永直からヒルス
カへ / その頃の日記 / 二つの大衆性 / スケッチ・
ブック / ソヴィエト映画と日本人大衆 / 私の自己批判
/ 「原動力」と「甦える大地」 / ロシヤ革命に一命をささ

げた日本人 / 人のよい夫婦 / 濃霧の中で悲鳴もきこえ
ず / 母なれば女なれば / 同志佐藤の追悼会 / 大衆
は雑草ではない「日本人労働者」によせて / 落伍の記 /
私は期待する / ロシヤ革命に輝いた日本人労働者の赤い星
/ いま広場へ出てきた / 今日の勤労者とむかしの勤労者
/ 小さくない問題 / サインをする話 / 選挙にどう望
む / おかえりなさい皆さん! / 子供は抵抗できる /
「朝鮮戦争はやめろ」 / 朝鮮民族のがらをたたえよう
/ 「地底の人々について」 / 鈴木裁判長よあなたの任務は重
い! / 文学者の発言 / 松川事件と文学者 / 外から
内へ、内から外へ / よくぞつくった / 沈め、沈め、大
衆がもつ深さまで沈め / すぐれた農民気質の典型 / 内
田巖の思い出 / ジャン・ラフィットへの返信 / あな
たの心にきざす暗い影はなにか? / 「大衆にまなぶ」こと
/ リードしつつあるもの / ビラ・ポスターなどの文章に
ついて / 労働はいかに人間を鍛えるか / ソヴィエト同
盟をたずねて / はたらく人へのおふるる愛情 / 幸福な
ソ同盟の労働者 / レニングラード見物記 / 農民へのみ
ごとな理解 / 肩をよせ、のどをふくらませて / 平凡
なことがらの中に / 五枚の皿 / 「場ちがい」な私 /
飛行機とシベリア娘 / 医者には病気を治すこと / 「機械
のなかの青春」を読む / 北区の人 / 短所だけをつつく
な / 広東の女役者 / みんな卅代になったばかり /

大震災前後 / 「私も書きます」について / 総評臨時大
会傍聴記 / 思い出す人々 / 悪い映画から眼を逸らすな
／ 怠けもののおどろき / こんなことがあつてよいのか？
／ 新日本文学通信 No. 7 / 若い人びとはどうか頑ばって
もつと幸せな生活を送るように / 絶筆

* 一部で作品の重複も見られるが、原稿を尊重してそのまま記
載した。ただし、作品標題の誤記については可能な限り修正
を施した。また、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣
いに改めた。

故浦西和彦関西大学名誉教授の

業績と研究活動

増田 周子

平成二十九年十一月十七日膝臓がんの病魔に侵され、浦西和彦先生は七十六歳で逝去なさった。関西大学を平成二十四年三月にご退職されてからたった六年と少しのことで、普段から健康に留意されていた先生の予期せぬ早い訃報に驚愕し、教え子をはじめ先生を慕う人々は、深い悲しみとこの上もない寂しさに打ちひしがれた。先生の死の衝撃は計り知れないものだったのである。さて、今回本誌で、故浦西和彦関西大学名誉教授の追悼特集が編まれることに、先生の学問に接することのできた者の一人として深く感謝し、先生を追悼すべく、ご経歴、ご業績を簡単に振り返っていききたい。

昭和十六年に大阪市でお生まれになった先生は、関西大学第一中学校、高等学校、関西大学へと進まれた。大学卒業後の昭和三十九年からは岐阜県で高等学校の国語教諭をなさった。大学時代の卒業論文は『源氏物語』であったが、岐阜県で国語を教えながら日本近現代文学研究にいそしまれていた。岐阜は葉

山嘉樹が晩年を過ごした地でもあったので、先生はそこに住んでいた葉山の妻菊枝夫人と知り合い、生涯の研究テーマ葉山嘉樹文学に出会う。そうして、昭和四十一年には、坂下女子高校文藝部機関誌「友樹」第三十八号で「葉山嘉樹特集号」を刊行した。この特集号は、中野重治、小田切秀雄、佐多稲子、平林たい子、久保田正文、寺田透、平野謙らがアンケートに回答を寄せたこともあって、広く反響を呼んだ。また、同誌で「森田草平特集号」（第四十三号）なども編纂した。

この時期の先生の地道で画期的なご研究が故谷沢永一関西大学名誉教授の目にとまり、昭和四十六年には関西大学に専任講師として御着任なさった。着任して二年後の昭和四十八年六月には、初めての単著『葉山嘉樹』（近代文学資料6）を桜楓社より刊行された。この著書は、無署名『葉山嘉樹』をまとめた浦西和彦さん——昭和文学の原点をさぐる——（「朝日新聞」八月二十日）で、「浦西和彦さんは三十一歳、まだ少年の面影

が残る青年研究者であった。「略」プロレタリア文学は、思いがけない理解者に恵まれたというべきだろう。」などと高く評価された貴重なものであった。

昭和四十九年に、先生は助教授に昇進し、昭和五十年三月、中野重治、寺田透との鼎談「葉山嘉樹『昭和の文学』」を「群像」誌上で行った。さらに四月、『葉山嘉樹全集』全六巻が筑摩書房から刊行され、金子洋文、中野重治、寺田透、小田切秀雄と編集委員になられた。こうして先生は着々と葉山嘉樹の研究を進めていくのである。さらに先生は、小林多喜二、徳永直などのご研究を推進し、昭和五十六年四月に、関西大学文学部教授に昇格、翌年の昭和五十七年五月には、『徳永直』(人物書誌大系Ⅰ)を日外アソシエーツより刊行した。また、昭和六十年五月には、『日本プロレタリア文学研究』を桜楓社より刊行し、大田洋子、黒島伝治など、多くのプロレタリア文学の研究論文を収載した。寺田透によるオビの推薦文では「浦西和彦氏の調査はあきれる程入念、かつ独特である。(中略)面白く楽しく読める「研究」である。」と評された。先生の、緻密さ、正確さ、几帳面さが滲み出た立派な書である。

その後も、先生はご研究をますます精力的に行い、昭和六十一年三月『日本プロレタリア文学書目』を日外アソシエーツより刊行、同月関西大学より文学博士の学位を授与された。さらには、七月『谷沢永一』(人物書誌大系13)を日外アソシエーツより刊行し、昭和六十二年一月同出版社から『葉山嘉樹』(人

物書誌大系16)を発刊する。平成元年六月には、浅田隆、太田登と共編『奈良近代文学事典』を和泉書院より刊行した。この本が、先生の数多くの事典編纂の最初のお仕事であろう。本書のオビに、井上靖が、推薦文「シルクロード博によつて現代社会における奈良の文化風土の意義が問いなおされた今、近現代文学を通じて、再び奈良の今日的意義を世に問うべく、本事典を推す。」と記している。また、同月六月児島千波と共編した『武田麟太郎』(人物書誌大系21)を日外アソシエーツより刊行した。平成二年十月には、『開高健書誌』(近代文学書誌大系Ⅰ)を和泉書院より刊行し、平成三年十月、先生は関西大学図書館長に就任された。『開高健書誌』も、かなり評判がよく、無署名「いま、この人『開高健書誌』を出した浦西和彦さん」(「朝日新聞」平成三年二月二十三日付夕刊)や、栗坪良樹「書誌作製という無償行為」(文学瞥見) (海燕) 平成二年十二月一日) など、多くのメディアにとりあげられた。図書館長は、平成九年まで三期務められたが、図書館長としての手腕も、優れており、画期的な数多くの企画を手掛けた。平成四年一月に、『葉山嘉樹——考証と資料——』(国文学研究叢書)を明治書院より刊行後、七月には、関西大学図書館の企画出版の一環として『関西大学図書館影印叢書』全十巻の刊行を、関西大学国文学科のメンバーとともに開始した。先生は、『葦分船』(平成十年、関西大学出版部)『日本文学報国会大日本言論報国会設立関係書類』(平成十五年、同)の「解題」を手掛けられた。九月には、

関西大学図書館の企画として大丸心斎橋店南館七階会場で開催した「おおさか文藝書画展」で、大阪作家の原稿や大阪画壇の絵画などを展示し、大反響を呼び八千五百人もの入場者があった。この会場で、河野多恵子の夫の画家、市川泰による河野多恵子像の絵が飾られたことや、宇野浩二家に代々伝わる、宇野家系図などが展示されたことも記憶に新しい。

平成四年には『織田作之助文藝事典（和泉事典シリーズ2）』も刊行した。本書は、『織田作之助全集』の逸文を含む、随筆や小説も含んでいたため、オビの推薦文に青山光二が「織田文学が小説本来の面白さに溢れた真の文学であり、文学のエッセンスの宝庫でもあることが見直されつつあるとき、新発見の資料や未発表の事実も収録した、完璧に達するなき本事典の出現は実に喜ばしく、切に江湖に推す所以である。」と述べ、藤本義一もオビの推薦文で「戦後、焼跡の闇に、大阪の地から放たれた光芒織田作之助の全作品を丹念に追った労作に、ただ脱帽する」と評した。さらに、メディアにも反響があり、崎『織田作之助文藝事典』の編者——浦西和彦さん——（『読売新聞』平成四年八月十七日付夕刊、大阪版）、彩「すごい『織田作事典』（『産経新聞』平成四年八月十八日付夕刊）などをはじめ、好評された。平成七年からは、明治書院より『昭和文学年表』第一巻から六巻を刊行する。また、同年十一月『田辺聖子書誌』（近代文学書誌大系3）を和泉書院より刊行した。本書の推薦文には、「全体を眺め、細事に拘泥しつづけ、執拗な持久力の持主、そ

れが浦西氏である。田辺聖子と浦西和彦という絶妙なコンビがここに生れたといつてよい。」（『書誌学者の「心意気」I 国民的作家・田辺聖子の広範囲な活動を精査。紅野敏郎）がある。平成十三年十二月には、『現代文学研究の枝折』（近代文学研究叢刊26）を和泉書院から発刊した。本書は、白「社会踏まえて作品評価——浦西和彦さん」（『テーブルトーク』（『朝日新聞』平成十四年一月二十九日付夕刊）、浜賀知彦「浦西和彦著『現代文学研究の枝折』（『東京南部ニュース』平成十四年二月二十日発行、第三百九十一号）などでとりあげられ、話題となった。続いて平成十四年には、半田美永氏と共編著『紀伊半島近代文学事典——和歌山・三重——』を同出版社から刊行した。翌年三月には『河野多恵子文藝事典・書誌』（和泉事典シリーズ）を和泉書院より刊行、同書は五月に社団法人日本図書館協会選定図書に選ばれる。また、本年五月、ネットミュージアム兵庫文学館監修者になった。平成十六年にもネットミュージアム兵庫文学館「阪神淡路大震災と文学」の監修者として協力をし、同年七月日本近代文学館図書館資料委員会の委員に選ばれた。平成十七年には、日本近代文学会関西支部編『大阪近代文学事典』の編集委員長を務め、翌年八月、和泉書院より同事典を刊行した。本書は、オビの推薦文に田辺聖子による「現代、大阪近辺在住の作家も増え、関西を舞台とする作品も多くなった。関西で活動される在日作家も多く、近代大阪の文学活動は多彩、活潑となりつつある。／こういう時代に、研究者の方々のご努力により、『大阪近代文

『学事典』が刊行されることは、まことに時宜を得たというべく、大阪の近代文学研究の礎ともなり、研究者の方々のよき誘掖となろう。」（『大阪近代文学研究の礎』）があり、その他、重「『大阪近代文学事典』」（批評と紹介）（『毎日新聞』平成十七年六月五日）、大村治郎「大阪の文学見直しへ事典編集」（『テールトーク』）（『朝日新聞』平成十七年七月十四日付夕刊）、坪内祐三「石丸梧平を知っているかい」（『まぼろしの大阪80』）（『ぴあ（関西版）』平成十七年七月二十八日発行、第五百七十四号）などでもとりあげられた。さらに、平成十八年十二月、堀部功夫・増田周子と共編『四国近代文学事典』を和泉書院より刊行。また、本年『大阪近代文学作品事典』を刊行した。本書は、オビに難波利三による推薦文「とかく東京に偏重しがちな近代文学の潮流を、大阪という偉大な地方に軸足を捉えて見つめ直し、発信しよう」と試みる。労多しその難事業を成し遂げられた浦西教授を初め関係各位の皆様方に敬意を表すると共に、本書によって大阪の近代文学が再確認され、新たな脚光を浴びるよう、期待は絶大である。」（『大阪近代文学への期待』）がある。

平成十九年から二十年にかけて、先生は、独立行政法人日本学術振興会より科学研究費委員会専門委員を委嘱された。さらに平成二十年十月から二十一年にかけて『浦西和彦著述と書誌』全四巻を和泉書院から刊行。そして、平成二十一年四月二十七日『浦西和彦著述と書誌』出版祝賀会が新阪急ホテルで開催された。関西大学の皆様をはじめ、日本近代文学会の方々が発起

人となって企画し、谷沢永一・河田悌一・玉井敬之・浅田隆・浅野洋・木村一信・山本幾生・広橋研三の祝辞、片桐洋一の乾杯を受けた。八月一日、独立行政法人日本学術振興会より特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員に委嘱され、平成二十三年七月三十一日まで続けられた。また、同年、関西大学名誉教授の称号を授与される。

平成二十三年五月二十一日谷沢永一名誉教授を偲ぶ会が関西大学千里ホールで挙行された。冊子『谷沢永一博士 略年譜・書目』（百十七頁）が、浦西先生独力で作成され、会場で配布された。その後、先生は平成二十四年三月三十一日まで関西大学に勤められた。実に四十三年間の長きにわたり関西大学で教鞭をとられたのである。関西大学時代には、図書館長をはじめ学部執行部など学内行政の重責を担いながらも、数多くの日本近代文学・書誌学の研究書をまとめあげられた。その傍ら、関西大学から多数の学士、修士、博士を輩出し、立命館大学や神戸学院大学などの大学院生、韓国の大学院生の博士号の審査にもあたるなど学内外の若手研究者の育成にもご尽力された。また、韓国その他の国で学者になられた留学生も育てられ、十分な国際貢献を果たされた。

さて、ここに記した多くの著作集、論文集、事典編纂だけでなく、先生は『葉山喜樹全集』（筑摩書房）『田辺聖子全集』（集英社）『河野多恵子全集』（新潮社）『開高健全集』（集英社）『大田洋子集』（日本図書センター）『本庄陸男全集』（影書房）

などの全集編纂、「解題」「執筆」「年譜」「書誌」作成などもなさった。『新・プロレタリア文学精選集』（ゆまに書房）などのシリーズ本の監修などもあり、ご業績は枚挙にいとまがない。これらの数多くの研究により、「芸術・芸能・科学又は学術について尽力された」特に優れた人物の一人として、平成二十六年には第四十九回大阪市民表彰を受けられた。その後も、先生の研究熱は冷めず、いよいよ盛んとなり、『文化運動年表 明治・大正編』（平成二十七年十二月、三人社）『日本プロレタリア文学史年表事典』（平成二十八年七月、日外アソシエーツ）『文化運動年表 昭和戦前編』（平成二十八年十二月、三人社）などを立て続けに発刊し、倉敷市から委託された薄田泣菫の研究プロジェクトにも参加して、『倉敷市薄田泣菫宛書簡集 文人篇』（平成二十八年、八木書店古書出版部）も著した。『温泉文学事典』（平成二十八年十月、和泉書院）も刊行し、同書は、『週刊読書人』（平成二十九年一月十三日）で島村景二に「この事典の項目を、アット・ランダムにめくっているうちに、温泉に浸かっているような安らぎを感じ始める。その秘密はどうか、作品の「内容」を、ダイジェストで解説している温かな文体にあるようだ。浦西たち二十三名の執筆者の手になる作品ダイジェストは、文体が滑らかで、ほのぼのとする。これが、いかにも温泉らしい雰囲気をかもし出している。」などと好評された。現在も多くの一般市民にも愛読されている事典である。生前最後の編著書となった『田辺聖子文学事典』（平成

二十九年、和泉書院）も発刊された。その後遺作となる、『文士の食卓』（平成三十年、中公文庫）なども、刊行されている。こうして先生は、故谷沢永一先生の培った日本近現代文学・書誌学の学統を継承し、発展させてきたのである。先生の著作は、国会図書館の検索サイトでは、単著書だけで実に一四六冊、関わられた著書は膨大である。まさに研究者、教育者の鏡と言えるだろう。先生の著書は基本図書が多く、若手研究者にとつて必定の書であり、役に立つものである。多くの著作を残されたとはいえ、まだ七十代半ばの若さでのご逝去は、これほどお仕事好きの先生にとつては、まことに無念であつたろうと思ひ図られる。我々、日本近代文学研究を志す後進の者達は、浦西和彦先生の偉大な業績を仰ぎつつ研究に励んでいかねばなるまい。

先生は、研究、教育に対しては厳しいが、普段はいつも太陽のような微笑みで若手に接し、学界でも親しまれていた。多くの作家にもその研究は感謝され、例えば開高健から自身の愛用のメモ用紙を貰い、豚の丸焼き付きのフルコースをご馳走になった思い出などを生前嬉しそうに語っておられた。紅茶と果物が大好きで、学生たちと毎年各地の温泉旅行に行くことを楽しみにしていた素顔の先生のお姿が今でも目に浮かぶ。きっと天国でも、図書館を往復しながら仕事をし、温泉につかってゆくり癒されているのだろう。

末筆になったが、先生の生前のご指導、ご鞭撻に感謝し、先

生のご冥福をお祈りし、本稿を終えたい。

浦西和彦氏の大坂関係事典・総覧について

——秋田実に寄せて

佐藤 貴之

浦西和彦氏の広範な仕事の中で、大阪と文学という主題は一つの焦点である。ただ、氏の業績を辿ってみれば、著名な作家を取り上げて作品読解を行うような、近代文学研究におけるオーソドックスな形での大阪文学論は思いのほか少ないことに気づかされる。やはり浦西氏の関心は大阪を取り上げた仕事においても、単体の作品論を記すことにはなく、文学研究の前提条件としての地盤構築に向けられていたと言えるだろう。

言うまでもなくその熱意は、書誌の整備や事典編纂を通して発揮された。日本近代文学会の支部単位で編んだ大規模な事典、『大阪近代文学事典』（和泉書院、平成一七年五月二〇日）において氏が中心的役割を果たしたことは疑いない。あるいは氏が代表編者を務めた『大阪近代文学作品事典』（和泉書院、平成一八年八月三一日）を漫然と繰ってみるだけでも分かることだが、浦西氏執筆の担当項目は群を抜いて多い。書誌研究の泰斗として関西における近代文学研究の土壌を造り上げた、その仕事量に

敬服させられる。

氏にとって大阪あるいは関西という地域への関心は、「東京中心の固定された文学観」^①への対抗として動機付けられていた。事典や書誌整備によって土地に根差した文学活動を広く取り上げながら、「東京」という地政学的中心、「文学」という概念的な中心から漏れ出すような人物・文章への目配せを怠らなかつた。ただしそこには、地方のマイナーポエツトに耽溺することへの厳しい自制もある。関西の文学事典刊行に際した文章で、浦西氏は「文学事典は、その人の文学的業績の評価が字数に反映されねばならない」と述べている。恐らく「文学的業績」という相対基準と「字数」の制限に誰より苦慮したのは氏自身だろうが、それでも抑制を課して作業を行おうとする誠実さが窺われる。実際、浦西氏の執筆にかかる項目は常に簡潔な記述に徹されている。事典の記述とは調査によって裏付けた事実の積み重ねに他ならず、執筆者自身の解釈や評価は排除せねばならない。

その大前提を意識していても、時に解釈を付言する欲望は鎌首をもたげるものだが、浦西氏の記述はストイックなまでに抑制され、広く公共的な解釈を待っている。

地域の諸作家を繋いだ水平的な観点ばかりでなく、固有の作家を対象とした深い掘り下げも氏の本領である。大阪に関係するところでは『開高健書誌』（和泉書院、平成二年一月一日）、『田辺聖子書誌』（和泉書院、平成七年二月三日）ほか、浦西氏編『織田作之助文藝事典』（和泉書院、平成四年七月二日）が代表的な仕事だろう。

個人的な関心に寄せて恐縮だが、このたび織田作之助関係の氏の仕事に触れ、大阪の〈笑い〉と文学について新鮮な興味を呼び起こされた。別段、浦西氏が〈笑い〉を論じている訳ではない。だが大阪に根付く〈笑い〉の文化を考える上で、織田は重要な位置を占めている。事典をめくり彼の文学的足跡を追いつながら、そのことを改めて痛感した。

織田が上方落語に親しみ、大阪という土地がもつ「ユーモア」性について繰り返し言及していたことはよく知られる。ただそれとは別に私が以前から気になっていたのは、織田の交友関係に漫才作者の秋田実が含まれている点だった。秋田は横山エンタツ・花菱アチャコと組み、いわゆる「しゃべくり漫才」のスタイルを確立させたことで「上方漫才の父」と呼ばれる。昭和一五年前後には吉本興業文芸部長と、大阪の輝文館が出す雑誌「大阪パック」の編集も務めた。「大阪パック」は「東京パック」

の向こうを張って刊行された諷刺的な漫画雑誌である。同時期に輝文館に出入りしていた織田も同誌に文章を発表し、秋田・長沖一・藤沢桓夫らと交流している。

『織田作之助文藝事典』は、昭和五〇年代刊行の『定本織田作之助全集』に未収録の作品を四十点以上紹介した点も特筆すべきである。その一つに「都新聞」昭和一六年六月二〇日夕刊に掲載された「洒落」というエッセイがある。浦西氏による梗概を引用しよう。

今日の時局において洒落は〈明るい生活に必要〉な小要素である。秋田実が日常機関銃の如く打ち出す洒落にはとても敵わない。僕の最近の傑作は、〈この将棋どうしても詰てみせる！〉／〈そら、無理や。胃袋で子を産むようなものや〉／〈いや。これが本当のお袋や〉である。

「◇、／は浦西氏による——引用者注」

この短いエッセイ中には、当時の笑芸や文学が積極的に取り込んだ、あるいは取り込まざるをえなかった時代の雰囲気垣間見える。「時局」において〈笑い〉は、動揺する人々を慰撫するものとして、「明るい生活」をもたらす娯楽的要素として期待された。エッセイ中の「傑作」は、くだらなさや機転の同居する大阪弁の掛け合いであり、特に体制迎合的には感じられないが、だからこそ銃後の〈笑い〉として、健全な日常性を

要請する力学に適合的なものかもしれない。

戦時下に漫才や落語のブームが到来する中で、秋田は「時局漫才」を精力的に制作し、戦後は糾弾も受けた。一方で鶴見俊輔は、学生時代から左翼運動に参加していた秋田の経歴に注目して、戦時下の彼の作品に反体制活動家としての強かさを見出している。³これは戦時下の世相を描き出した織田の文学が、しばしば体制への協力／非協力という評価軸で議論されることと相似的だろう。戦中文化を善悪の二分法で裁断することに意味はないとしても、大阪を磁場とした〈笑い〉の両義性という観点から、戦時下の秋田と織田を並べて考えることもできそうである。

そのような取り留めのないことを夢想しながら、また『大阪近代文学事典』を眺めていると、浦西氏が執筆している「秋田実」の項目に目が留まった。そこには秋田が漫才作者となる以前の「左翼運動」の足跡——「林熊王」のペンネームで発表したプロレタリア小説、日本金属労働組合への参加経験、「戦旗」編集部であつたこと等——が、限られた字数の三分の一程を費やして記されている。「上方漫才の父」としての秋田と、プロレタリア文学者としての彼の両面性がまさに示されていると言える。プロレタリア文学研究を主な領域としながら、一方で織田はじめ大阪ゆかりの作家を渉猟していた浦西氏の仕事は、有機的に交差する瞬間を見た思いである。憶測に過ぎないが、あるいは浦西氏も鶴見と同じ点に注目していたのではないかとむ

ろん抑制された浦西氏の記述は、鶴見のように即座に評価を下すことはない。そこから読み取るべきものは、事典をめくる読者に委ねられる。

そのことと関係して、氏の『増補日本プロレタリア文学書目』⁴の「秋田実」の項目も興味深く思われる。同書は、転向作家含めプロレタリア文化運動に携わった人物を広く立項しており、彼の名があること自体はさほど不自然ではない。だが当該項目に記載されている著書は、秋田が旧制大阪高校の左翼学生だった時期、本名の林広次の名義で翻訳したJ・S・フレッチャー『刺青婦人（世界探偵文芸叢書3）』（波屋書房、昭和二年四月一六日）のみなのだ。明治期から昭和二〇年の敗戦までの書目である以上、本来は漫才関係の著書も含むはずだが、それらは記載されていない。単に目に触れなかったとも考えられるが、浦西氏の意識において、秋田実は才気煥発な漫才作者であるよりも、プロレタリア文学運動に没頭する一青年であつたのかもれない——そのような益体もない想像も浮かんた。

先述の通り、秋田実は吉本興業に所属しながら、文芸関係・漫画雑誌などの複数メディアをまたぐ人物であつた。大阪笑芸史を語る上で不可欠な存在だが、しかし全集選集の類いはおろか著作目録も整備されていない。浦西氏が書誌整備に取り組んだならばどのように行つたのだろうか、と思いを馳せつつ、それは私を含めて後代に残された課題だろう。

以上はあくまで私個人が惹かれた問題に過ぎない。浦西氏の

膨大な仕事を前にすれば、研究者はそれぞれ別の箇所を目を向けるに違いない。何より浦西氏の業績とは、後続の研究者が抱える関心の萌芽を呼び起こし、そこから無数の文脈に開かれていくような基盤を培ったことにあった。

*

昨今、大阪をはじめとした関西の文学活動の再検討が盛んに進められている。関西に拠点を置く文芸雑誌や、サークル運動の機関誌、地域の記録文学、各種文化団体資料の整備など、複数の研究者がほとんど毎年のごとく成果を発表している。こうした流れを作る一つの契機となったのが浦西氏の実地な作業だっただろう。平成一七年の『大阪近代文学事典』刊行時、浦西氏は「大阪の雑誌や新聞の調査研究は、ほとんどが手付かずのままに放置されてきた」と慨嘆している。むろん調査研究は常に行われていただろうが、関西で発行された雑誌・新聞の全体からみれば、多くが不可視のままだった。

その方面で浦西氏が精力を傾けた仕事として、増田周子氏・荒井真理亜氏との共編『大阪文藝雑誌総覧』（和泉書院、平成二五年二月一八日）を逸することはできない。明治から平成までに関西で刊行された七十八の稀少な文芸雑誌の各号目次と、詳細な解題を付した労作である。これは『大阪近代文学事典』等とはまた毛色が異なり、全国的に知名度の高い作家の研究にも資するところが大きい。ごく率直な感想として、近代文学研究者であれば一度は手に取る価値のある書物である。索引を繰れ

ば研究者がそれぞれ関心を抱く作家の名がほぼ確実に見つかり、該当頁を眺めればデータベースの検索ではカバーできない、雑誌メディア上の水平的連関が概観できる。

諸資料のデジタルアーカイヴはもはや研究上の必須環境となり、我々はオンライン検索で固有のキーワードに該当する項目をピックアップすることに慣れている。ディスプレイ上の検索結果が全てでないと知りつつ、火急の作業に追われてひとまずの暫定的一覧として享受してしまうこともあるだろう。だが当然その手際よさの一方で、地域に根ざした作家相互の交流関係誌面上でコンテンツ同士が半ば偶然に切り結ぶネットワーク、雑誌記事の前後号との連続性、そして各雑誌にどこか漂う固有の雰囲気は看過されてしまう。

『大阪文藝雑誌総覧』のような書物は、メディアが本来もつ場の力学、複数の思想や言説が絶えず交通する網目に我々の目を向けさせる。試みに「秋田実」を索引で探せば、戦前発行された「会館芸術」に秋田の「漫才の面白さ」（第4巻第8号、昭和一〇年八月一日）、「楽しい我が家」（第7巻第6号、昭和一三年七月一日）の掲載が確認できる。これは「朝日会館の宣伝機関誌」として刊行された芸術文化雑誌であつたらしい（「解題」による）。その目次を通覧するだけで、著名な小説家・演劇人・映画人・音楽家・俳優・ジャーナリストの名が次々目に飛び込んでくる。演劇、映画、美術展、コンサートなど多目的に利用され、関西文化の発信地の一つだった「朝日会館」という空間に集う、出

自ら階層も様々な人間達、その混淆的なネットワークの存在が可視化される。秋田は実際の朝日会館、あるいは「会館芸術」というメディア空間で誰と遭遇し、いかに言葉を紡いだのだろうか。単体で自立するように見える各テキストの背景には、雑誌という紙媒体の物質性、さらには存在条件として大阪という固有の風土や出版環境が横たわっているのである。

利便性の面でもこの『総覧』の優れた点は、目次上の記事に対して「(*創作)・(*詩)・(*シナリオ)」といったジャンルの注記がなされていることである。素朴な配慮に思えるが、恐らく実際の各号誌面を確認する必要がある以上、その労力は計り知れない。浦西氏は注記の必要について、「書誌はそういう一寸した手間ひまを惜しんではいけない」と強い信念を込めて語っている。一読して即座に雑誌のジャンル割合を了解できることで、後続の研究が起動ししやすい環境を固めてくれている。浦西氏の研究の意義は何より、土地や空間、文化運動、メディアなどを焦点としながら、作家たちや周辺の文化人のネットワークを可視化する基盤構築にあった。

そして当然、デジタル・アーカイヴの可能性と、各地の資料を結ぶオンライン検索の役割に注目していたのも氏であった。「コンピュータ」を介して各図書館の「収集役割分担を決め、相互利用を緊密にすること」、そのための「蔵書データの遡及入力などの条件整備を速やかに進めていかねばならない」と早くから語っている。資料のデータベース化が進む現在において

も、デジタル書誌の基底にあるのは人間による調査と入力作業である。一つの空間を拠点として他の地域と水平的に連帯し、一方で垂直的に掘り下げられる書誌を参照しながら交差する情報の網目。種々の連繋の基底を支えながら常に更新するものとして、氏は自身の書誌研究を捉えていたのだと思う。

ここまで主に大阪関係の事典や総覧を取り上げて氏の仕事を振り返ってきたが、事典類は個人の達成(編者の功績)に帰される以前に、関わった全員の所産であることは言うまでもない。今回は便宜上、浦西氏の業績を焦点として語ってきたが、全体の労力を無視することは共同執筆者への非礼にあたるだろう。ただそれでも記しておきたかったのは、研究者・編集者・学生・出版関係者等々の人間を結びつける一つの結節点に、浦西氏の存在があったということである。固有の作家名や地域名を焦点としながら、専門知識をもつ中核メンバーだけでなく、偶発的に依頼を受けた執筆者まで含め、研究の関心が多様な形で枝分かれし、また総体的に組織されていくのが事典編纂過程で生まれるダイナミクスだろう。研究対象や地域がもつ網目だけでなく、研究者同士のネットワークを顕在化させたことも、近代文学研究において氏の仕事を持ちえた意義であったに違いない。

注

(1) 浦西和彦『大阪近代文学事典』に思うこと(日本近代文学会「日

本近代文学」第73集、平成一七年一〇月一五日)

- (2) 浦西和彦「研究展望 関西における近代文学事典の刊行と、今後の展望について」(昭和文学会「昭和文学研究」第61集、平成二二年九月一日)

- (3) 鶴見俊輔『戦後日本の大衆文化史 1945—1980年』(岩波書店、昭和五九年二月五日)

- (4) 浦西和彦『浦西和彦 著述と書誌 第四卷 増補日本プロレタリア文学書目』(和泉書院、平成二一年一月二〇日)。「秋田実」は増補版で追加された項である。

- (5) 浦西和彦『大阪近代文学事典』に思うこと」(前掲)

- (6) 浦西和彦「書誌について」(日本近代書誌学協会「会報」第6号、平成二一年一月二〇日)

- (7) 浦西和彦「図書館情調」(関西大学図書館報「籍苑」第35号、平成四年九月三〇日)

■特集 浦西和彦の仕事

書誌とジェンダー

泉 谷 瞬

本稿では、自分自身の問題意識から話を始めてみたい。学生期の卒業論文に取り組んだ時期から私は「ジェンダー」という概念に興味を持ち、文学作品の分析にジェンダー論の知見を用するという手法を、不十分ながらこれまで進めてきた。その中でも分析対象として書いたものは、「女性作家」の作品がほとんどである。

そうした自身の活動に一切の疑問を持たなかったわけではない。ジェンダーとは、社会的に構築された性別・性差という意味付けをめぐる概念であるため、根本の問題意識において「男／女」といったグループを設定することは、本来ならば矛盾する行いであるとも言える。つまり、「男／女」という意味付けを問い直すための研究であるにもかかわらず、その分析対象に「女性であること（あるいは、「女性」と社会的に見なされること）」を予見的に考慮する態度は、何か同じ道をぐるぐると回るもの

のように感じてしまうのだ。これは「女性作家」や「男性作家」という区分を設け、たとえそれが肯定的なものであれ、何らかの評価や価値判断を加える過程が、既にジェンダーを構成する要因の一つになり得ることへの危惧と言ってもよいだろう（ここに画一的な男女の二分法では収まらない概念——「クイア」を挟んでも、状況はあまり変わらないと推測する。たとえば「クイアな作家／作品」という評価の流通が成立することが、「クイア」であるとはどういうことなのか、あらかじめ綺麗に定義付けられている事態を意味してしまうように）。

もちろん、「女性作家」であるから、といった単純な理由によつて分析対象を選定したことは一度もない。文学研究とジェンダー論という取り合わせが、イコールとなつて女性作家研究に限定されるルールなども存在しないはずだ。作品の魅力をいかにして引き出すか、そしてそのことがジェンダーの問題とど

のように絡まり合っているか、この二点を最優先の関心として設定してきたつもりである。その結果、「女性作家」の作品がたまたま自分の関心として多く飛び込んできた、というだけの話なのかもしれない。

しかし、そうであつたとしてもこの問題は簡単に済む話ではないし、済ませてはならない。何故ならばここには、社会的な実践の次元、そして表象分析という両面において、「男／女」という性差が常に意味付けられていくことよつて出現する非対称性の困難が、潜んでいるからである。この非対称性を持つた構造について、どのように向き合うべきか。すなわち、この構造を説明すること、解消することという二つの作業を並行する点にこそ、ジェンダー論を基盤とする文学研究を続ける中で、私自身が陥つた疑問の核心があるのではないかと思う。

「男／女」という性差がいかにして構築され、さらにはマクロ・ミクロの視点を問わず、どのような形で個々の人々の生活へ介入し、微妙な差異を含みながら反復されているのか——こうした構造を、文学作品を基点に解きほぐす有効性については疑うまでもないだろう。作家の来歴から思想までを射程に入れた分析にしろ、メディアの歴史の変遷や精緻な同時代状況の注釈と作品を対比するアプローチにしろ、性の構造が生み出した文学の制度における偏差（「女流」という評価軸がその代表的なものと言える）を批判的に捉え返す視座にしろ、構造の「説明」について、文学研究が貢献できる余地は十分に残されている。

それでは、非対称的なジェンダー構造がもたらす問題の「解消」という点について、文学研究はどのような立場をとり得るのだろうか。先程から何度も挙げている「非対称性」という言葉であるが、優劣を伴つた（と意味付けされる）性の二項対立としてジェンダーの構造を捉えるならば、その「解消」とは必然的に政治性を帯びたものとなる。一定の中立性・客観性を要求される学問の世界にあって、ジェンダー論を核とする文学研究が直面するこうした難問は、まさしくフェミニズム批評から継続する課題であるに違いない。

以上のような私の素朴な疑問に対しては、様々な応答が可能であると思われる。たとえば、ジェンダー論に限らず、政治性を完全に離れた研究のプロセスなどということが本当はあり得ないのであつて、更新されるべきは、その力学に無自覚な研究の体制であると。すると、構造の「説明」を成果として提出する行為が、そのまま「解消」への道筋につながる展開が最も理想的な形と呼べるだろうし、現在の人文学研究に関わる者としては、そうした構想のもとに研究を見据える倫理的な姿勢を携えることが当然となつてくるのだろう。

だが、それにしてもその具体的な道筋が見えづらい。自分が発表してきた数少ない論文を改めて振り返つてみても、これら「説明」と「解消」のどちらかにかろうじて辿り着けたものはあるだろうか。ましてや、その二つを架橋する仕事となると言語化は途端に難しくなる。

浦西和彦氏の研究は、私のこうした個人的かつ政治的な疑問に一つの示唆を与えてくれるものであった。浦西氏は、個別の「女性作家」を対象とした書誌についても、緻密な業績を複数作成している。その初期の成果と見られる大田洋子の著作目録をまとめるにあたって、浦西氏が次のように断定しているのは興味深い。

たとえどのような性格的欠点があったとしても、大田洋子が原爆に憎悪をかけた努力、原爆被害のすさまじさを、精一杯の力で、真実性において描きだした、その作品を抹殺されてはならぬ。作品は作者の手を離れて、独り立ちするもので、比類のない芸術的証言となっている大田洋子の原爆文学は、それを書いた作者などのちっぽけな性格など、何の痛痒をもあたえない。原水爆禁止運動の式典がいくら盛大に大規模になされても、大田洋子の原爆文学が、人類の遺産として、将来にわたって継承されないようでは意味がないであろう。

〔大田洋子著作目録〕、『関西大学文学論集』第二七巻第一号、

一九七七年九月、七一頁

「ここで宣言されるのは、文学作品そのものに対する強い信頼感である。もしくは、業界にはびこる作家の「悪評」を切斷し、作品を遺すことへの使命感とも言い換えられるだろうか。確か

に書誌を整理する作業とは、ジェンダーによる予断を可能な限り排除できる方法の一つと考えられる。「作品の理解や解釈や評価にとつて、その作品がいつどこに発表されたものかということが、いかなる作家によつて執筆されたかということと共に大事なことである」⁽¹⁾という浦西氏の言葉は、書誌の精密性と文学研究の質が決して分離できないものであることを如実に語っている。

そのように注目すると、浦西氏が力を尽くして取り組んでいた田辺聖子の文学についても、その評価の本身は、書誌的な事実を積み重ねて構成されていることに気付く。二〇一五年二月五日に行われた大阪樟蔭女子大学国文学科公開講演会にて、浦西氏は次のように述べている。

時代や社会は常に変化していきます。田辺さんの小説はその進んでいく時代や社会を一步先に描きます。例えば、優雅な一人暮らしを満喫している歌子さんを主人公にした「姥ざかり」シリーズがあります。これが書かれたのは非常に早い時期ですね。昭和五十四年に書かれています。七十歳とか八十歳の元気なお年寄りには珍しくありません。田辺さんは老人問題が社会問題となる以前に、昭和五十四年に小説の主人公を七十八歳の老女に設定して書いています。自分の健康も、それから自分のやりたいことも、自分の財産の管理も、自分の息子たちに任せておけな

い。自分のやりたいことをやり、自由に生きたい。それでマンションに一人で住んでいる元気なお年寄りです。老いてゆく理想の女性の生き方を昭和五十四年に発想しているのです。

〔田辺聖子の文学万華鏡〕、『樟蔭国文学』第五十三号、二〇一七年三月、六二頁。傍点は論者による〕

作家の個性や才能を評価する根拠として何度も強調されるのが、「昭和五十四年」という執筆時期である。むしろこれは、作品に遡っていく姿勢と言えるだろう。浦西氏の論考には、作者の性別を根拠とした安直な分析はほぼ存在しないように見える。そこにあるのは、書誌的な事実から導き出されること、作品から導き出されることであり、あくまでもその結果として作家の輪郭が浮かび上がってくるのである。

だが、ジェンダー論の観点からすると不安は残るだろう。性別による事前的な判断を抜きにした書誌学的方法による文学研究は、「非対称性」の困難をどのように解決するのか。ジェンダーの構造が不可視化されてきた歴史の中で、そもそも評価される機会の少ない立場に置かれた「女性作家」の作品に対しては、やはりそこにあてがわれた非対称性を含めて検討の対象とすべきではないのか。本稿で先に述べた問題意識と関連付けるならば、書誌学的方法による文学研究は、ジェンダー構造の「解明」と「解消」をいかにして可能にするのだろうか。

実を言えば浦西氏の仕事は、私のこうした疑問を既に先回りしている。田辺聖子の膨大な著作群を整備した書の「はしがき」で、浦西氏はこのように述べていたからだ。

本書を作成してみてつくづくと思うことは、女性雑誌・婦人雑誌・「問題小説」などの中間読物雑誌・少年少女雑誌などを調査する場合、それらを所蔵している図書館が貧弱であるということである。

〔『田辺聖子書誌』和泉書院、一九九五年十一月、二頁〕
また後には、「文芸時評が定期的にある純文学と違い、直木賞系の読み物は高度成長期に書き手を育てた一方、解説者や評論家を育ててこなかった」として、「純文学／大衆文学」といった階級的とも呼べるカテゴリーによる「近代文学研究の偏り」を批判している点も見逃せない。

ここから分かることは、浦西氏の研究には、ジェンダーをはじめとした様々な構造・制度によって生み出された非対称性への鋭敏な眼差しが根底に備わっているということだ。つまり、対象が何であるかを把握せず、ひたすらに記録を残し、事実を列挙するだけという無目的な態度ではない。私なりに都合良く解釈するならば、浦西氏が遺した数々の業績は、非対称的な境遇に置かれた「女性作家」の位置を引き戻すためのエンパワーメントとしても機能するのである。

これほどまでに明快な「解明」と「解消」の両立を示してくれた先達の方法を前にして、できることは何だろうか。作品に密着しつつも、同時にその作品がどのような位置に立たされているのかを俯瞰する。極めて当然の認識でありながら、しかし実現することが難しい文学研究の原則であるこの課題は、相変わらず我が身に余るものではあるが、それでも具体的な道筋は見えてきた。

浦西氏の仕事が放った思考と方法は、おそらくその意図を超えた場所にまで届き、後続である私たちへ確実に影響を及ぼしている。だから、最後に引用する次の文章にしても、ただ「書誌」のことに限った話として受け取るべきではない。これは、ある優れた達成に対して、悩みながらも研究の枝をねばり強く接いでいくという種類の話なのである。

ただ機械的に文献を羅列し並べるだけの書誌は終わったのである。ものを調べる基礎ルーツとしての書誌から、書誌そのものが文学研究そのものの成果の到達点を示すものであらねばならない。書誌作りで大事なことは、常にそこになにか新しい工夫、独創性というものが、きらめいていることである。⁽³⁾

注

(1) 浦西和彦「書誌について」『著述と書誌 第二巻 現代文学研究の基底』和泉書院、二〇〇九年二月、五一―七頁。

(2) 「田辺聖子さん 純文学の壁崩した先駆者」『朝日新聞』二〇〇六年七月二十九日大阪版夕刊。

(3) 浦西和彦「書誌について」前掲、五二―五頁。

■特集 浦西和彦の仕事

文学の源泉

村田裕和

温泉文学のホットスポット

もう四半世紀も前のことだが、伊豆半島を徒歩で旅したことがある。

東海道線三島駅を出発し、蕪山反射炉を見学して、修善寺温泉で一泊。翌日は湯ヶ島まで歩き、三日目に天城トンネルを抜けて湯ヶ野に至り、四日目に下田に着いた。下田では日本最初の米国総領事館が置かれた玉泉寺を訪れたはずだが、記憶が定かではなく、どこかの駅前の食堂で食べた秋刀魚の刺身がおいしかったことばかり今もはっきりと覚えている。

当時、私はまだ「温泉文学」という言葉を知らなかった。

「温泉文学」を、文学ジャンルとして提唱したのは、川村湊『温泉文学論』（新潮新書、二〇〇七年）が最初であろうか。同書で主に扱われている作品は、『金色夜叉』から『雪国』『天城越え』『銀河鉄道の夜』『満韓とどこどこ』『城の崎にて』『秋津

温泉』『大菩薩峠』『黒谷村』、漫画『ゲンセンカン主人』まで多岐にわたる。これだけでも温泉／温泉地がきわめて重要な文学空間であることは明らかだ。

その重要性を膨大な作品データによって実証したのが、他ならぬ浦西和彦編著『温泉文学事典』（和泉書院、二〇一六年）である。この事典は、温泉に関する近代文学作品を作者別に分類して、その書誌情報と内容（あらすじ）をていねいに紹介している。版元のホームページには、本書の「特徴」が次のように紹介されている。

- ・四七三名の作家による、温泉に関する八五三作品を収録。
- ・登場する温泉は約七〇〇ヶ所。
- ・郷土再発見・町おこし・観光案内・旅の計画・温泉イベント・温泉エッセイなど幅広い用途に使えて便利。
- ・温泉・作家・作品が一目で分かる索引（都道府県順）付き。

つまり、一般市民に向けて娯楽性や実用性をもたせた読み物的な事典をめざしたということであろう。本書のカバーには、手ぬぐいを頭に載せて湯につかる夏目漱石（おもて）と芥川龍之介（うら）の軽妙な雰囲気のカットがあつて、地域の図書館などで手に取ってもらいやすい装幀となっている。

また、巻末には「温泉地別作家作品名索引（都道府県順）」が付いていて、訪れてみたい（訪れた）温泉地には、どのような作品が関係しているかが一目でわかつて便利である（海外の温泉もある）。欲をいえば、個人で購入するには六〇〇〇円（本体）は高価なので、旅に持参できるポケット版を作ってほしいところだ。もしポケット版ができるなら、温泉地を見出しとして、北から温泉ごとに作品解説が並んでいると、また別の角度から楽しめるのではないかと思つてみたりもする。

私が歩いた伊豆半島は温泉文学のホットスポットである。修善寺温泉は言わずと知れた夏目漱石の「修善寺の大患」の舞台。湯ヶ島では、川端康成と梶井基次郎が交流し、梶井の「冬の蠅」『創作月刊』一九二八年五月、「闇の絵巻」『詩・現実』一九三〇年九月）などの名作が生まれた。また、井上靖が幼少期を過ごした場所でもある。国語教科書で『しろばんば』（中央公論社、一九六二年）の一節に出会い、その後自伝三部作を読んでいた私にとつて湯ヶ島は、ぜひとも訪れてみたい場所だった。

時あたかもバブル崩壊後の一九九四年。戦後に隆盛をみた巨

大温泉地が見る影もなく衰退していった時期であつたが、伊豆の山中は、そうした温泉地の栄枯盛衰から置き去りにされたかのように静かであつた。

サンプル解析

しかし、こうして思い返してみると悔いの残ることが一つだけある。それは他ならぬ温泉を十分に堪能しなかったことだ。当時の私は、文学碑をカメラに収めることしか考えていなかったらしい。もし、その時『温泉文学事典』があつたなら、私は温泉というものの「効能」について、もっと真剣に考えただろうし、のんびり湯につかることも「研究」なだと自分自身に言い聞かせることができたはずだ。

『温泉文学事典』は、趣味や実用方面での読者を十分に意識した作りになっている。その上、事典に登場する温泉がどこにあるのかを示す『温泉文学事典』地図」がインターネット上で公開されている。地域ごとに色分けされた地図を、画像ファイルで閲覧するようになっていて、これなら旅先でもスマホで確認できる。事典を購入していなくても閲覧できるところがうれしい。

本書の企画がどのように出発したのか私は知らない。しかし、文学研究の専門家でない人に向けられた本書の本作りに、編

者・浦西和彦の仕事の特質が表れているように感じられる。その最大の理由は、氏の書誌研究の緻密な仕事、けっして学術的なものではなく、その反対に、デモクラティックともいえるようなものだと思えてくるからだ。

周知の通り浦西氏には、数多くの事典や書目の仕事がある。いずれの仕事も、個人的な主観によって資料を選別したり、ニュース性のある逸文だけを「発見」してみせたりするのではなく、膨大なデータを網羅し、一定の基準（作家名、ジャンル、テーマなど）に基づいてそれらを分類して提示するという学問的手法において一貫している。

その研究方法は化学や生物学のサンプル解析に近く、こうした「基礎研究」がなければ、文学研究は一步も立ちゆかないといった性質のものである。また、その解析されたデータは、公共空間に置かれることによって、誰もが利用可能なものとなっている。デモクラティックであるという特質は、科学的精神によってもたらされたものである。

また、浦西氏の仕事の先駆性は、インターネット検索全盛の時代にさきがけて、膨大な情報の海を文字通り徒歩で渉猟したところにある——とひとまずは言えるだろう。このことの偉大さはそれほど強調してもしきれない。

だが、氏の研究のどれ一つをとっても、現代の情報検索装置によって解消されてしまうようなものはない。氏の仕事がすべてデジタル・データベース化されてインターネットで検索・閲覧

できればそれほど便利かと思うが、このことは、インターネットが氏の研究を加速・増強しうる可能性を示唆するにすぎず、その逆ではない。

インターネットがあろうとなかろうと、丁寧に資料を探索して、整理し、公開するという実証的研究の根幹は変わりなく、むしろ現代においてこそ、浦西氏がおこなってきたような正確なデータの蓄積はますます重要性を増している。

境遇と運命

さて『温泉文学事典』をいくつか拾い読みしてみよう。ここには先述の通り八五三作品の書誌情報とあらすじが収められている。中でも、もつとも多くの作品が採録されている作家は川端康成である。初期の「ちよ」〔校友会雑誌一九一九年六月〕から「雪国抄」〔サンデー毎日〕一九七二年八月一三日〕まで、三十九編ある。

「ちよ」は、死んだ男から送られた五十円で修善寺温泉にでかけた「私」が、「ちよ」という旅の娘と出会い、その後も、次々と「ちよ」という名の女と出会う物語である。「私」は不気味に感じて、「やつぱり、今でもあんなに私をみつめているあの霊どもと、同じように、肉体をぬぎすてた霊の姿にならなければこの怖れはのがれられないのでしょうか」と思う。

温泉地の集落や宿を描いた作家は多いが、浴場そのものの、湯そのものを物語の重要な空間・要素として機能させている点でも、川端は「温泉文学者」と呼ぶにふさわしい。なにゆえ、川端は温泉をくりかえし描こうとしたのか。

川村湊『温泉文学論』（前掲）は、川端のエッセイにも触れながら、温泉は「肉体と精神、形而下的な身体と形而上の靈魂」とが融合する場所なのであり、現実の世界が非現実、超現実の世界へと変わってゆく「場所なのだ」と述べている。身も蓋もない言い方をすれば、人間存在が赤裸々に現れる場所ということになるだろう。

川端自身はエッセイ「伊豆の娘」（『婦人公論』一九二五年八月）で、宿屋の女中についての感想として、「境遇と運命」が一本の線になって現れると書いているが、この言葉は、彼の温泉文学全体にもあてはまるようだ。温泉に浸かった肉体の向こうには、生のもろさやはかなさ、人間の境遇・運命・孤独といったものが見え隠れする。

人間の運命あるいはその靈魂があらわになる場所としての温泉。芥川龍之介の短篇「温泉だより」（『女性』一九二五年六月）は、検体を約束して大金を得た大工の男が、達磨茶屋の女に熱中したあげく、共同風呂の底に沈んでみずから死ぬという話である。この男女のあいだにできた子も、今では茶屋通いばかりしているという。男と女とその子のあわれな運命を客観視する物語は、川端のいう「境遇と運命」そのものである。

志賀直哉「城の崎にて」（『白樺』一九一七年五月）もしく。近代作家たちは温泉に浸かりながら、いつも命というものの虚無を厳肅な面持ちでのぞき見ていたのだろうか。

浦西氏の「はしがき——温泉愛好者にお薦め」には、こんなふうに書いてある。

温泉地も時代とともに著しく変貌を遂げていく。戦後、ことに昭和三十年代以後、日本経済の急速な発展によって、交通網も整備された。全国的に高速道路が配置され、車社会となつて、どんな山奥の辺鄙なところにある温泉地でも人々は手軽に出かけて行けるようになった。温泉地も観光資源となり、資本が投入されて、山奥の温泉地にも豪華な高級ホテルが立ち並ぶ。（中略）しかし、本事典を読めば、現在の温泉風景とは異つたものがそこに出てくるであろう。その時代々々特有の温泉風景や文化や人情が描かれていて、社会や時代の流れのなかで、いつのまにか変化していったものに出会うであろう。失われていったものも多くあり、改めて現代社会を再認識することができのではないかと思う。

浦西氏のこの指摘を敷衍すれば、近代に「温泉文学」が発達し、温泉地を舞台として人間の運命が交錯するような「話」が多く書かれたことも、もう少し距離を置いて、文化的な視点

から読み解いてみる必要があるということになる。

たとえば、明治から大正にかけて、全国に鉄道網が整備され、避暑や避寒が容易になったことも一因だろう。またそこに、世俗の塵埃を忌避する文人趣味や、転地療養の習慣、あるいは柄谷行人のいう「風景の発見」のような認知パラダイムの転換などが関係していることも考えられる。

温泉の女、温泉に行く男

だが、そもそも温泉宿にのんびりと逗留することは、家事や育児に追われている者には不可能だ。独身既婚を問わず、近代文学の担い手の多くが男性で、その作品はインテリ男性たちを中心とする読者共同体によって消費されてきた。峠道で踊り子を追いかけたり、トンネルを抜けた先の温泉地で芸者となじんだりする「話」は、いくつもの暗黙の前提があつて成立する「話」である。

温泉地が、あらかじめ男性性をまとった空間であつたとすれば、温泉文学というジャンルもまた同様である。とりわけ、代表的な日本文学作品のひとつとされる『雪国』が、温泉地で出会つた〈運命の女〉を男が訪ねるといふきわめて典型的な温泉ロマンスであつたことは示唆的である。温泉文学が男性中心主義的だというよりも、むしろ、日本近代文学そのものの――

特にその非日常の空間を構成するセクシュアリティのあり方の――象徴が、温泉文学なのだと言つた方が正確かもしれない。とはいえ、温泉文学のセクシュアリティも一樣ではない。川端作品の場合、「伊豆の踊子」「文芸時代」一九二六年一月、二月や『雪国』（創元社、一九四八年）に典型的に表れているように、温泉地の女はその温泉空間の内部にとどまつて、内と外を往還するのは男だけである。男は、温泉Ⅱ女が現実世界によって汚されることを望まない。一方、川端と双璧をなす温泉文学者の夏目漱石は、〈温泉の女〉が外部世界と接触する瞬間を描き出す。「草枕」（『新小説』一九〇六年九月）がそれである。画工の「余」は、温泉で出会つた女「那美」を描こうとするが、男が探し求めた表情を女が見せたのは、従弟の出征という〈現実〉が彼女に突きつけられた瞬間だつた。これは温泉世界に対する一種のアンチ・テーゼであろう。

『明暗』（岩波書店、一九一七年）では、新婚の妻「お延」とそりが合わない男「津田」が、自分のもとを去つて行つたかつての恋人「清子」と温泉で再会する。清子は温泉世界の住人ではないものの、「草枕」の那美と同様に、男にとって一種の謎を秘めた〈温泉の女〉である。

清子と温泉のイメージは重なり合っている。津田は迷宮のような温泉宿の内部をさまようが、この放浪は、心底の計り知れない清子の言動に津田が翻弄される姿と重なる。しかし津田は、清子に対して、けつして心地悪いものを感じていない。

男性視点人物に対して、女性が「謎の女」として対置され、その女が描かれる（視られる）対象であるという構図そのものはステレオタイプである。清子がこの後どう変化するかは分からないが、しかし、温泉（清子）の内部で男（津田）が心地よくたゆたうだけで物語が終わりになることなどありえない。温泉文学者・漱石は、インテリ男性の無意識という悪意、あるいは不器用さという傲慢を露呈するための実験空間として、温泉を（再）構築しようとしていたのではないか。

未完の温泉文学としての『明暗』。そういう視点で続きを想像してみるのも楽しそうだ。

＊

『温泉文学事典』は、発売から三ヶ月後に早くも第二刷が出ている。浦西氏は「温泉愛好者にお薦め」と「はしがき」の副題に書いていたが、何といっても、温泉という気楽なテーマ設定が販売好調の決め手であったにちがいない。

ところで、『温泉文学事典』の約一年前に出た『文化運動年表 明治・大正編』（三人社、二〇一五年）の「はしがき」に、浦西氏は次のように書いていた。

日本の近代が歩んできた歴史をよく点検し、検証すること
となくしては、新しい時代を展望し、未来を模索すること
はできないであろう。

この言葉は、氏がたずさわったすべての書目・事典・年表の仕事に共通して言えることだろう。もちろん『温泉文学事典』も例外ではない。そう考えると、『温泉文学事典』はテーマ設定も良かったにちがいないが、それは裏を返せば、日本の、あるいは自分自身の「歴史」を再発見・再検討したいという読者の潜在的な欲求に対して、本書が〈温泉〉というアプローチによつて応えたということの意味するだろう。「文化運動」から「温泉文学」まで、民衆にとつての文学・歴史・社会ということを考えた時、書誌学者の目にはどちらも同じように重要なテーマであったにちがいない。

淡々と事実Ⅱ資料を整理し蓄積し、未来に委ねる。文学と人間への信頼なしにはできないことである。

酒食への眼差し

——浦西和彦氏の食文化・味覚雑誌研究

内藤 由直

プロレタリア文化運動や地方の雑誌メディアに関する書誌研究で、文献を総覧することの重要性を示し、幾つもの発見を導いた浦西和彦氏の業績のなかでも、ひととき異彩を放っている仕事で、「飲食」に纏わる資料の精査・発掘である。浦西和彦・堀部功夫・荒井真理亜編『食文化・味覚雑誌目次総覧』（目外アソシエーツ 二〇一五年）は、その代表的な研究成果である。

『食文化・味覚雑誌目次総覧』では、『酒』（酒の友社 一九五〇年～九七年）や『サッポロ』（日本麦酒 一九五八年～七九年）、『Suntory quarterly』（サントリー広報室 一九七九年～二〇〇九年）とつたいわゆる「三三三三三」雑誌や企業の「PR雑誌」を中心に、二〇タイトルに亘る雑誌の記事情報が目録化されている。これらのなかには、流通範囲が地方に限られていたものや、商業雑誌ではないために書店の店頭に並ぶことがなかったものも数多くある。

大手出版社から刊行される文芸雑誌や総合雑誌ではなく、人

目に触れることが限られ、ともすれば読み捨てにされるような雑誌群に浦西氏が注目したのはどうしてなのだろうか。

目録化された記事情報を読んでいると、著名な作家や批評家たちが、飲食関係の雑誌へしばしば寄稿していることに気づく。例えば、名古屋で創刊されたPR誌『あじくりげ』（東海志にせの会 一九五六年～二〇一〇年）は地域の名店を紹介するとともに食に関する随筆を掲載していたが、その第二三号（一九五八年四月）には、安部公房の「時計の針」というエッセイが収録されている。また、同誌第九〇号（一九六三年一月）には、亀井勝一郎「私とたべもの」という記事もある。あるいは、洋酒の寿屋（現・サントリー）のPR誌であった『洋酒天国』（洋酒天国社 一九五六年～六四年）は、開高健や山口瞳が編集長を務めた雑誌であったが、吉田健一・安岡章太郎・埴谷雄高・いいだもなど著名な文化人が名を連ねている。これらのなかには、文芸雑誌や総合雑誌の目次情報を見ているだけでは気づくこと

のできないものが多数、含まれているのである。

しかし、このような書誌目録は、単に作家たちの逸文を再発見するためだけにあるのではない。重要なのは、文学が存在した「場」そのものなのである。そのことを浦西氏は、次のように述べている。

文学作品が存在して、文学研究がはじめて可能になる。文学者が作品を書きあげ、それが雑誌、新聞に発表される。あるいは単行本として刊行される。そこで我々読者はその作品を読むことが出来る。作品を生み出すのは、その作家の強烈な個性や才能である。しかし、何人といえども、人間生きているということは、その時代や社会の制約を無意識のうちに受けている。時代や社会には固有のモラルや美意識やもろもろのものが空気のように存在する。文学作品もその時代や社会が生み出した産物であるといってもよい。作品の理解や解釈や評価にとつて、その作品がいつどこに発表されたものかということが、いかなる作家によって執筆されたかということと共に大事なことである。文学作品の理解の前提として、先ず作品の書誌的事実をきちんとする必要がある。書誌的調査が文学研究とは別個のところに位置するのではない。文学的研究というものには書誌的なところからはじめねばならない。私にとって書誌的興味は文学研究そのものについての関心である。

（浦西和彦「書誌について」『日本近代書誌学協会会報』

一九九九年一月）

文学作品は、孤高の作者が世俗から乖離して単独で作り上げたのではなく、それが作り出された時代や社会とともに存る。ゆえに、文学作品は、眼前に現れた文字だけを読めばよいというものではない。作品が生成される場の全体に立ち会うことが作品を理解・解釈する上で不可欠だという浦西氏の考えは、作品が掲載された雑誌の総体を見するという目次総覧の思想として顕れている。さらに、作品がいつどこで発表されたのかという時空間への眼差しが作者の存在と等しく重要であるとの指摘は、当時の文学研究への戒めであるだけでなく、電子テキストやデータベースの情報が氾濫し、特定の情報の一部をピックアップすることが簡便となった現在においてこそ銘記されるべきことであるだろう。

ところで、『食文化・味覚雑誌目次総覧』に採録された記事の執筆者は、著名人ばかりではない。名前を見ても、どこの誰なのか分からない者も多い。署名が名字だけ、あるいはイニシャルだけのものもたくさんある。本書には、二〇の雑誌に執筆した全ての人物を横断的に検索できるようにした「執筆者名索引」が巻末に掲載されているが、これを眺めていると、実に多くの、そして様々な人々が食文化の言説に関わっていることが見て取れるのである。

知名度の低い執筆者、あるいは無名・匿名の人々をも一律に拾い上げる視点には、本書に記されているように、「この細目によって、食味雑誌が、その時代の食生活や食文化、あるいは社会や文学や歴史や風俗を知る上で無視できない豊饒な内容を持つていることが明らかになるであろう」（浦西和彦・堀部功夫・荒井真理亜「はしがき」『食文化・味覚雑誌目次総覧』前掲）という確信が反映されている。市井に生きる名も無き諸人の言葉こそが、我々の社会や文化の基盤なのであり、人々の生活を多様で豊かなものにしていくのだ。

そうしたマイナーな人々の存在や言説への関心は、浦西氏が専門としたプロレタリア文学運動への関心と共通するものがある。棚沢健が述べるように、「プロレタリア文学は、少数の専門家や職業作家によってだけでなく、誰もが読み手であると同時に書き手になることを追及した文学運動」（『だからプロレタリア文学』勉誠出版 二〇一〇年）であり、「無名性」「小ささ」「取るに足らなさ」「存在の透明性」を「集団」の力によって克服し、乗りこえていこうとした文学運動（同前）であった。プロレタリア文学のなかの些末な作品群と同様に、食味雑誌の誰が書いたか分からない、取るに足らない記事には、それだけでは高い価値を見出せないものもあるかも知れない。だが、それら一つ一つが集合して、一冊の雑誌の誌面を彩り、雑誌のシリーズを作り上げ、文学が存立する場を形成しているのである。そうしたエフェメラルなものへの興味関心が、対象を総体のなかで

見た時に看取される豊饒さを、浦西氏に気づかせたのであろう。エフェメラルといえば、無名の人々に劣らず、著名な作家たちも、食味雑誌の数々に、その場限りの消費で霧散してしまうような文章をしぼしば執筆している。宴席でのたわいもない話や食の嗜好など、瑣末な事柄について書かれたものも多いが、まとめて読むとこれが面白いのだ。

作家たちの食や酒に関する放談を蒐集したものとして、浦西氏が編集したアンソロジーがある。浦西和彦編『酒』と作家たち』（中央公論新社 二〇一二年）・同『私の酒——『酒』と作家たちⅡ』（中央公論新社 二〇一六年）・同『文士の食卓』（中央公論新社 二〇一八年）がそれである。

『酒』と作家たち』は、佐々木久子が長らく編集長を務め、火野葦平の助力を得ながら刊行されていた雑誌『酒』（前掲）に掲載された、作家・批評家・研究者たちの随筆を収録したものである。荒正人や大岡昇平、川村二郎や原卓也など総勢三七名による、酒に纏わるエッセイが選ばれ集められているが、それらはいずれも酒を通じた作家たちの交友や、小説などの作品からは決して知り得ないようなエピソードに溢れている。例えば、奥野健男が高見順について書いた「高見順の思い出」（『酒』と作家たち』前掲）には、酒好きの高見順が銀座のクラブでホステスに向かって（本稿には引用できない）下ネタを披露している会話や、安酒場で石川淳が怒鳴り散らしているのを見ていた高見がそれを冷静に分析している様子などが書き留められていて

面白い。あるいは、大隅秀夫は「君たちは一軍半」(『酒』と作家たち『前掲』)というエッセイのなかで、大宅壮一が下戸であることを記しているが、大宅が僅かな酒の混ざった酢飯で作られた押し寿司を食べて酔っ払っていたことが描かれている。さらに、初めて訪れたスタンド・バーで周りがみなビールやウィスキーを注文するなか、大宅一人が「ミルクセーキ」をオーダーし、バーのママさんが驚いて、ミルクセーキの材料を買いに出掛けていく様子が描かれていて可笑しさが込み上げてくる。

続編として刊行された『私の酒——『酒』と作家たちⅡ』は、同じく雑誌『酒』に掲載された四九篇のエッセイ集である。このなかでは、酒乱のため「だれもぼくと一緒に酒を飲んではいられない」と愚痴る野坂昭如「男と女が酒を飲むとき」(『私の酒——『酒』と作家たちⅡ』前掲)も滑稽だが、傑作なのが梅崎春生「眼の上の傷」(『私の酒——『酒』と作家たちⅡ』前掲)である。終戦間際、鹿児島海軍基地で深夜、酒に酔った梅崎は崖から転落・失神したことがあるらしい。負傷しながらも起き上がって歩き出した後に転んだ時、「面倒くさいからそのまま眠ろう」としたというのが吹き出さずにはいられない。なんとか宿屋へ辿り着いて蒲団で眠り、起きて鏡を見れば、顔全体が血の瘡蓋に蔽われており、ひどく驚いたそうである。私もかつて、酔っぱらって寝た後に鼻血が噴き出したことがあるのだが、面倒くさいのでそのまま眠り続け、翌朝、殺人事件現場に横たわっているような有様を家族に見えられたことがあり、梅崎にはとても親近

感が湧いた。

浦西氏は本書の解説で、「酒について語ることは自己の青春を語ることもある」(『解説——時代色に生彩を放つ』『私の酒——『酒』と作家たちⅡ』前掲)と述べている。明日のことを考えずに酒が飲めるのは、青春時代の特権であるだろう。酒の味とともに、ほろ酔い気分で友人たちと止めどなくしゃべり続けた享樂や、失敗の数々は、時代や場所の違いを越えて、また立場を超えて、酔いどれたちが共有できる若き日の幸福の感覚である。

最後の『文士の食卓』は、『あまカラ』(甘辛社 一九五一年、六八年)などの雑誌等から選りすぐった、作家たちの食に関するエピソードを集めたものである。室生犀星や泉鏡花、坂口安吾や太宰治といった名立たる作家たちの食卓模様を共通テーマとして、家族や親しい友人らが垣間見た文士たちの逸話が収録されている。危篤に陥った夏目漱石の最後の言葉が「何か食いたい」であつたことを記す夏目伸六「一匙の葡萄酒」(『文士の食卓』前掲)や、芥川龍之介のお汁粉好きについて書かれた小島政二郎「食いしん坊」(『文士の食卓』前掲)など、文学者たちの飽くなき食欲がありありと描かれていて興味深い。

浦西氏は、『文士の食卓』の編集作業中であつた二〇一七年一月一六日に逝去された。本書の解説を書くことも叶わず、完成を見ることもできなかった。生涯で最後に取り組んだ仕事の一つであつたともいえる酒食と文学の関わりへの探求について、我々はどのように評価できるだろうか。

その意義の一つは、食味雑誌の書誌研究や、文学者たちの食や酒に纏わるアンソロジーの編集によって、文学研究の裾野の広さを後学に知らしめたことである。真銅正宏『食通小説の記号学』（双文社出版 二〇〇七年）が詳述するように、文学と飲食の関係は実に深い。だが、文学研究において、酒食のテーマは周縁に配置され、中心的な課題となることは稀であった。浦西氏が残した成果は、そうした現下の文学研究の空隙を埋める意味を持つものであり、人々の食や味覚の考察を通して、文学が置かれた場の様相をより鮮明にしていくための基礎研究として我々の目の前にある。

もう一つ大きな意義として考えられるのが、文学研究者ではない人々に、酒食を通して、文学という領域が存在することを知らしめたことである。『食文化・味覚雑誌目次総覧』を図書館で探そうとすると、本書は日本十進分類法（NDC）で分類される文学（9類）ではなく、多くの図書館で衣住食の習俗（3類）か衛生学（4類）、あるいは食品・料理（5類）に関する参考書として請求番号が付与され、我々が普段、文学の文献情報を調べに行く場所とは異なる棚に配架されていることが分かる。つまり本書は、文学研究者よりも、民俗学や家政学を学ぶ人たちの目に触れる機会の方が多いと考えられるのである。本書を手取る者は、これを文学研究のための参考書とは考えずに利用しているかも知れない。

翻って考えてみれば、私は自身が文学を研究しているために、

これを文学研究のための参考書だと思い込んでいただけなのである。酒食や味覚に関する雑誌群が、文学研究のためだけにしか役立たないなどということはあり得ない。食べることや飲むことは、生活や文化そのものであり、往事の風俗や社会を知る上で重要な手掛かりとなるものである。文化研究や社会科学の側から飲食の問題を検証しようとした際、種々の雑誌やアンソロジーに残された文学者たちの妙々たる随想は、有用な情報資源となるはずである。

※ ※ ※

以下は個人的な回想であるため、浦西先生と書く。

私が浦西和彦先生と酒食をご一緒したのは数えるほどで、いずれも学会や研究会の打ち合わせ・懇親会の席であった。お酒を召し上がった浦西先生は、少し顔を赤らめ、普段より心持ち饒舌になって、文学研究や大学のことについて語っておられた。特に印象に残っている酒席は、二〇〇八年九月二五日のことで、場所は居酒屋チェーン店の酔心京都駅前B1店であった。日付と場所を記憶しているのは、ここで日本近代文学会関西支部の企画委員会を開催し、浦西先生に初めてお目にかかったからである。出席者は、浦西先生と木村一信先生、そして三谷憲正先生と私の四人であった。

これは、日本近代文学会関西支部と韓国日本近代文学会が共

同企画した「海を越えた文学（１）——日韓を軸として——」を実現するために、木村先生と私で、浦西先生と三谷先生にご助力をお願いするために集まったものであった。当時、ポスドクであった私は末席に坐して、企画の実施に向けた相談はもちろん、浦西先生はじめ諸先生方がお酒の勢いで思わず口を滑らせる愉快な話を楽しく聞き入っていた。

席上、海外の学会との交流のためにご協力をお願いしたいと申し上げた時、浦西先生は「そういうのはこれからどんどんやっていくべきや」と直ちに賛意を示され、学会の開催会場を探しているという私の話にも即答で、「関西大学でやったらええ」と仰った。私は関西大学の他の先生方の顔を思い浮かべながらも、酒の勢いもあったのか、たいへん心地よい浦西先生の決断の早さにうれしくなったのを覚えている。その後もこれからの学会の在り方や研究の現状について話は尽きなかったが、具体的な内容は酔いも回って臆気にしか覚えていない。確かなのは、浦西先生は常に今後のことを考えていたということである。

浦西先生は、将来の研究のために多くの種を蒔いた。そのなかでも、確かな事実を調べ上げた成果は、幾つもの書誌研究の業績として我々の手元に残されている。中野重治は、浦西先生の研究姿勢に言及して、「浦西自身の、あくまで面倒な、正確を期して自分の時間と足とでした事実調査の結果を具体的にさしだすこと」について、「事実しらべというのはこうもありがたい」と高く評価した（中野重治「緊急順不同 事実しらべの必要のこと」

『中野重治全集第二十四巻』筑摩書房 一九九八年、初出は『新日本文学』一九七七年六月）。浦西先生が膨大な手間と時間をかけてまとめ上げた事実はどう向き合い、いかに活用していくか。それは、我々自身のこれからの研究によって応えていかなければならないことである。

編集後記

二〇一六年九月に第四号を刊行してから三年もの月日が経ってしまったが、ここによりやく第五号を完成することができた。早くに原稿を下さった執筆者の皆様、辛抱強く見守ってくださった会員諸氏にお詫び申し上げますとともに、編集へのご協力を感謝申し上げます。

今号は浦西和彦先生の追悼特集を組んだ。本研究会の前身ともいえる貴司山治研究会でお世話になり、その後、本研究会メンバーが中心になって浦西先生所蔵資料を調査・撮影させていただくなど、直接の教え子ではない我々にも温かく接してくださいました。先生のご逝去はあまりに大きな痛手であるが、ご研究を後代に引き継ぐために何ができるかと考え、本特集を企画するに至った次第である。諸氏の論考からは浦西先生のお仕事の幅広さ奥深さはもちろん、研究者としての立ち居振る舞いやお人柄もうかがえ興味深い。ペテランの方々には浦西先生のお仕事を

ふり返るよすがとして、あるいは若い方々にはこれから先の長い研究の道筋を照らす光として本特集がお役に立てば幸いである。

*

以下、編集長兼元代表として述べることをお許しいただきたい。

占領開拓期文化研究会は二〇一〇年六月に設立され、本誌創刊号を二〇一三年三月に刊行した。この間、創立時の常任幹事（伊藤純・友田義行・内藤由直・村田裕和）が、代表・副代表・編集長を分担しつつ、会員の皆さんの協力を得て会を運営してきた。

研究会活動は同志社大学・立命館大学を中心としつつ年々活発になり、ここでの切磋琢磨を経て学会にデビューする人も増えてきた。私も記憶があるが、初めての学会発表は緊張というよりも恐怖に近いものがある。私の場合、同日に発表した一人の先輩だけが唯一の顔見知りだったが、それでもどれだけ心強かったことか。もし、この研究会が他大学の院生・研究者たちと交流するきっかけとなり、その結果、少しでも自信と勇気をもって学会発表にのぞむことができたのであれば、創

立メンバーの一人として望外の喜びである。

一方、創立時からのメンバーの多くが就職などで各地に散り、京都を拠点とする活動を十分にバックアップすることが難しくなってきた。

そこで、二〇一八年度に常任幹事をのぞく古くからの会員諸氏に依頼して検討委員会を立ち上げてもらい、会の存続もふくめてゼロベースで議論してもらった。常任幹事はこの議論に関して、一切口を出さないことを申し合わせた。

一年後、幸いにも会は存続する、雑誌も引き継ぐとの報告を受けた。新常任幹事は泉谷瞬・池田啓悟・高木彬・福岡弘彬の各氏で、代表は泉谷さんとのことである。また編集委員会は、和田崇（編集長）、藤原崇雅、坂堅太、佐藤貴之の各氏と聞いている。二〇一八年度末をもって研究会は一つの区切りを迎えたわけであるが、今後も新しい体制のもとで充実した研究活動が展開されることを願っている。

以上のような経緯により、二〇一九年四月より新体制での運営がスタートしているが、

この第五号の発行は二〇一八年度の事業であるため、旧編集委員会が刊行までの責任を負うこととなった。本誌の奥付が「二〇一九年三月二〇日発行」となっているのはこのような事情によるものである。会員および読者諸氏のご了解を願う次第である。また特に、本誌掲載の藤原崇雅氏の論文「古典解釈の弁証法」は二〇一八年九月二七日に、資料紹介「武田泰淳『日本文学的命運』の紹介と翻訳」は同年一〇月二四日に受理したものであることを明記しておきたい。編集作業の大幅な遅れにより、早くに原稿を提出された藤原氏に多大なご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げる。(村田)

▼研究会活動記録

第23回占領開拓期文化研究会

日程 二〇一六年八月二〇日(土)

会場 立命館大学衣笠キャンパス 清心館

501号教室

・岩本知恵「安部公房『赤い繭』——変形する皮膚、変形する身体認識」

・朴仁聖「中野重治『雨の降る品川駅』——

改造版への考察を中心に——」

・栗山雄佑「目取真俊『面影と連れて』論

——暴力への怒りを生み出す身体について

——」

・伊藤純「作家同盟第二回大会での〈芸術大衆化論争〉の再燃——新発見資料・貴司山治自筆提案書をめぐって」

第24回占領開拓期文化研究会

日程 二〇一六年十二月二七日(火)

会場 立命館大学衣笠キャンパス 究論館B

レゼンテーションルームB・C

【研究発表】

・小玉健志郎「田沢稲舟『唯我独尊』論」

・坂堅太「戦後アヴァンギャルドのみた大衆社会——「記録芸術の会」の〈大衆〉観について——」

【合評会】

・坂堅太著『安部公房と「日本」植民地／占領経験とナショナリズム』(和泉書院)

(コメンテーター) 岩本知恵、内藤由直 (著者) 坂堅太

第25回占領開拓期文化研究会

日程 二〇一七年三月二五日(土)

会場 ウィングス京都 ビデオシアター

・八原瑠里「頭ならびに腹」論」

・秋吉大輔「受験雑誌『高3コース』『高1コース』における詩行為——寺山修司の「文芸欄」

・藤原崇雅「武田泰淳『風媒花』論——J・P・サルトル『自由への道』の影響をめぐって

——」

・泉谷瞬「皆川博子「トマト・ゲーム」論」

第26回占領開拓期文化研究会

日程 二〇一七年八月二七日(日)

会場 同志社大学室町キャンパス 寒梅館6

階大会議室

・坂崎恭平「永井荷風『冷笑』論——プレテクトの検討を手がかりとして——」

・伊藤純「物語」と「読者」を繋ぐものについて
の考察——中野重治「春さきの風」、小林多喜二「テガミ」、村上春樹「蜩」から」

・中井祐希「横光利一「厨房日記」論」

・加藤大生「(パン・フォーカス)の歴史認

識——花田清輝「画人伝」論

一回経過報告

・林麗婷「小田嶽夫『望郷』試論」

第27回 占領開拓期文化研究会

日程 二〇一八年一月二一日(日)

会場 立命館大学衣笠キャンパス 清心館

503号教室

・ヴレタ・ダニエル「武田麟太郎「ある除夜」について」

・藤原崇雅「武田泰淳『中国忍者伝 十三妹』における白話小説の受容」

・轟原麻美「〈明治百年〉における小説と歴史学——司馬遼太郎『坂の上の雲』論」

第28回 占領開拓期文化研究会

日程 二〇一八年三月二五日(日)

会場 同志社大学今出川キャンパス 弘風館

47番教室

・奥村華子「語／騙られる炭鉱——井上光晴『虚構のクレーン』を中心に」

・井上大佑「ゲストからキャストへ——筒井康隆「ベトナム観光公社」論」

・伊藤純「『プロ運動資料集を読む会』の紹介——山田清三郎アンケートを読む会第

第29回 占領開拓期文化研究会

日程 二〇一八年八月二六日(日)

会場 立命館大学衣笠キャンパス 究論館B

レゼンテーションルーム

・佐藤貴之「伊藤整「鳴海仙吉」のアイロニー——「得能五郎」との関係から」

・松井佑生「吉井勇日記を通して見る占領期京都」

・栗山雄佑「〈証言〉と〈ノイズ〉をめぐる——沖縄文学における性暴力の記憶」

第30回 占領開拓期文化研究会

日程 二〇一八年十二月二九日(土)

会場 同志社大学室町キャンパス 寒梅館6

階会議室

・王洋「阿部知二の〈上海もの〉における新女性——田村俊子・関露・雑誌『女声』との関連性を手がかりに——」

・森祐香里「池田みち子「腐肉」論」

・倉地悠「吉行淳之介「決闘」に見る病いの実体化のプロセス」

占領開拓期文化研究会会則

総則

第一条（会の名称）

本会は占領開拓期文化研究会と称する。

第二条（会の本部）

本会は別表に記載の代表幹事の所属研究室内に所在地を置く。

第三条（会の目的）

本会は昭和期日本とその周辺地域の占領と開拓に関わる芸術・文化の研究を目的とする。

第四条（会の事業）

本会は第三条の目的を達するために次の事業を行う。

一、研究発表会の開催。

二、機関誌の刊行。

三、その他必要と認められる事業。

会員

第五条（会員の資格）

本会は第三条の目的に賛同する個人および団体の会員をもって構成する。

第六条（会費の納入）

会員は付則に定める会費を負担するものとする。

第七条（会員の活動）

会員は本会の事業に参加し、機関誌の配布を受ける。

役員

第八条（役員）

第四条の各事業を遂行するために次の役員をおく。

代表幹事 一名

常任幹事 若干名

編集委員 若干名

研究会幹事 一名

監査 二名

第九条（役員の任期）

役員の任期は二年とする。但し研究会幹事は研究発表会ごとに改選する。重任および兼任を妨げない。ただし監査の兼任は認めない。

第一〇条（役員の選出）

役員は総会において選出する。

総会

第十一条（総会）

総会は年一回開催し、当該年度の事業および翌年度の事業その他の事項について審議決定する。但し必要に応じて代表幹事は臨時総会を招集することができる。

会計

第十二条（経費）

本会の経費は会費・投稿料・寄付金・その他の収入による。

第十三条（会計報告）

会計報告は総会において行う。

第十四条（会計年度）

本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月末日に終わる。

会則の変更

第十五条（会則の変更）

会則の変更は総会において行う。

設立年月日

第十六条（設立年月日）

本会の設立年月日を平成二二年六月一日とする。

付則（略）

「この会則は二〇一三年九月一日より施行する。」

フェンスレス 第5号

2019年3月20日発行

編集兼
発行人 占領開拓期文化研究会代表 村田裕和

発行所 北海道教育大学旭川校 村田裕和研究室内
占領開拓期文化研究会

(〒070-8621 北海道旭川市北門町9丁目)

ホームページ <http://senryokaitakuki.com/>

ブログ <http://senryokaitakukibunka.blog.fc2.com/>

メール senryokaitakukibunka@gmail.com

印刷所 洛西プリント社